
東方異界伝

LEDライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方異界伝

【Nコード】

N2464W

【作者名】

LEDライト

【あらすじ】

時代と共に消えゆく妖怪達。だが、世界には再び妖怪達が生まれ初めている。そんな中、少年は半分妖怪となり、幻想郷の扉をこじ開けた。

館のメイド長に、主人の友達。沢山の仕事仲間と主人の妹。そんな環境で仕事をする主人公は、どんな影響を及ぼすのか？

（元の題名は、幻想郷での生活です）

霧の湖（前書き）

「ようやく見つけた・・・」

ある猫と共に途中まで歩いて、俺は人気の全くない神社にたどり着いた。背中にリュックと刀を背負い、ガンベルトには銀色に輝く奇妙な大型拳銃を差し、その姿はどうみても何かと戦いに行くような姿だ。

実際、戦いに行くのだ。己の呪いを解く為に。

決意を胸に歩き始めると、何かが俺の腕を掴んでそのままぶん投げやがった。

「え、うおおおおお！！？」

気持ち悪い浮遊感と共に、俺は凄まじい勢いで吹っ飛ぶ。

その時に見えたのは、俺に背を向けて大剣を構える少女と、その少女に襲いかかる黒いオオカミだった。

目覚めるのは、ここからもっと遠く離れた場所で、目的地からは大きく離れてしまっているのであった。

霧の湖。

顔にひんやりとした氷が当たり、俺は意識を取り戻した。目を開けてみるとそこは湖のようで、ぽかぽかと太陽の光が差しているが、水温は氷水のように冷たい。そんな湖の水面に、俺はぷかぷかと浮いていた。

「・・・寒ッ！」

幸い足が着く深さだったので、寒さで自由に動かせない体に鞭を打ち、湖から脱出する。そして地面に大きく寝転び太陽の暖かさで体を暖めることに専念し始める。

何故自分はこんな場所にいたのだろうか？そんな疑問を浮かべる頃には、真上にあった太陽が45度傾いてからだった。

服は完全に乾き体温も普通までに回復したが、下手したら自分は・・・と考えると、もう寒くはないのに体が震える。

ここはどこなのだろうか？

周りを見渡す限り、霧に包まれてよく分からないがここは湖で、湖の真ん中辺りに大きな屋敷が建っている。ようやく結界を抜けたかと思ったら飛ばされてしまい、こんな湖の所まで来たようだ。

「趣味悪い色してるが・・・館に人は居るのか？」

もし人が居るのだったら聞けばここがどこなのか分かる。運が良ければ泊めてくれるかもしれない。とりあえず屋敷へ向かう為に、ふらふらりと歩き始める事にする。何やら後ろを着いてくる変だ奴がいるが。

歩き初めて数分、耳を引っ張られる感触があり、引っ張ってくる小さい何かをつまんでみる。

引つ張つてきたのは手の平サイズの可愛い妖精のようだ。わーきやーと叫びジタバタと動いていたので、離してやるとなにより怒った顔で此方を向き、仲間を呼び始めた。
嫌な予感しかしねえ。

ゆつくりと後ろを向くと、大勢の妖精どもが群れを作り、まるで一つの塊のように突進してきた。

「ちょ、待て、話し合いを・・・」

言い切る前に顔面に妖精の塊がぶつかり、大きくぶつ倒れる。不覚にも、情けない声を出しながら。

「わっ、ちょっ、やめっ、あー！」

チャンスとばかりに耳を引つ張るのも居れば、顔をポカポカ殴ってきたりポケットに入り込んだり、拳げ句の果てにはズボンの中に入り、もぞもぞ動くのもいる。

「ス、ストップストップ、何かマズい！」

もみくちやにされるが所詮はミニサイズの妖精。少し力を入れて妖精達を弾き飛ばし、一瞬の隙を逃さずに立ち上って走る。

「あ あ あ、初っ端から運がねえ！！」

きやつきやつはしやぎながら突撃する妖精、それを避けながら逃げる俺。こんな事になるとは数分前の自分は思ってもみなかつただろう。

このまま湖周辺を走ってたらまた氷水みたいな水面へダイブするかもしれない。幸い妖精共は素早い、直線的な体当たりしかない。
「なら、進路変更だ」

森へ一直線に突き進む事に。飛び移りそのまま大ジャンプして他の木に移り、またジャンプして木に移る。

こうして此方も素早く動いてみるがあちら側は数が多い上に、森の妖精だ。多少スピードは落ちてはいるが、木と木の間をかくぐつて追い掛けてくる。

地面へ降り全力で駆けるが、向こうは鬼ごっこを楽しむかのように笑顔で飛んでくる。これで一つ分かった、妖精達は幼稚な子供達っ

て事が。

「勘弁してくれえええ！」

森に俺の叫び声が響くが、誰も助けてはくれなかった。神は無情である。

この後数時間も走って妖精を諦めさせて、疲れ果てた体と眠気と戦いながら俺はぶらぶら歩いていた。

歩き初めて数十分経っているが未だに森から抜け出せない。どうやら見事に迷ったらしい。

ふと、馬鹿デカイ胸ポケットを見ると、何かが入っているみたいだ。取り出してみると、銀髪の小さな女の子がすやすやと気持ち良さそうに眠っていた。

背中に小さな羽が生えているから、先ほどもみくちやにされた時にポケットに入っていた奴だろう。

「・・・？」

目をゴシゴシこすり、首を傾げて此方を見る。おおう、可愛い。

「お前、名前は？」

名前を聞いてみる。すると妖精の女の子は、じいーっと此方を見つめるだけで、何も言わない。

「名前、無いのか？」

コクンと頷く。うーむ、どうすりやいいんだ？何かを伝えたそうな目でじっと見つめてくるだけだ。

「あー、名前付けて欲しいのか？」

肯定。コイツは喋れないのか、さっきから頷くだけ。コミュニケーションが取れているだけマシだろう。

「あー・・・シールってのはどうだ？」

肯定。それでいいと言わんばかりに首を二回ほど振ったので、その

名前にしてやる事に。

「じゃ、お前はシールだ」

すると、喜びを表現するかのように、指に抱きつく。少し柔らかい
感触が指に伝わったが、このサイズじゃなあ・・・

さて、まだ何か伝えたそうに見つめてくるが、何を伝えたいんだか
はさっぱりわからん。

（会話できないって案外面倒くせえ）

霧の湖 (後書き)

初めて小説を書きましたが、これほど大変だとは思いませんでした・
・
駄文ですが、頑張って書き続けたいと思います。

人形屋敷（前書き）

「お前が何か言いたいのは分かるが、俺は心なんか読めねえ。まあ、せめて行動で示して欲しいって言うか・・・」

するとシールは羽を広げて飛び、どこかへ飛ぶ。大体2m程離れた所でホバリングし、また何かをつたえようと、またじいーっと見つめてくる。

シールの後を追いかけてみると、此方に合わせた速度で飛び、止まってみるとシールも止まってまた見つめてくる。まるで、道案内をしているかのようなのだ。

「着いてこいつて意味か？」

すると、シールは手で大きく円を作る。肯定の意味だろう。走って追いかけると、やはり速度を合わせて飛んでくれる。まるでゼルダの伝説にでる妖精だ。

「ガイドさんか・・・しかし、変わった妖精だ。」

妖精の大半は頭が弱く、自分勝手に悪戯好きだと聞いたが、シールはこれに当てはまらない。とても頭のいい妖精、それが妖精ではない別の何かなのだろうか？

考え事をしながら後を追いかけると、森の奥に一軒家が建っているのだろうか。建造物が見えてきた。

建造物が見え始めたと同時に、シールはホバリングを始め、建造物が見える方向を指差す。

「あっちに行けって言うのか？」

肯定。シールは俺のところまで飛んでいき、大きい胸ポケットへ入る。器用に内側からボタンを締めて。

シールと名付けた妖精。なぜここまで協力するかは分からないが、懐かれてるとでも考えればいいのだろうか。だったら俺は、保護者ってことになるのかな。

「変な妖精も居るもんだ・・・まあ、案内してくれたのは感謝するよ、

ありがとな。」

もぞもぞと動き、シールは顔を出す。ドヤ顔だった。

人形屋敷

気づいたら、とつくに夕方になっていて、辺りはすっかり暗くなっている。ふとシールを見てみると、首をポケットから出したまま眠っていたので、頭をポケットへ入れてやった。

建造物にたどり着いたが、少し訪ねるのに抵抗がある。窓から、人形が働いているのが見える。訪ねたと同時に襲われたりしないだろうか。

戸惑いながらも、玄関をノックする。すると、人形を抱えた金髪の女の人が出てきた。

「あのー、迷ってしまったのですが、道とか教えてくれませんか？」すると、奥から数人の人形が来て、女の人の後ろへ立つ。

「この道を通つ直ぐ行けば森を抜けますけど・・今日はもう遅い時間帯です、ここに泊まっていてください」

「あ、ではお言葉に甘えて・・邪魔します」

どうやらとてもいい人みたいで、道案内だけではなく、宿まで貸してくれた。野宿には慣れてはいるが、外よりも中の方が限りなく眠りやすい。

シールも起きたみたいで、ボタンを外して此方を寝ぼけた顔で見ている。

「宿確保だぞ、シール」

肯定。俺は靴を脱いでお邪魔しようとする、人形が数人、両手を差し出した状態で止まっている。刀を渡してみると、人形達は刀をどこかへと運び始めた。便利だなー、この人形達。人格でもあるのかね？

女の方は、アリス・マーガトロイドと言う魔法使いのようで、とても親切な人だ。夕食だけではなく、風呂まで入れてくれた。

夕食や荷物運び、それらの事をやったのはすべて人形だったので、

人格が宿っているのではないかと思っただ、本人曰わく「自分で操っています。祭りの時には人形劇を披露するんですよ」との事。

みんな人間らしく動かしているが、全員の体を良く見ると、魔力を感じる糸が垂らしてある。数十体の人形をここまで動かすのは凄いが、この領域まで行くと些か不気味だ。

本人は人形動かすのに集中しているのか、話しかけてもあまり会話が續かない。気まずい空間に耐え切れず、俺は荷物の運ばれた部屋のベッドに座っている。

その部屋は、使っていない人形を置く場所のようで、数体の人形が棚に置かれている以外には、特に変わった様子のない部屋だ。

シールはと言うと、棚の人形を突っついてみたりと、興味津々のようだ。

こうして見てみると、やっぱり妖精らしく、好奇心旺盛なんだなーと思う。彼女について、未だに良く分からない事が多いが、以外に子供っぽさがある事に気づいた。

ふと、シールが見つめている事に気づいた。俺は現在、絵日記を書いている、その日の出来事とその出来事に関する絵を描いている。かなりデフォルメされた絵だな。

描いている絵は、シールとの出会いとアリスさんの家の人形の一体。シールは何か興味深そうに見ていたので、おいでと手招きする。

コクンと頷き、ふわーっと日記帳の前まで来て、小指に座る。

「これは、シールの絵だ。今日会った出来事で一番印象深かったかな。そして、これはそこにある棚の人形。わかるか？」

肯定。

「お前、頷いてばっかだな。もっと分かりやすい会話方法とか無いのか？」

ちよつと考える仕草をして、立ち上がる。どこへ行くのかと目で追ったら、ペンに向かっていた。すると、ペンをホウキのように持ち、何か字を書き始める。

わたしはしゃべれません。でも、あなたといっしょにいたいです。

一生懸命書いた字がそれだった。子供らしい、無邪気な笑顔でこちらを見て、腕に抱きつく。妙に父子本能をくすぐられ、頭を小指で撫でてやると、気持ちよさそうに目を細め始める。

無言だが、嬉しそうにニコニコと笑い、腕に抱き続けているシールに、ちよっただけ愛しさを感じて、シールが眠るまで静かに頭を撫で続けた。

スカーフを布団の代わりにしてそつと寝かせ、持っていたハンカチをシールに乗せ、寝かせる。

窓の外は、月見にはふさわしい満月の光で満たされ、現代人では見ることができない幻想的な雰囲気醸し出している。

「・・・本当に解けるのかね」

自身がここに来た理由、それは五歳の頃に妖怪の呪いを受け、半身半妖になってしまった事だ。

代々受け継ぐ能力に加え、妖怪の魔力を使えた俺は、かなわない悪霊など無いに等しかったので、中学の頃は除霊とかでしこたま稼いだ。

しかし、妖力を酷使するにつれ、人を維持する事が出来なくなってきたので、ここまで来る準備をして家を飛び出し、死にかけの神様の案内でここまで来れた。

「呪いが解ければよし、解ければ・・・」

俺は社会に出れず、ここで暮らすしかない。

「まあ、それはそれでいいと思うな」

月光を浴びながら、ポツリと呟き、俺は眠りについた。

人形屋敷（後書き）

朝日に照らされ、心地よいまどろみが俺を包む。なにやら柔らかい感触があるので、目を開けて腕を見ると、腕に抱きついて眠る、シールの姿があった。

頭を小指でつついて見ると、ぱっと目を覚まし、慌てて離れ、あたふたとし始めた。

何というかもう、小動物みたいで可愛い。絶対ペットショップに居たら凄まじく売れる。

小指で頭を撫でてやると、顔を赤くしてじいーっとこっちを見てくる。

「おはようございま・・」

固まるアリスさんと俺、ニコニコ笑いながら軽く噛みつくシール。

「・・あなたも人形好きでしたか」

いや、アリスさん。何か冷たい目で見ないでください。何か凄い誤解されているような気が。

「いや、これは人形ではなくて、ただの妖精ですよ!？」

「ああ、別に構わないんですよ。仲間が出来たみたいで嬉しいですし」

生暖かい視線を受けながら、必死に弁解をして、ようやく理解してもらえる頃には、朝食を取り終わった頃だった。

「この道を真っ直ぐ行くと、人間の里へ行けます」

アリスさんは、そう教えてくれた。

「えっ、この道真っ直ぐ行けば行けるんですか？」

「はい。途中で道具屋さんがあるので、そこから里が見えますよ」
そう言い、俺の刀を渡してくるアリスさん。

「分かりました。アリスさん、お世話になりました」

そうついて、お辞儀をする俺。シールも頭の上にしがみつきながら、

ちょこんとお辞儀をする。

「どういたしまして。今度は、迷わないでくださいね？」

と、軽く頭を下げ、そう言うアリスさん。

アリスさんに見送られ、一晩世話になった人形屋敷を後にする。また来たら、何かお礼の品でも持って行くかなー、と考えながらリュックと刀を背負い、道のりにそって歩き始めた。

ある程度歩いてから、シールが頭から離れ、2mほど離れる。昨日は能面のような表情で案内してくれたが、今回は楽しそうな顔で案内してくれている。

昨日の夜、寝かしつけたのが原因だろうか、さらに懐いた様子だ。シールは一緒にいたいと言ったので、本人の好きにさせている。しかし、なぜここまで気にいられたかは今のところ、はつきりとはわかっていない。旅は道連れとか誰か言ってたような気がするが、まさにその通りだと俺は実感したのだった。

キャラクター紹介（前書き）

番外編のキャラクター紹介です。

主に主人公や、主人公に深く関わったキャラクターの設定、本編で語られなかった部分が本編の進み具合によって変化しながら紹介していきます。

キャラクター紹介

「写宮 光介」
うしみや こうすけ

この小説の主人公。黒髪で、身長は148cmと低め。妖怪化が進んでいる影響で、妖怪に勝る瞬発力と体力、頑丈さを持つ。

現在は完全な妖怪となり、缸魔館で働いている。

家は猫を神様として崇める寺で、その家に代々伝わる特殊な能力を受け継いでいる。

能力は、合成と強化をする程度の能力。

触れた物を材料とし、合成、強化、形を変える、選択した成分の塊を取り出すなど臨機応変な能力。木から水分のみ取り出して枯らさせたりもできる便利な能力。

キメラを作ったり、妖怪などから魔力を取り出して爆弾を作ったりと、場合によっては危険なので、必要なければ本人は使用しない。

木から砂金を作るなどの芸当も出来るが、金儲けに使うと能力を失ってしまふらしい。妖精に好かれやすく、良く悪戯されて道に迷うマジックアイテムの拳銃と、敵の魔力などを吸う鬼切を使い、中々近距離戦を得意としている。

「本編で語られていない設定」

外の世界では幼少の頃、銃や剣を作って捕まった事がある。また、キャンプ好きで、本編では湖に落ちた時に落としてしまったが、テントなども持ってきていた。

「シール」
しーる

本編のヒロインとも言える妖精の女の子。身長は60cmで、16歳ぐらいの女の子をフィギュアにしたと考えればいい。

転生しようとした魔法使いが、大きなミスをしてしまい、転生はできただけ魔力は全く関係のない生まれようとしていたシールに受け継がれてしまったらしいが、本人は知らない。

能力は魔法を使う程度で、どの魔法も桁違いに大きく、とても強力になるはずだが、本人は魔法の使い方を全く知らない為、ゴミ能力になっている。

多少の攻撃はできるみたいで、拡散するエネルギー弾を撃って戦う。

「本編で語られてない設定」

光介と行動を共にしたきっかけは、光介が妖精にもみくちやにされていた時に、最初は顔を叩いていたが、胸ポケットに興味を示して中に入っただけで、光介が走りだしてしまった。

最初は出ようにも出られず、ただポケットに入っただけだが、そのうちに寝てしまう。そして起こされて改めて光介を見た時に、淡い恋心を抱いたため、行動を共にしている。

「ジャック」
ジャック

本作で地味に活躍する人形。カボチャ頭とナイフが特徴。有名な切り裂きジャックが取り憑いていた人形だが、シールが魔力を注いだ時に、霊が体から追い出されたので、全く無害な人形になった。

能力は特になく、あえてあると言うならば、主人の命令を聞く程度の能力。得意技は誘導するエネルギー球で、そこそこの威力があるので、結構強い。

「本編で語られてない設定」

実は、カボチャの中身はダンディーなおツサンである。光介は中身を見てはいないので、未だに気づかれていない。

人間の里。（前書き）

魔法の森と言うのかねえ。ここら変に生えている奇妙なキノコは、魔力を少し持っているので、調べる為に幾らか摘み取ってみる。

「シール、たくさん取るのはいいが、そろそろリュックがパンパンになるぞ」

シールも楽しそうにキノコ狩りを手伝ってくれて、スカスカになっ
てしまったリュックサックが、色々なキノコで埋まってゆく。

おっと、突然だがここで説明をしよう。俺は代々伝わる能力、合成
や強化ができる能力が使える。何やら俺のご先祖様は、白い猫の神
様を助けて、その神様の力を貰い受けたそうだ。

貰い受けて以来、俺らの家系の人間すべてに、その能力が備わるよ
うになったそうだ。最も、何かしらの方法で開花させないと使えな
いらしいが。

その能力を使えば、触れた物の成分は全てわかる。そしてその成分
を一旦塊として取り出し、他の物へ合成したり、形を変えたり出来
る。

その能力のおかげで、キノコに何が入っているかが分かる。幻覚作
用の働きをする何かと、魔力がある以外シイタケと似ているって事
が分かる。

シールは本当に微力だが、毒入りのキノコを美味しそうに生で食っ
ている。ああ、こんな場所で生きてるから普通に食えるのかと少し
納得するが、人形サイズの生物には大丈夫なのかね？

俺の視線に気づいたのか、シイタケもどきのキノコを笑顔で渡して
くる。

「くれんのか？なら頂こう」

生で喰うのに抵抗はあるが、はい、あーんと言わんばかりの笑顔で
渡されたら、喰うしかないだろう。一口かじって、数回噛む。

「・・・キノコだな」

少し土の味がするが、シイタケと同じ味がする。やっぱりこれ、この土地特有のシイタケかね？

シールは嬉しそうにくるくる飛び、一口キノコを食べる。こうも平和らしいのが続けばいいんだがねえ。なんかここらへんの空気、外の世界とは若干違うんだよね。何故だか知らんが、妖気が漂ってるし、幻覚作用がある粉が舞っている。ああ、これはシイタケもどきの孢子か。

何故だか知らないが、俺は平気だ。しかし、問題はシールだ。くityと力の抜けた顔をしていて、とても危なっかしい飛び方をしている。

「酔っ払ってんのか、こりゃあ」

なんというかもう・・・千鳥足みたいだ。

多分、キノコを食ったのがヤバかったんだろう。酔っ払いみたいになっけて少し面白い。

これ以上は見てられないので、左手でシールを掴み、胸ポイントへ入れておく。

「真っ直ぐ行けばいいと言ってたが・・・本当に大丈夫かねえ」

ずーっと歩きっぱなしで、もう太陽が真上に来ている。

（面倒くさい森だな・・・どこまで飛ばされてんだよ、俺。ここまでぶん投げた女、絶対に仕返ししてやる）

過去を恨んでも仕方ないが、ここまで歩いても何も無しじゃ、うんざりしてくる。木、木、木、そして木。木ばかり見ていると本当に気が狂いそうになる。

「あゝ、いつになったら着くんだよぉ!!」

イライラが最高点に達してしまい、思わずそう叫んでしまったが、誰もその声を聞く者は居なかった。

結局、数時間も歩く羽目になってしまふ事に。神は無情である。

人間の里。

ようやく森を抜けた時には、イライラでどうにかなりそうだった。シールが幻覚から立ち直って、ポケットの中で昼寝していたが、気楽な奴だなとある意味関心。

「いやぁ・・・出れた、出れたぁああ！！！」

なんだろうか、凄い達成感がある。うん、完全に神経との戦いでしたからねえ、下手したら胃に穴空く勢いだった。だってこんな場所初めてだし、自分都会人だし。

シールはひよっこり顔を出し、きよろきよろと辺りを見回し、ポケットから出てくる。飛びながらこっちを向き、拳を突き出す。

「っし。やったな、シール」

こちららも拳を突き出して、それに答える。コツンとシールは拳をぶつけて、すっかり定位置になってしまったポケットへ戻る。

「お、店だ。」

コンビニとかだったらかなりいいのだが、見た感じコンビニではないらしい。

「んだよ、プリンとか食いたい気分なのに。」

精神的に凄く疲れているので、甘い食べ物でも食べたい気分だ。

「なあ、シール。人間の里の場所、分かるか？」

ポケットからちょこんと顔を出し、否定。

どうやらシールは、あの湖付近から遠くまで離れた事がないようだ。

「・・・と、見つけた」

店の近くの川を目で辿っていくと、なにやら建造物が見えた。多分、あれが人間の里なのだろう。

俺が本来行くべき場所は博麗神社なのだが、今は太陽が少し傾いてきたから、多分里に向かった方がいい。

こちらの地形なんか全然知らないし、迷ったりしたらそれでこそアウト。

「シール、ちよつと出てこい」

疑問を顔で、もぞもぞと動きながら出てくる。

「よいい・ドン！」

合図と共に、俺は駆け出す。あつという間にシールは見えなくなるが、追いかけてくる様子もない為、少し待つ。すると、案外速く飛んできて、少しむすつとした顔を浮かべる。

「いや、早めに行つて、情報を集めときたいからさ、急ごうと思つて。飛んで追いかける？それともポケットの中？」

ブーンと羽を飛ばたかせ、やっぱりポケットの中に入った。基本寝てばかりだなあ、コイツ。

ポケットのボタンを閉め、数時間耐えられるくらいのペースで走る事に。半妖になつてから、異常なほどの瞬発力を得たため、そう時間はかかりそうにない。まあ、かなり小回りがいい車だと考えればいいだろう。

車並みのスピードで山道を走るため、凄く風が気持ちいい。

ふと考えてみると、昨日から走ったり歩いたり繰り返した。外の世界では満足に走り回る事が出来なかったため、こうして走り回るのは始めてかもしれない。

全力で走る爽快感が楽し過ぎて、気がついたらあつという間に建造物に近づいていた。

「止まれ、止まれ！」

なにやら猫のような番人と思われる人物に呼び止められ、腰に力を入れて止まる。

「なんの用で？」

「お前、この里に何の用だ？見るからに怪しい格好をして。」
持っていた槍を首に突き出し、低い声でそう言う。

リュックサックに刀、パーカーにジーンズの格好だが、どこが怪しいのだろうか。

「いや、単純にこの里で聞きたい事があるんで、入ろうとしてただけだ」

「よそ者は信用できん。それにお前はここらでは見ない顔だ、入んなら荷物確認と武器を渡す事に同意しろ。」

そう、まるでお城の兵隊さんのように言う。しかし、何で妖怪だとバレたのだろうか。

リュックサックを番人さんに渡し、中身を確認させる。

「・・・化け物キノコなんか、何に使うんだ？」

リュックのキノコを取り出し、そう訪ねられる。

「化け物キノコって言うんですか、それ。森にいっぱい生えてたんで、積んできたんですよ」

全部キノコが入ってるだけだと確認し、番人さんはリュックを返してくれた。

「次は武器を渡せ。そうしなければ、ここは通せん」

「いいですけど・・・使わないで下さいね？」

刀をそのまま渡す。刀を受けとって、番人さんは

「ようこそ、人間の里へ」

と、元の場所に戻る。

この里は、あまり発展していないのだろうか、まるで歴史の教科書で見たような街中だ。街をふらついていると、団子屋とか寺子屋もある。

さて、どこから情報集めるかねえ・・・

見た感じ、妖怪とかもいる。猫が言ってた通りで、この里は人間と妖怪が共存してなりたっている。人間というものは、特別な力を持つ者、あるいは自身で理解できない生き物を嫌うが、ここの人達は当てはまらないようだ。

近くの、狐の妖怪と思われる女の子に話かける。

「あー、すみません」

「ん？」

「博麗神社ってどこにあるんですか？」

すると、狐のお姉さんは変な目で見て

「わかるけど・・・神社に行く気なら、止めておきな。私みたいな大

妖怪なら大丈夫だけど、妖怪が出る獣道を通らないと行けないよ」と言った。

人形とチヨコと野宿。（前書き）

お姉さんから聞いた話だと、獣道と言う場所は妖怪が多く、人間や弱そうな妖怪を見つけたら襲いかかられる、ならず者達の巢窟らしい。

「じゃあ、そこを突破すれば行けるんですね、博麗神社に」

「簡単に言えばそうだけど、子供には無理だよ」

ちよつと小馬鹿にしたような顔をして、お姉さんはそう答える。

「そうですか・・・では、止めておきます。ありがとうございました」
さつとその場を後にし、見知らぬ道をズンズン歩きながら、俺はむすつとした顔を浮かべる。

（なんだよ、俺はもう17も生きてんだ、子供じゃないぞ）

俺は子供扱いされるのが一番嫌いで、子供のくせにとか、子供には無理だとか、そんな小馬鹿にする発言は大嫌いだ。

一応言うが、身長とかは全く関係ないからな！

「ったく、どいつもこいつも、見た目判断かよ」

いつの間にかポケットから出てきたシールは、どこか心配そうな顔をして目の前をふよふよと飛んでいる。

「心配すんな、落ち込むほどじゃない」

軽く頭を撫でやると、どこか安心した表情を浮かべ、ふよふよと近くを浮遊する。ちゃんと後を着いてきてるみたいなので、特に気に掛けないで、門に帰ろうとするが・・・、問題が発生する。

「迷っちまったな、おい」

本日第一回目の迷い（道のり的な意味の）である。知らない土地をふらふら歩くと、すぐにこうなってしまう。

目の前に広がるのは、チンピラとかが集まりそうな路地裏っぽい場所、歴史の教科書で見た闇市みたいに、たくさんの露店が広がっている。

果物が置いてある露店もあれば、包丁から投げナイフらしき物まで

ある店もあり、どこかのRPGの世界にありそうな感じた。

「金あれば買えそうなんだが・通貨が違うんだよな」

一応、旅費として残った金があるが、幻想郷の通貨は全く見た事もない物で、どう考えても愉吉先生は役に立ちそうにない。

「そこのお兄さん！いい物売ってるから、ちよつと見てって貰えますかね？」

いつの間にかフードを浅く被った男がこちらを向き、大声を張り上げてこちらを見る。

まあ、見るだけならいいだろう。男が座っている場所に俺は向かう。

人形とチヨコと野宿。

その男の露店は、怪しいとしか言えない所だった。ナイフ持った人形、正体不明の鉱石、小さなガラス玉などが置かれている。

「いやね、この店は魔法使いを目指す者には凄く役立つ道具でいっぱいなんですよ。例えばこのガラス玉！これは魔力を集める性質があつて、いちいち化け物キノコを持ち歩く必要が無くなるんですよ、ホント！」

早口で商品の説明をする男。ジャパネットとかで、見て下さいこのボディとか言つてそんな感じだ。

「お兄さん、お兄さんから結構魔力感じるけど、お兄さん肉弾戦は苦手でしょう？そこでこの商品、自動攻撃人形！この人形に魔力を込めるとあら不思議、勝手に動いて攻撃してくれるんですよ！」

その人形はシールサイズの大きさなのだが、その人形から多少の血の臭いとか何かの存在が居る事に気づいた。

「ねえ、店員さん。何で中に悪霊が居るの？」

質問してみると、男のにやかな顔は一変し、鋭い目つきで此方を睨みつけた。

「お前、何者だ。解答しだいではただじゃおかねえ」

「んにゃ、ただの観光客だよ。まあ、悪霊とかを探知できるだけ。お兄さんの邪魔するつもりはないよ」

そう言つと、店員はホツとため息をつく。

「いや、ここはこういう品物を売る場所でな、たまに訳わからん奴らが来るんだ」

と、タバコをポケットから取り出し、店員はタバコを吹かし始めた。

「その人形、外の通貨でもいいなら買い取るよ」

万札を6枚出し、店員に聞いてみる。

「普通、まがい物だと思ったら、買う人なんかいないよ」

正気か、と店員は顔をしかめ、俺を見る。

「いや、どこか気にいったんで。外の通貨で買えますか？」

「・・・珍しい紙だな、よし、売るよ」

万札を渡すと、少し興味深そうに良く見て、人形を渡す店員。

「それじゃ、人形ありがとうございますね」

「お買い上げありがとうございます。また来た時には・・・色々揃えて起きますんで、買いに来てくれ」

「どうやら、上物の客だと思われたみたいで、怪しい笑みを浮かべ、男はそう言う。」

「ここの店は胡散臭さはあるが、道具は信頼できそうだな。この世界の通貨がある程度集まったら、また来るのもいいかもしれない。」

店を後にし、俺はシールに声を掛ける。

「シール、道覚えてるか？」

肯定。この人混みの中で、どう案内するかと思ったら、おもむろに頭に乗っかり、後ろ髪を引っ張り始める。

後ろを向いてみると、今度は前髪を引っ張って、そっちへ行けとシールは指示するので、どうやらこうやって案内するみたいだ。

シールの案内もあつてか、どうにか門まで戻れた。猫の門番さんから刀を返してもらい、人間の里を出る。

しかし、腹が減った。今のところ食糧となる物は、化け物キノコと呼ばれる奇妙なキノコしかない。

生で食べても何ともなかったが、とりあえず塩とかでもあればいいが、湖に落ちた際、塩が使えなくなったので、何も付けないで食べるしかない。

「あ、そう言えば・・・」

リュックの左側のポケットを開けて、中身を確認すると、溶けないタイプのチョコが入っていた。

外の世界の博麗神社へ行く前に、コンビニでもしもの為に5個ほど買った物で、小さい錠剤のようなチョコが大量に入っている物だ。

「うう、まさかこれを食べるとは思わなかったな」

主食として、兵種丸を大量に持ち歩いてしたが、これも湖に落ちた際に無くなっていた。

現在、まともな食糧はチョコのみ。早急になんとかしなければマズい。

「まあ、腹が減っては戦はできん」

3粒程を口に放り込むと、口の中にチョコ独特の口に残る甘さが広がる。チョコはあまり好きではないが、贅沢は言ってられない。さつさと飲み込んで、4粒取り出し、飲み込もうとすると

「・・・」

シールがじいーつと見つめながら、左腕の裾を握って、ちょんちょんと引つ張ってくる。

「欲しいのか、しかし、お前にはちと大き過ぎるぞ」

1粒割って渡してやると、シールは小さな舌でちろちろと食べ始める。

「ヤバイ、かわいい。リスみたいだ。」

シールの事を考え、少しスピードを落として歩いていく。

20分くらい歩いた所で、川に着いた。シールはもう食べ終えていたみたいで、顔をチョコでベトベトにしていた。

「おいおい、顔ベトベトだぞ。取ってやつからジツとしてろ」

手にシールを座らせ、指で少しずつ取ってやる。

幸い、川の近くだったので、ハンカチを濡らし、拭き取る。

「おしつ、終わったぞ」

シールに終了を告げると、シールは川の向こう岸まで飛ぶと、そこでぐるぐると周り始める。

俺はマリオよろしく、大ジャンプをして向こう岸まで行く。シールの動きから見て、どうやら何かあるみたいだ。

人形とチヨコと野宿。（後書き）

シールが飛び回っていた場所を見ると、吹っ飛ばされていた時に落ちた荷物があつた。

「・・・よくやった、シール！」

落ちていたのは、テントと工具だった。かなりついてる、テントと一緒に寝袋も入れていたんだつたな。

近くは川なので、上手く行けば、魚が取れるかもしれない。早速テントを立て始め、シールには折れた木の枝などを取るように伝え、それぞれ役割分担をして作業に取りかかる。

不思議な事に、シールは買った人形に魔力を込めて動かしていた。悪霊が襲いかかるかと思ったら、魔力を込めた時点で悪霊が消えていたので、魔力でねじ伏せたと思われる。・・・恐ろしい娘だ。

テントは20分くらいで組み立てて、シールと人形は木の枝を山盛りになるほど取ってきた。後は食べ物だ

川にパンツード入り、刀を構える。事情を知らない人が見たら変態扱いされるが、ズボン濡らしたくはないので、仕方なくズボンを脱いでるだけだ。

「・・・せりゃ！」

川で刀を構え、大きな魚を突き刺す。上手く刺さり、魚を手に入れた。手に入れた魚を大空に掲げ

「捕ったどー！」

と叫ぶ。うん、定番だよね、これ。刀で刺しているけど。

この後、小さな魚を数匹手に入れ、ホクホクした表情を浮かべながら焚き火をする。

魚の内臓は人形のナイフで取り出し、細い木の枝で突き刺した状態で遠火でじっくり焼く。

魚が焼き終わり、シールに小さな魚の4分の1を与え、俺は残った魚と一緒に焼いたキノコを食べる。

シールはと言うと、すでに食べ終えて人形をいじくり回していた。全て食べ終える頃には、もう夜になり、辺りはすっかり暗くなってしまった。今日の絵日記の内容は、人間の里にいた怪しげな店の店員、貰った人形のジャック（たった今命名した）、見つかったテントの絵だ。

描いていると、シールが日記をじつと見る。興味でもあるのかと思い、ペンを渡してみると、シールは今日操っていた人形の絵を描いた。

そして横に

きょうもやくにたててよかった。あのくろいおかし、おいしかったよ。

と書いた。少し疑問に思うのだが、なぜ文字が書けるのだろうか。まあ、知っても意味ないだろうけど。

明日は早く起きたいので、さっさとテントの中に入る。

テントの中は真っ暗で何も見えない。魔法を学べば明るくする事ぐらい、容易くできるかもしれないんだけど、外の世界じゃ魔術や魔法は、既に失われたものなので、学ぶことは出来なかった。

パーカーを脱ぎ、シャツだけになって寝袋に入る。シールも一緒に入ろうとしたので、潰されないように、寝袋についた小物入れに入れと言ったが、シールは全く聞かずにほった辺りに寝転んで、すぐに寝てしまった。

シールは行動はとも賢い部分を見せるが、寝る時に人肌を感じようとするとそのを見て、シールはまだ子供で、とても寂しがり屋なのではないか、と思う。

すやすや眠るシールの横顔を見て、おやすみと呟き、潰さないよう気をつけながら、俺は眠気に身を委ねた。

獣道。（前書き）

現在位置、獣道。大木に隠れて、妖怪の猛攻から身を守りながら、俺はある物を作成し続けていた。シールはポケットの中で縮こまっていた、ジャックはエネルギー球の弾幕で妖怪を寄せ付けられないよう、援護している。

俺は何を作っているかと言うと、能力を使った合成道具の作成中だ。材料は化け物キノコ、小石の2つ。

化け物キノコの魔力を、能力で爆発力のある炎の力に変換して、キノコで包む。外側に小石で薄くコーティングすれば、グレネードの完成。

簡単に説明すると、即席の魔法のような物で、衝撃で爆発すると衝撃波を放つてやつだ。

「ジャック。これを投げて、すぐに隠れろ！」

ジャックにグレネードを渡し、俺は耳を塞ぐ。ジャックはグレネードを妖怪へ投げ、すぐに大木へ避難する。轟音と共に、何かがちぎれる音が聞こえたのを確認し、俺はジャックを掴んで大木から姿を表し、走る。

牛妖怪がこちらに気づき、エネルギー弾を乱射し始めるが、

「ちったあ、黙ってる！」

弾幕をくぐり抜け、牛妖怪の顔面にドロップキックを食らわせる。

さて、なぜこの様な事になったかを、説明する必要があるな。

あれは、今から数分前の事か・・・

獣道。

「6分前、獣道周辺」

今日は晴天、正直旅にも飽きたが、博麗神社に着けるかもしれないので、できるだけ早めに情報を得たい。

幻想郷の入口を突破出来たかと思ったら、追跡者に襲撃され、デカイ剣持った女に吹っ飛ばされて・・・この2日間はロクな事がなかった。

一応、川付近を拠点としておいたが、早くまとまった収入源を手に入れて、どっかの宿に泊まりたいものだ。

「なあ、シール。お前は俺に着いてって、楽しいか？」

そう聞いてみると、シールはポケットから顔を出し、激しく肯定する。

「ふうん・・・何が楽しいんだか、よくわからんよ、俺ア」

やれやれと頭をかき、獣道をぶらぶらと歩いてゆく俺と、その後を浮遊して着いていくジャック。

シールに魔力を込められてから、コイツは一度も止まっていない。

もしかして、と思い、妖怪の力を使ってみる。微弱な妖力などを感じとるレベルまで解放すると、尻尾が5つ生えるのでジーンズを破いたが、気にしていられない。

見てみると、かなり洗練された魔力が大量にあるように感じた。

「シール、ちょっと出てきてくれ」

シールは何事かと俺を見て、大人しく出てくる。

「昨日のように魔力を出してみてくれ、本気でやってほしいんだ」

シールはぎゅーっと目を瞑り、魔力を解放し始める。シールを見ると、シールを包むように、人形の魔力が見える。

魔力の質は、今までみた事もないくらい洗練されていて、どれくらい凄いのかいまいちよくわからないが、確実に魔法を学べば桁違い

の力を発揮するはずだ。

「シール、お前・・凄いじゃないか！どこでこんな魔力を得たんだ！？」

シールは困った顔をして、わからないと言わんばかりに、頭を左右に振る。魔力つてのは、個人差はあるが、そうホイホイ身につくものじゃない。努力して、ようやく上がるものなのだ。

「あ、いや、わかんないならいい。とにかくお前は凄い、わかったか？」

恥ずかしそうに顔を赤くし、腕をブンブンふって、何かを訴え始める。これは、照れているってことか？

「何、そんなに照れんな。誇りに思え！いつか魔法とか覚えたら、お前は大妖精になれる」

そう言った矢先だった。ジャックが草むらに攻撃を始め、何かが2体出てくる。

「そうか、では、その大妖精とやらを此方に渡せ。渡せば命はくれてやろう」

牛と豚の妖怪出てきた。牛は筋肉モリモリの大男で、豚は三ツ又の槍を持っている。

シールの魔力が強過ぎたので、コイツらの妖気を感じる事ができなかった、改めてシールの強さを実感させられる。

考える間もなく、拳銃を引き抜き、豚の妖怪にエネルギー弾を数発撃つ。豚の妖怪は突然の事に対応できず、腕と頭が吹き飛ばししながら、地にひれ伏した。

「っと、トマトの出来上がりだ。続ける？」

牛妖怪は、何が起ったかわからない顔をして、倒れた豚の妖怪を見る。

「お前らの妖怪弾と違って、この弾は威力とスピードを高めてある。コイツは避けようがねえぜ？」

ガチャ、と拳銃を構え、牛妖怪の頭を狙う。

「っ・・おい、コイツを殺せ！」

牛妖怪はそう叫び、仲間を呼び始めた。どうやら、ここら一帯のボス的存在のようで、2〜30体も呼びかけに応じて、此方を攻撃してきた。

「逃げるぞ、シール」

シールはポケットに急いで入り、俺はジャックを掴んで、大木まで走り始める。

「逃がすな！あの妖精はとんでもない力を持っている、食ったら大妖怪になれるぞ！！」

たくさん弾幕が飛び交い、俺の尻尾が一部被弾し、焦げてしまったので、力を解除して尻尾をしまう。

「痛っ・・・マジかよ、逃げ場無いじゃん」

大木まで走り、身を隠してリュックを漁り始める。

「ジャック、援護頼む。妖怪を寄せ付けないようにしてくれ！」

〈6分後〉

「っ、死ね！」

足を捕まれ、ぐいっと引き寄せられたかと思っていたら、ひゅんつと投げられた。木に叩きつけられ、地面にキスする俺。

「滑稽な道具を持っけていても、内臓にダメージを喰らわせれば、そう起き上がれまい。妖精は貰うぞ」

と、近づく牛妖怪。普通はパニクる所だが、俺の心にはゆとりがあった。

「さて、もしもその内臓が鉄みたいに頑丈だったら、どうする？」

普通に立ち上がる俺を見て、牛妖怪は後ずさりし始める。うん、こうやって相手を追い詰めるのもいいな。いい表情をするから、ちょっと爽快感がある。

「さて、お返しぐらいはさせてもらおう」

俺は背中の刀を水平に持ち、刀を抜いて構える。

「死にぞこないが、あの世へ行け！」

必殺技らしき、ビームのようなものを撃ちまくって、牛妖怪は思い
つきり小物のようなセリフを吐く。
「鬼切、ご飯の時間だ」

獣道。（後書き）

俺の刀、鬼切が獣の口を模したオーラを漂わせ、レーザーに喰らいた。レーザーは一瞬で燃料を失い、消滅する。

鬼切がレーザーを食べ、俺は一步踏み込み、牛妖怪へ一気に近づく。刀で首を狙い、刀を振った。刹那、空中を舞う、牛の首。それは綺麗な放射線を描き、地面にストーンと落ちた。

「と、まあ、こんな感じかね」

妖怪共は未だに攻撃を続けるが、鬼切から漂う口が、妖怪弾を喰らっているので、全て俺には当たらない。

「つか、最初からこうすればよかったなあ・・・」

レーザーだけではなく、接近してきた妖怪も喰らう鬼切。最初から抜いておけば、こうも動き回る事もなかったのかもしれない。

刀を構え、残った妖怪達に突撃する。どのくらい持つかはわからないが、せいぜい数分ぐらいで全滅するんじゃないかと思う。

妖怪退治を終える頃には、空は曇天となっており、雨雲が見え始めるようになっていた。

感想を書いてくれた空を渡る風さん、ありがとうございました。おかげで、少し小説の書き方について、何か掴めそうです。

これからも日々精進しながら頑張っていきます。

博麗神社。（前書き）

真っ黒な雨雲は消え、辺りは雨に濡れた木々と太陽の光で、とても幻想的な光を放っていた。

だが、その景色の代償として、蒸し暑さが俺を襲っていた。すげえ暑い、暑いのは嫌なんだよ、俺は。

「シール、暑くないかー？」

肯定。周りをブンブン飛び、くるくる回ったりしてるシール。

（暇なのかねえ、この妖精さんは）

俺はと言うと、階段を登り、神社を目指している。

山道にあるんだから、階段も当然長い。ずるずる滑るから危なっかしい。そんな階段を、滑らないよう、慎重に登る。

「あゝ、アイス食いてえ。最低でも麦茶飲みてえ、何で長いんだよこの階段」

少々、愚痴りながら登り続けていくと、ようやく終わりが見え、神社にたどり着く。

神社の中は、普通の神社とほぼ同じで、少し広めな感じだ。

「やっと着いたか、ここが博麗神社・普通だな。本当に居るのか、強い巫女さんは」

この神社には、妖怪退治をしている少女が居るらしく、ソイツに頼めば、多少の事ならどうにかなるらしい。

ただ、現金な奴らしいけど。

ぶらぶらと歩き、人を探す。

「うえ？」

驚いた。縁側らしき場所が見えたかと思うと、そこには、酔いつぶれて寝ている幼い鬼がいた。

「え、鬼が・巫女。え、酔っ払いが巫女！？」

普通駄目なんじゃないか、これ。巫女さん酒豪かよ、世も末だな、オイ。

「その人は巫女ではないですよ。私が巫女です。彼女はまあ、友人みたいな者です」

と、本物の巫女さんが出てきた。

こっちが本物らしいが、中学生ぐらいにしか見えない。妖怪退治のエキスパートが、こんな少女だと思うと、少し疑問を抱いてしまう。まあ、俺も似たようなもんだがな。

「いやあ、仕事でも頼もうかと思ってね。報酬次第では、良く動くのだろう?」

「まあ、そうですね、何かその言い方は嫌ですね」と、苦笑いを浮かべる巫女さん。

「何、誰だって仕事すんのは、生活が掛かってるからだ。嫌も糞もありやしないさ」

「用件は、何ですか?」

と、巫女さんは聞く。

「まあ、簡単な事だよ。俺が依頼するのは、妖怪探しだ」

博麗神社。

縁側から部屋へ上がり、俺は敷かれた座布団にあぐらをかいて、座る。

「さあて、依頼内容はただ一つ、コイツを探す事だ」

スツと、妖怪の絵が描かれた絵を差し出す。その絵には、浮世絵のように描かれた女で、尻尾を7本生やし、首に勾玉という姿で、横に大きく狼姫ろうひめと書かれている。

「この妖怪は・・・？」

「狼姫。7つの力を使いこなす、争いを好まない妖怪らしい。俺は多分、ソイツに会わないと呪いを解く事ができないんだ」

巫女に質問され、狼姫の説明と、俺自身の事を話す。

「呪いは、どんなものですか？」

「夜になると、尻尾とかが生えて、勝手に体が歩き始める。この地を目指そうとな。試しにここまで来たが、それで降呪いは発動してない。多分、近づく事に何か意味があるんだろう。呪いが始めたのは、6年前だ。それからは成長が止まっちゃった」

呪いの説明をし、シールを自分の腕に座らせ、俺は巫女さんを見る。
「俺は、呪いで半妖になっている。妖怪でいるのもいいが、俺は人間の方がいい。狙われたりすんのは御免だ」

巫女さんは、ちよつと考え込み、口を開く。

「わかりました。できる限りのお手伝いは、させて頂きます。私の名前は、博麗霊夢です。あなたは？」

「写宮光介。ちよつと強い高校生だ」

「高校生？」

「ん、ああ、15〜18ぐらいの学生だよ。外から来たんだ、俺アどうやら、高校生の事を知らないらしく、俺は軽く説明してやる。」

「そうなんですか、なら、年上ですね」

「ああ、一応はな。全く外見は成長してねえから、年下に見られて

も不思議じゃねえよ」

テーブルに置いてあった茶を飲む。

「さて、報酬の話だ。俺は特別な能力があつてだな、触った物の形や性質を変える力がある。その力で何か作ってやろう。マジックアイテム、武器、何でも作れるぞ」

「・・・報酬としては微妙ですね」

はつきりいいやつだ。

「いや、本来は大量の砂金とか持ってきてたんだ。だが、この神社に入る瞬間に襲われたからなあ、大半の荷物落としてるんだよ」

「え、この神社で襲われたんですか!？」

と、巫女さんはテーブルを叩き、真剣そうな顔で目を見てくる。

「ああ、デカい狼にだ。あの大きさは確実に妖怪だろう」と説明する。

「はあ、そうですか」

考え込み、んー、と唸る巫女さん。

ちよつとだけかわいいと思つてしまったのは、別に悪い事でもないだろ。

「あ、さつきから気になつていたんですけど、その人形は・・・?」俺の周辺を、ふよふよと飛び回るシールを指差す。

「ん、名前はシール。喋れない妖精だ。何考えてるかは分かんが、少なくともコミュニケーションは取れる」

と、自分が思つた事を言い、シールをチラツと見る。

「・・・」

むう、と顔をしかめ、ポンツと腕を叩く。

全然痛くねえ。

「さて、俺はそろそろ帰るよ。これからやる事があるんでね。一週間くらいいたら、ここへまた来る。そんじゃ、これ名刺のつもりで、また来るとするよ」

立ち上がり、俺が中学の時に使用していた生徒手帳を渡し、リュックを手にする。その時にシールは胸ポケットへ入り、ボタンを閉め

た。

「はい、調べておきますので、また今度来てください」

庭からジャンプし、一気に神社を降りる。迷いやすい俺は、行きは普通に、帰りはスピーディーにをモットーに動いている。

この時も例外ではなく、なるべく早く帰ろうと、結構速めに移動した。現在、昼下がりの時間帯である。

博麗神社。（後書き）

さて、降りた先は、少し人間の手が入った森である。この道を真っ直ぐ行けば、多分元来た道へ戻れると思い、徒歩で向かう。

シールは虫のような羽を羽ばたかせ、後ろを着いていく。ジャックはと言うと、リュックの中で待機中。

「ハア・・・どうするかな」

現在考えているのは、拠点についてだ。はつきり言うが、テント超危険。

「キャンプはいいが、死にたくはねえな」

昨日寝てた時に、狼の鳴き声とか聞こえた。俺が寝ている時は、基本的絶対起きないので、寝込み襲われたら為す術もない。

ぶらぶら歩いていると、先ほど倒した妖怪の物であるう、巨大な金棒が落ちていた。

「あ、そうだ、作ればいいんじゃないね！」

材料は腐るほどそり立っている。そして自分の能力を使えば、簡単に形を変えられる。ここに鉄落ちてるし、家とか楽勝に出来るじゃん。

「行けるな、よし、今日の目的が出来た」

太陽の位置からにして、3時ぐらい。時間はたっぷりある。

多少ワクワクしながら、金棒をずるずる引きずり、俺は歩く。作るのはとりあえず屋敷だな、うん。なんかカッコいいし。

川辺の屋敷。（前書き）

拠点となっている、川沿いのテントがあった場所。そこにはテントは無く、替わりに大きな木材と、木の皮が置かれていた。

その隣に、2階建ての大きな家が建っていた。

その家の、屋根に付いた窓から、その家の住人が顔を出す。

「おお、解放感ばっちり！良い家つてのはいいな、安心感がある」
はしやぎながら、窓から見える川を見る。

その後、山から材料を集めに集めて、ここへ置き、家を完成させた。もう夜になっていて、素早く動く力があるのに、行動力ないなあと思う。

いくら妖怪の力が有れど、人員は俺一人。材料を集めるのに時間が掛かった。

「ああ、こういう家はいい。家具全然ないけど」

とりあえず、書斎やら応接間やら、あったら凄そうな物を木とかで作ったが、それを入れる物とかがない。棚とかあるのに、スカスカなのが無意味だ。

ちなみに間取りを説明すると、大きい順に、応接間、風呂、リビング、空き部屋3つ、トイレが1階。屋根裏部屋、書斎、空き部屋4つ、トイレが2階だ。

これから想像すると、かなり広い家なのだが、住む人が俺とシールだけなので、かなり寂しい家である。

何故ここまで大きくしたかと言うと、俺の呪いが解けた時、この家は使わないだろうから、誰かに譲って、民宿でもやれるようにしたからだ。

とりあえず、空き部屋には棚、机、ベッドは揃えてある。俺の能力で、木から綿など作れたりできるので、ベッドを作る際には問題はなかった。

錬金術は、銅から金を作ろうとしたりする能力なので、ゴミから種を作って、環境に役立てる事も出来る。

稼ごうと思えば稼げるが、それは自分のポリシーに反する。コーラが飲みたいとか、そういう事には使うが。

家で一番大きい屋根裏部屋では、俺の部屋だ。大きさを想像するなら、教室とかを考えてみるといいだろう。

「広いなあ、ここ」

広い部屋に、その部屋の5分の1を占める、大きなベッドに寝転ぶ。シールは落ち着きがないようで、俺の顔の横で、そわそわとしている。

俺だつて落ち着きねえよ。

自分で作っておいて、それはないだろと思うが。

「つか、いい加減米食いてえな。楽すりゃ一発で作れるが、それほど食いたいわけじゃねえし・・・」

とつくに夕ご飯を食べたので、あまり腹は減ってないが、最近はお魚とキノコしか食べてないので、米が食べたくなった。

まあ、どうしても食いたくなったら、木とかから作るけどな。

ぼーっとしていた時、ガラスが割れる音と共に、何か真つ黒い塊が落ちてきた。

「!？」

刀を持ち、臨戦体勢に入る。

黒い塊はうつすらと消え、中から少女が出てきた。なんというか、ぼーっとしたような少女である。

川辺の屋敷。

「あいたたた、何、ここ。昨日までこんなになかったのに・・・」

なんだ、コイツ。封印されてるような感じがある・・・抑制してるのか。真っ黒い塊は、何かの能力か。泥棒？

「誰だ、お前。泥棒なら出ていってくれ」

きよとした表情で、此方を見る少女。

「泥棒じゃないよ、私ルーミア。あんただれ？」

何というか、図々しい奴だ。危害加えてきたら、威嚇ぐらいするか。

「光介。ガラス割りやがって、とつとと帰りやがれ。俺アこれ直さなきゃいけないんだよ」

「そーなのかー」

「ほら、とつとと行つた行つた。忙しいんだよ俺」

「そーだ、コースケ食べていい？お腹すいてるの」

と、無垢な子供のように聞いてくるルーミア。

「んだよ、人喰いか。確かに人は美味いと聞くが、俺は半分人じゃねえぞ？」

人間の部位で一番美味しいのは、脳みそらしい。ちなみに人間が不味いと言う噂、実は美味過ぎて殺してでも食いたくなるのを防ぐ為に作られた噂だとか。

実際に、日本で人を食つたという事件はある。

どうでもいい話だが、中国では猿の脳みそが売られていて、その食品はかなり美味らしい。

「でも半分は人でしょ？なら食べれるよ」

「・・・襲ってきたらこつちも攻撃する。警告はしたからな」

シールが臨戦体制を取り、ジャックはエネルギー球を両手にスタンバイ、俺は銃を構える。

ルーミアがステップ移動をしながら、赤、青、緑のエネルギー球を作り出す。撃たせまいと、シールが拡散する弾幕を、ジャックが誘

導するエネルギー球を放つ。

「くらえ！」

ルーミアがエネルギー球を爆発させ、突撃する赤弾、広範囲に広がる青弾、流れるように向かう緑弾をこちらへ撃つ。

避けながら、引き金を引くと、目で追えないエネルギー弾が数発ルーミアに当たるが、手応えはあまりない。

「痛いなあ、乙女に向かって、本気出したらダメでしょ？」

少し笑みを浮かべ、目がチカチカするほどの弾幕を撃ちだす。

よし、ならギリギリまで待とう。当たるギリギリまで。

その間、シールとジャックはエネルギー弾を撃ち続ける。

「エリアイター！」

当たる寸前、鬼切のオーラを解放させ、大きな口を出現させる。大きな口は、弾丸もろともルーミアに喰らいつき、エネルギーを吸収する。

「っー。今のは効いたよ、やるね、あんた」

少し硬直したが、これも決定打に欠けるようだ。鬼切は少しの間しか吸収しないからだろう、力の上澄みしか取れてない。

「いいね、そうこなくっちゃ。ちよいと本気で行くよ」

力を解放させ、尻尾を3本生やす。60%本気って所だ。

「避けれる？」

大量のエネルギー弾が、ゆっくりジグザグを描いて此方へ向かう。

「シール、ジャック、援護頼む」

二人とも、こくりと頷き、援護射撃を開始する。その間、俺は弾幕の網へ飛び込み、近づく。

「この弾幕に飛び込むなんて、頭悪いの？」

そう言いながら、射撃の手を止めずに、此方へ語りかける。

「ああ、そうだ」

風を切るように移動する。本気で走る時は、いつも時間がゆっくりになる。スローのような遅さと、その中を走る俺。

弾速が止まっているかのように遅くなり、どこをどう潜り抜ければ

いいか、手に取るようにわかる。自分はこの状態を、加速モードと呼んでいる。

ルーミアの後ろへ立ち、足を止めると同時に、世界が元に戻る。

「・・・え？」

戦いの終わりに聞いた声がそれだった。刀を鎖に変形させ、ルーミアを縛り付けて鬼切のオーラを発動させる。

「え、何こ・・・れ」

魔力を気絶する程度まで引き抜き、鬼切に貯め込む。どちらかというと、封印に近い行為である。

パターンと意識を失い、倒れるルーミア。

「あー、あ。修理めんどくせえ。家でやるもんじゃないな」

すっかり蜂の巣になってしまった屋根裏部屋を見て、俺はため息をついた。

川辺の屋敷。（後書き）

屋根裏へ続く梯子のすぐ近くにある空き部屋に、ルーミアを寝かせて、鬼切を杖のように変化させ、魔力を放出して返す。

人の物を取ったら泥棒だからな、ちゃんと返してやんねえと。

「さて、修理開始と」

階段を軽快に飛び降り、廊下を走って玄関まで行く。玄関から出て、俺は廃材置き場まで歩く。

廃材置き場とは、俺がこの家を作る時に余った木が置いてある場所だ。

「廃材、15個くらいでいいか」

15本ほど集めて、能力で一つの塊にする。どこかのセリフを借りるならば、チート能力だ。木から金やガラス、拳げ句の果てには、肉やら鉄まで作れる。

神に近い特殊能力らしいが、親父曰わく、「金儲けには使うな、それが一族の掟だ」

らしい。自分で使うのはいいけど、それを儲け話にしたりすると、能力が使えなくなるとのことだ。

木材を片手で抱え、家の壁まで歩く。

「修理、屋根裏部屋」

そう唱えると、屋根裏部屋がスライムのようにグニャグニャになり、木材も同じ様にスライムへ変化し、屋根裏部屋へ向かう。

2つが混ざり合い、形が元に戻り始めて、グロイ修理過程が終わる。ほんとにどうにかならないもんかね、この合成の過程。

「ま、こればっかはどうしようも無いか。さて、シール、寝るか」
ポケットに入っていたシールに声を掛け、俺は屋根裏部屋へ、ルーミアを起こさないようにそーっと戻った。

主人公のチート能力発動です。有機物から無機物を作ったり、木材から機械を作ったりできるという。

ただ、本人は基本的、形を変える事にしか使いませんけどね。感想、お待ちしております。

妖精達の行進（前書き）

あの後、朝になって驚いたのは、真っ黒な塊が部屋に入っていた事だ。着替える為に俺が全裸になってたから、お互いに叫んだよ。

変態！とか言いながら出てったな、アイツ。一応、一晩泊めてやつたんだから、そりゃねえだろ。

さて、現在俺はどこに居るかというと、魔法の森の入り口だ。何しにきたんだ、などの声が聞こえてきそうだが、ちよっと気になる事があるからだ。

さつきから赤い霧が出ている。それだけじゃない、そこら辺りにいる妖精達が、やたら攻撃的になっていやがる。

以前までは、人が放つ霊気や魔力を見る事は出来たが、今ではキノコから魔力が出ているのも見えるようになってきている。

ここまで妖怪化が進んできたから、もう取り替えしのつかない事になっていくのかもしれないなあ

「ま、いいか。呪いが解ければ、なんとかなるだろうし」

樂觀的になり、適当に森を歩く。

森も赤い霧があるし、正直言って不気味だ。確か、シールに高く飛んで貰って、人間の里を見てもらった時には、そこも霧で覆われていたらしい。

「誰がやってるか知らんが、俺ア寒い嫌なんだ。いい迷惑だよ」この霧を調べてみると、多少靈感がある程度の人間だったら、すぐぶっ倒れるレベルの妖気が混じっている。しかも太陽の光を遮るから、野菜とかはあまり育たなくなるだろう。

日の光が殆どないので、かなり肌寒い。

パーカーをコートに変化させてみると、普通に過ごせるから気持ち悪い。夏に着るなんて初めてだ。

「おっと、お出ましか」

妖精達が、妖怪弾を放ち、此方へ攻撃を始める。昨日といい、今日

といい、やたら戦う事が多いな、俺。

妖精達の行進。

「シール、ジャック、近づく奴とか、後ろの奴を頼む。前は俺がやるから、背中預けたぜ」

拳銃を引き抜き、魔力の弾丸で妖精達を容赦なく撃ち落とす。それを援護するかのように、シールは広範囲に広がるエネルギー弾を放ち、ジャックは接近戦で近寄る奴を迎撃する。

ずんずんと進み、妖精達の猛攻に答えていくうちに、俺達は湖へ着く。この間は霧で良く見えなかったのに、今回は赤い霧が追加されて、かなり見えない。

「誰がこんな事したんだか。面倒だな、オイ」

一つ言おう、この湖は氷水のごとく冷たい。入るのは自殺行為だ。

「やってみるかな、浮遊」

ジャックが飛んでいるのを見て、昨日の夜試してみたが、ちょっと浮けた。そおとやってみよう。

「ジャック、じーっとしてろ」

ホバリングしているジャックをよく見て、どのように浮いてるかを観察する。良く見ると、魔力が下に向かって流れていくように見える。

「よしっ、もういいぞ」

じーっとするのを止め、後ろへ回るジャック。

今までやったのは、武器に流し込む事だけだったので、魔法のように外へ放出するのは、今回が初めて。

真剣を集中させ、体の魔力を下へ向ける。

「ぬおっ、ちよ、速ええええ!!!」

結果、めちゃくちゃ高速で飛んだ。魔力を出せるだけ下へ出したからだろうか。

魔力の出力を下げてみると、案の定スピードも下がり始める。

「よし、こうでいいか」

ふよふよと移動し、俺は湖を進む。

当然、妖精達も攻撃を仕掛けてくるので、拳銃で撃ち落とし、横から来たのをジャックやシールに任せて、湖を進み続ける。

5分くらい進んでみて、ある事に気づく。

「なんだ、やけに広いような・・・」

ずっと進んでも、何も島が見えない。全力で飛んでみても、全く着く気配がない。また迷ったか？

「ハア、迷いやすい人間なのかね、俺は」

そうボソツと言うと、どこからともなく、青いワンピースの少女が来た。

「道に迷うのは、妖精の仕業なの」

そう、少女は言う。

「そうか、なら、俺ア妖精に好かれやすいのかね」
すると、ちよつと考え込む少女。

「んー、少なくともあたいは、あんたと遊びたいなと思うわね」
ちよつとトーンの上がった声で、氷のボールを持つ少女。

「何して遊びたいんだ？」

「弾幕ごっこ！」

氷のボールを突き出し、胸を張ってそう答える。

「いいぜ、俺が勝ったら、案内よろしく」

拳銃を指でくるくる回し、そう言う俺。結構ノリノリである。

「あたいに勝てるかしら？あたいうてば、最強だからね！」

妖精達の行進。(後書き)

思うが、本当に妖精に好かれやすいのかもしれない。そうなら、シールがなついているのも納得出来る。

道に迷うのは、妖精の仕業。これが本当なら、俺は頻繁に悪戯されているって事だ。見た目は殆どが子供だから、子供に好かれるとも考えていいか。

「ふん、上を知るんだな」

今はそんな事考えている暇はないので、シール達に合図を送り、俺は弾幕ごっこに集中する事にした。

氷の少女（前書き）

現在、雪のように流れる攻撃を避けながら、俺は作戦を考えている。シール達は、どこで覚えたか全く分からない障壁に身を包んで、此方の様子を伺いながら待機中。

（さて、結構骨があるぞ、これ。避けるので精一杯だ）

猛攻が激しく、避けながら移動するしかない。先ほど刀で雪みtainなものを攻撃したら、一瞬で氷漬けになってしまった。触れたら俺でもヤバいな、これは。

「さて、どう行くかね」

狙いをつけ、弾丸を出来る限り当て、射撃を始める。
結構時間掛かりそうだ。

氷の少女。

とりあえず、この少女が氷とかを生み出せる事はわかった。湖に落ちた時、氷水と同じように冷たかったのは、この少女の仕業だろうな。

まず言おう、攻撃が避けにくい。雪みたいなのを大量に飛ばしてくるから、移動する隙があまりない。

たまに、前方に大きな隙が出る攻撃をするが、弾幕が凄く、それどころじゃない。

近寄って、鬼切を鎖にして縛れば勝てるだろうが、まずは弾幕をなんとかしないといけない。

「よし、シール、アイツを惹きつけてくれ。当たったら氷漬けになるから、気をつけるよ」

肯定。すぐさま離れ、高出力のレーザーを放ち始めるシール。

「痛っ、やったな、このー！」

シールへ攻撃を集中し始める少女。単純だな、コイツ。アホの子か？ 気づかれないようにそっと近づき、俺は鬼切を鎖にする。鎖を縛りつける事を前提に考えると、2mくらい近づかないと十分に縛れない。

「ジャック、シールの援護を。アイツにどんぶちかませ！」

ジャックは大きく頷き、シールの後ろへ行って、巨大なエネルギー球を作りだし、そこから大量の弾丸を放出させる。

「うらららーっ！」

攻撃の手が増えた事に気づいたのか、更に攻撃に集中し始める少女。どう見ても後方がガラ空きだ。

「・・・後ろから狙ってくださいって言うてんのもと同じだな、あれじゃ」

そう呟き、結構速めに飛ぶ。

少女の気はすっかりシール達に向いていて、此方に気づかない。鎖

を横に大きく振り、少女の体へ当てる。シャラツといい音を奏で、体に巻きつく鎖。

「はあい、終了」

そう呟き、勝利宣言をする。さて、道案内でもしてもらおうかね。

氷の少女。（後書き）

「離せ、離せコノヤロー！」

じたばた動き、鎖から逃れようとするが、かなり巻きつけているので、ほどけそうにない。

「さて、これは多分、俺の勝利だろ。道案内してもらうぜ、妖精さんよ」

「私の名前はチルノ！いいから離してよ、痛いんだよー」
涙目になりながらそう言うチルノ。

「あー、はいはい。ちゃんと案内しろよな」

鎖を刀のように変形させ、解放してやる。

「うー、こんな卑怯な手に負けるとは・・・」

若干落ち込みながら、移動し始めるチルノ

「お前バカ過ぎるんだよ、あんな分かりやすいのに引っかかりやがったんだぞ」

いつの間にかシール達に来て、シール達の定位位置に戻り始める。

「バカって言うな、バカって言ったのがバカだ！」

腹にゴスツと重い一撃を当て、わーぎゃー騒ぐチルノ

「だが、腕は悪くない。鍛えればかなり強くなれると思うぜ」

そう言うのと、少し表情を明るくして、

「そ、そりゃもちろん。あたいは最強で、天才なんだから」

誉められた子供のような仕草をする。ああ、コイツ扱いやすいな。

多分、食い物とかで機嫌治るレベルだ。

「さてと、ちつとばかり聞いていいか？」

「何？」

すっかり機嫌がよくなり、若干嬉しそうに聞く。

「ここら辺り、赤い霧なかったよな。どうしたんだ、これは」

「それはわからない。前にも似たような事があったけど、その時はレミリアの仕業だったよ。その事件は霊夢達が解決したけど」

ふむ、怪しいな。霧出す理由はわからんが、困っている人がいるかもしれないし、何より俺は暇だ。一つ、怒りにでもいくか。

「んじゃあ、ソイツが居る場所まで案内してくれ。ソイツの面見たくなった」

「いいよ、でも門の近くまでね。あそこには、嫌な門番が居るからすいーつと飛び、案内をし始めるチルノ。この間は、攻撃する妖精は居ない。どうやらここら一帯のボス的存在のようだ。頭良くないみたいだが、強かったのは事実。」

なんか段々とチルノが、ガキ大将みたく見えてきたな。いや、どちらかと言うと、男子に変なあだ名つけられるほど恐れられてる女子か。

そんな事を考えながら、俺はチルノの後を着いていく事にした。

紅魔館（前書き）

チルノの案内により、とりあえず門の前まで来た。なんと言つかねえ、これ建てた奴、どんぐらい金持ってるんだか。

「んじゃ、あたいはここで帰るよ？」

と、確認するように聞くチルノ。

「OK、ここまで案内してくれてありがとな。そうだ、これやる」と、余っていたチヨコを一袋渡す。

「何これ？」

「チヨコ入ってる。妖精はこういうの好きらしいからな、やるよ」

「うん、ありがと。ええと・・・」

何かを思い出そうと、うんうん唸り始めるチルノ。妖精の大半は子供と聞いたが、本当だなと改めて実感する。

「光介だ。また近くに來たら、適当に挨拶しにくるわ」

背を向け、手をぶらぶらと振る。

「うん、わかった。じゃーねー！」

そういい、どこかへ飛んでゆく。寒かったな、チルノの近くは。湖が寒くなってるのも納得出来る。

「すんませーん、誰か居ませんかねえ？」

何も応答無し。

「すんませーん、誰か居ないんですかー！」

・・・応答無し。

畜生、無視決め込んでんな。ならこっちにも手はある。

口を大きく開け、尻尾を3本解放し、息を吸う。

「す”み”ま”せ”くん”！！！！」

もし、同じ音の大きさに爆竹とかを鳴らしたら、確実に警察が来るレベルの音量で叫ぶ。

「・・・すみませーん」

小声でそう呟く、何も応答がない。

べ、別に悲しくはないからな！

「ん・・・？」

何か臭う。妖怪の力によって、嗅覚が発達していたので、どんな臭いかわかる。

血の臭いに、獣臭だ。

「お邪魔しますねー」

気になってしょうがないので、浮遊して中へ入る。そこに広がっていたのは、破壊された壁に、倒れた悪魔らしき女の人だった。

紅魔館

「おいつ、何があった!」

女の人の肩を掴み、質問する。

「中で、何者かに突然襲われました・・突然の事で、私はできる限り戦ったのですが、まるで赤ん坊のように扱われてしまいました・・

・
」

体中傷だらけの女の方は、か細い声でそう言う。

「わかったわかった、安静にしてろ、今治療してやる」

外の世界で教わった、治療魔法を唱えてみる。

すると、少しずつ傷は修復される。精神的にも疲れていたのか、ほっと息をつき、女の方は意識を失った。

「たくつ、昨日といい、今日といい、厄介事だらけだな、畜生」

女の人を放置しておくのも悪いので、リュックを置き去りにして、背負って歩く。背中に柔らかい物が当たるが、今は煩惱出してる暇はない。

「シール、さつき俺やった魔法、できそうか?」

ポケットから出てきて、頷くシール。

「じゃあ、ジャックを護衛に連れてって、怪我してる人を探してくれ。見つけたら、できる限りの治療をするんだ、いいな?」

激しく肯定。リュックから出てきたジャックも、頷いてシールの後ろに立つ。

「よしっ、行ってこい!」

合図と共に、凄いスピードで飛ぶシール達。さて、俺も行動を開始するか。

大抵、こういう事が発生した場合、どこかに立てこもるのが普通だ。入り口を探し、俺は歩き始めた。

走ったりしたら、この人の傷が開く可能性がある、ゆっくり移動する。

3分ほど歩くが、どこもバリケードがあって入れそうにない。壁を辿って入り口を探してみると、またもや怪我人がいた。

頭を強く打ったようで、力が抜けた状態で倒れている。見た目的に、俺と同じくらいだと思う。

「ん？」

ふと見ると、羽が付いている事に気づいた。飛ぶのに適してない形だが、吸血鬼あたりかね、この少女は。

「なら、血あげてみるか」

女の人を降ろして、鬼切を抜き、

「つう・・・！」

刃を左手で握る。血がダラダラと流れ、大きめな怪我になったが、後で治療すればいい話だ。

左手に血を幾らか集めて、少女の喉に流し込む。

「ん・・・」

少し喉を動かし、コクコクと飲む少女。意識が朦朧としているだけのようだ。

ゆっくりと目を開け、手を見つめる。声を掛けようとした時、

「あ、ちょ、何を」

噛みつかれた。ジンジン痛む左手と、何か吸われる感覚。ちゅーつと、遠慮なく血を飲み始めやがった。

血を吸われるというのは、なかなか生きた心地がしない。貧血みたいな症状が起こる。無理やり離そうとすると、怪我が酷くなる上に、さらに噛みつきそうだから大人しく待つ。

「あ、あんた、誰？」

口を離し、少女は質問する。

血吸わせてやったのに、あんたか。ひでえ話だ。

「んあ？半分妖怪の、人間だよ」

左手をふるふる振り、血を落として治療を始める。

「・・・騙したりしない？人間は騙す生き物だって聞いたから」
そっ、ぼそっと言う少女。

「半分妖怪だからなあ、騙すことは基本的じゃないと思う」

左手に魔法を集中させ、傷口を塞いでいく。

「さつき、変なのが現れて、私、戦ったんだけど、全く通じなくて・私、みんなの事・・・」

突然泣き始め、顔を伏せる少女。その姿に、俺は自分の妹の姿を重ねてしまう。ちょうど、俺が呪われた頃だろうか。あの日は。

「落ち着いて、君は良くやった。きっとその人は、生きているよ」

顔を掴んで、目と目を合わせる。妹は、これをやると、一時的に泣き止んでくれた。この少女も、赤い目で此方を見る。

「入り口は、全部バリケードがあって入れない。ってことは、誰かがバリケードを作ったって事だ。君が言っているその人は、生きるかもしれないだよ。いつまでも、泣いてちゃ駄目」

優しい言葉を掛けて、少女をなだめる俺。

「・・・うん」

頷く。まだ呼吸は元に戻ってないが、涙は流していないので、少し待ったら落ち着くだろう。

「君、名前は？」

「フランドール・スカーレット・・・」

「じゃあ、フラン。俺がバリケードを破るから、そこに居て」

刀を構えて、オーラを出し始める俺。

指示に従い、後ろへ下がるフランドール。

「・・・悪食」

大きな牙が生えた顎を出現させ、かぶりつかせる。すると、壁に大きな穴が空いて、中が見えるようになる。

すると、走る足音が聞こえ、メイドのような人物が顔を出す。

「こんにちは。あなたは誰ですか？」

刹那、ナイフが飛んできた。咄嗟に鞘で受け止めると、鞘に刺さるナイフ。これにはブルツときた。

「おわっ、落ち着け、俺は無害だ！フランドールって奴を連れてきた」

そう言うと、構えを解く。しかし、ナイフは握ったままだ。信用されてないな。

「妹様はどこ？返答次第ではただじゃおかない」
物騒で、怖いお姉さんだなあ。

紅魔館（後書き）

「・・・咲夜？」

後ろに居たフランに向かって、咲夜と呼ばれた女の人が走る。

「妹様、無事でしたか！よかった・アイツが歩いていたら、外に出られなかったんです、本当に良かった・・・」

安心するかのように、抱きつくメイド。妹様ってことは、この館の主人の妹か。レミリアとか言う奴だったっけ。

「咲夜、苦しい・・・」

フランは苦しそうに訴える。

「あ、すみません・・・」

恥ずかしそうに、そそくさと離れるメイド。

「妹様を救ってくれて、ありがとうございます。このお礼は、いつかしますので」

と、ペコペコと頭を下げるメイド。なんかなあ、頭下げられるのやだなあ。俺と同じ年に見えるし。

「そうだな・・・ここにいつでも入れる権限をくれるだけでいいや。他は要らない」

やれやれと、手を掲げ、メイドさんに言う。

「え、あ、はあ・・・わかりました。お嬢様に掛け合ってみます」
不思議そうな顔で、此方を見るメイド。

「俺の名前は、写宮 光介。アンタは？」

「私は、十六夜 咲夜。このメイド長をしています」
と、凜とした声で言う。

「よし、十六夜さん。今から怪我人運ぶから、待っていてくれないか？」

自己紹介が済み、刀を置いて、倒れていた女の人の所へ行き背負って運ぶ。

「この人、応急処置はしたけど気を失っている。どこか、安全な所

はないか？」

はつきり言うが、大抵女の人に、重いと言うのは禁句だ。しかし、実際背負ってみると、案外重いぞ？40キロは絶対あるからな。

「ああ、でしたら、地下図書館へ運びましょう。現在、避難場所にもなっているんです」

そう言うて、歩き始めて始める十六夜。

その後を追いかけてしようとした時に、何やらコンクリートが壊れる音が聞こえ始める。

「アイツ・・・まだ離れていなかったのね。妹様、逃げてください。私が時間を稼ぎます」

ナイフを5本取り出し、手に挟む十六夜。

「え・・・私だつて戦える！」

大声を上げ、歪なステッキを取り出すフランドール。

「いや、君は怪我人だ。無理に動いて、また気絶したいのか？」

そう言い、刀を取る俺。

こんな子供に任せる訳にはいかない。まあ、俺も子供だな。

「・・・でも」

「じゃあ、君はこの人を頼む」

背負っていた女の人を館の中で降ろして、そう言う。

「何、心配すんな。このメイドさんは俺が守っておく。君は、この人を守ってくれ」

ニカツと笑い、フランドールの頭をグシャグシャと撫でる。

若干心配そうにしていたが、フランドールはゆっくり頷く。

「十六夜さん、外に出てくれ。ここを封鎖する」

そう伝え、十六夜さんを外へ出して、フランドールを見る。

「その人の事、頼んだぜ」

壁に手を触れると、ぐにゃーと壁が動き、鉄を作り出して修復する。

「さて、援護頼みますよ。なるべく、知ってる情報があれば、言ってくれ」

此方へ向かう、仮面を付けた男を見て、俺は刀を向けた。

共闘。（前書き）

「あの仮面の男、能力が使えなくなる攻撃をするみたいです。原因はわかりませんが、私の能力も使えません。それに、とても速く移動するので、気を付けて下さい」

鬼切に似てるな。どこで手に入れたかは知らんが、奴も封魔の武器を持っているらしい。

「スピード戦なら得意だ、援護を頼む」

鬼切を変化させ、二本の小刀に変化させる。スピード戦ならこれが一番だ、手数が多くなるからな。

「・・・来るぞ」

奇妙な動きをし、次の瞬間、猛スピードで此方へ迫る。

「ラアッ！」

近寄り、横へ移動した所を、腹めがけて蹴りを入れる。

ゴスツと嫌な音になり、地面を転がりながら吹き飛ばされる仮面の男。

チャンスを逃さず、ナイフを投げ、追撃する十六夜さん。それに合わせ、俺も拳銃で数発打ち抜く。

さて、多少は喰らっているだろうが、生きてはいるだろう。どう来る・・・？

共闘。

「・・・厄介なのがいるな」

驚く事に、男は立ち上がり、そういい放つ。厄介つてのは、多分俺の事だろう。

「ケツ、女子供襲うのが趣味かよ、外道め」

刀を向け、相手の目を睨む。

「計画に必要なのだ、ここの制圧は。だから殺す、何も問題あるまい」

計画？計画ってなんだよ。そんな事で女の子襲うつての、許せる訳ないだろ。

「計画ってなんだよ。そんな事で、ここの人達を苦しめてんのか！？」

威嚇するように身構え、尻尾を全て解放する。現在の尻尾の数、5本。

「直に、異世界から戦士が送られる。ここは、その始まりの土地なんだよ」

異世界？確か、死にかけの神様が言っていた奴か。どうやって異世界から送るつもりだ？

「何が何だかわかりやせんが、お前が危険そうなのは分かった・・・」
両手に力を込め、ソイツの首筋めがけて突撃していく。狙うは首だ。

男は咄嗟に障壁を展開させる。

「鬼切には効かないぜ」

それを豆腐のように切り裂き、男へ怒涛の連撃を喰らわす。

避けたりしているみたいだが、尻尾を全て解放した俺に対応しきれないみたいだ。六回ほどダメージを受け、回避の蹴りを入れる男。

「おっとお！」

小刀二本で防ぐが、相当力があるようで、3 m程後ろへ滑る事にな

る。

「十六夜さん！」

援護攻撃の、十六夜さんの投てきナイフが男へ迫る。

男は障壁を展開させ、ナイフをはじき、落ちていくナイフ。

舌打ちをし、困った顔をして、此方を見る十六夜さん。

「障壁が厄介ですね」

コイツは結構強敵だ・・・どうする？

「なあ、コイツを投げてくれないか？」

と、刀をダガーのように変化させ、十六夜さんに渡す。

「いいですけど・・・私じゃ追いつけないですよ、そのスピードにはさつきから、能力が使えなくなっているみたいです」

そう、申し訳なさそうに言う十六夜さん。

「俺が奴を拘束します、その隙にやってください」

そう伝え、俺は地面を蹴り、最速で走ると、男も此方へ走り始め、

ショートソードを抜き、水平に剣を振る。

金属音と共に刀と剣が火花を放ち、つばぜり合いの状態になる。

「ッ！？」

突如として刀の形が変わり、棘が出てきた事には対応できなかったようだ。右肩に棘が刺さり、そこから血がにじみ出る。

「味な真似を・・・」

ショートソードを捨て、大きくバックステップをし、肩を抑える男。

「駄目だぜ、武器を落としちゃあ」

ショートソードを拾い、刀を一本の小太刀にして、両手で構える。

ショートソードを調べてみると、やはり鬼切と似た呪式が練り込まれているみたいだ。十六夜さんは、多分コイツの攻撃を受けたんだろう。

「・・・使うとは、思わなかったが、仕方ないか」

札のような物を額に当て、ブツブツと何かを唱え始める仮面の男。

「解放」

光が男を包み込み、大きな光の柱ができる。男を包む光は大きな

り、そこから巨大な狼が出現する。

「・・・お前、あの時のデカイ奴か」

そう、幻想郷に入る時、俺をぶん投げた女に襲いかかっていた狼だ。
「後悔しても、もう遅い！」

巨体を生かした体当たりをし始めたので、横に緊急回避して、巨体の脅威から逃れる。

轟音と共に、館の堀が崩壊する。

うひゃー、ありやダンブカーみたいだな。それプラス車以上のスピード・・・ヤバいな

「あつぶねえ、下手したら即死だぞ、ありやあ」

俺が喰らっても死ぬ事はないだろうが、多分骨は数本折れるな。

「だが、こっちの方がやりやすい」

鎖にした刀を持ち、ヒュンヒュン振り回す。先つちよには重りが付いている巻きつけ用の鎖で、長さが足りないだろうから、ショートソードを足している長い物だ。

十六夜さんは鬼切^{ナイフ}を握り、比較的通しの良い場所へ立つ。

おそらく、俺が捕まえようとし始めている事に気がついたんだろう。

また狼が体当たりを始め、走り始めたその時に、

「大人しくしろ、バカ犬」

鎖を振り下ろし、狼に巻きつける。

くるくる鎖は回り、しっかりと体を締め付け、狼を拘束する。

「くっ、離せ！」

鎖を引き千切ろうと、暴れ回る狼。抑えるのが大変で、地面がえぐれるほど踏ん張るが、長くは持ちそうにない。

「十六夜さん、今です！」

「はいっ！」

十六夜さんはひゅつとナイフを投げ、ナイフは真っ直ぐ飛び、プスツと奥まで刺さる。

「鬼切、飯の時間だ」

鬼切に力を注ぎ、オーラを解放させる。オーラは人の形になり、狼

の内部から現れ始めた。

共闘。（後書き）

その人型のオーラは、この世の者とは思えないような雄叫びを上げ、右手に揺らめく刀を持つ。

「止める、止めるオオオオ！」

狼は心底怯えた声を張り上げ、それを恐怖の眼差しで見つめる。

「どうか次は、いい奴に生まれかわりますように・・・」

刀が振り下ろされ、狼の体が粒子のように解け始めた。

「糞っ、上手く行くと思ったのに、畜生・・・」

粒子は人型のオーラへ吸収されていき、全て吸い付くした鬼切は、鎖とナイフの方へ吸い込まれていき、人型のオーラは消えていった。
「ハア、疲れた」

くてん、と腰が抜け、結構な疲労感が体中に広がる。

あゝ、やつぱ、魔力とかいっぱい吸われんな、封印。力が抜けてしょうがねえ。

「大丈夫ですか!？」

駆け寄り、肩を叩く十六夜さん。

「いや、無事だ・・・くたくたで立てないだけだ。悪いけど、運んでくれないか？」

足がぶるぶるしやがる、生まれたての馬はこんな感じがねえ。

「あ、はい。じゃあ、失礼します」

そっつい、俺を抱きかかえ、立ち上がる十六夜さん。

「あの、これって・・・」

うん、見事なお姫様抱っこだ。

「どうかなさいましたか？」

何もわかっていないんだろうか、きょとんと此方を見る。

「あ、何でもないデス・・・」

何か、男のプライドがズタズタになるな、逆の立場になると。

まあ、大人の女性と小学生の体格を比べりゃあ、俺の方が明らかに

小さいんだよなあ、悲しい事に。
非常に恥ずかしい状態で運ばれながら、俺は館内へ向かう事になった。

狼姫。（前書き）

「あ、確か、バリケードで塞いでいたんだった・・・」

入り口戻ったのはいいが、中に入らず、どうしたらいいか分からないみたいだ。

「入り口に近づいてくれ、俺が穴開ける」

そう伝えると、入り口まで近寄る十六夜さん。

入り口に手を触れ、その周辺の物を対象に、形を変化させる。

穴を作り、中へ入れるようにしてあげた。

「便利ですね、その能力・・・」

関心するかのようにいう十六夜さん。

「便利っちゃ便利ですけど、狙われたりしますから大変ですよ」

何故狙われるかというと、かなり強力なマジックアイテムが作れる上に、木から金塊などを作り出せるので、世界征服的な事を企てる奴に狙われてしまう。

味方にすれば、軍資金には困らないし、強力な武器作成ができるらしいからな。

「さて、もう立てますからいいです」

そう言い、十六夜さんから降りる。

お姫様抱っこは嫌だし、もう立てない訳でもない。

「図書館はどこですか？」

眠気を含んだ声で聞いてみる。

「階段がありますので、そこを降りれば行けますよ。案内しますので、着いてきてください」

館内を案内する十六夜さん。

しかし、外から見ても広いが、中は予想以上に広い。金の無駄遣いだな、何故金持ちはこんな家建てるんだろな。

あくびを一つし、無駄に広い館を歩く。その時に、シール達が帰還してきた。

「誰か居たのか、怪我人は」

否定。首を横に振り、嬉しそうな顔をするシル。

まあ、怪我人だらけだったら、治療する側もつらいからな、怪我人は居ない方がいい。

やがて階段の場所へ付き、階段を降りていくと、大きな扉が見えた。十六夜さんが大きな扉に向かって、何回かリズム良く叩くと、扉の先から物音が聞こえ始める。

バリケードを崩しているんだろう。リズムカルなノックは、敵味方を判別する為のものだと思われる。

（だとすれば、ここは相当追いつまれているって事だ。どれだけ暴れたんだか、あの妖怪）

物音が無くなり、ゆっくりとドアが開く。

すると、刀剣で武装したメイド達が現れ、此方へ向かう。

「十六夜様、無事でしたか。そちらの方は・・・？」

羽を生やしたメイドが、俺を見て質問する。

「この方は、この館の救世主よ。あの男を封印してくれたわ、もうここから出て大丈夫よ」

と、メイドに伝え、中へ入っていく十六夜さん。

「それは、本当なのですか？ 私にはいまいち、信用できません」

と、メイドは言い、胡散臭そうに此方を見る。まあ、この体格じゃなあ。

「最初はただの子供かと思っていたけど・・・あの男より強い人よ。

私が保証する」

傲慢げに言う十六夜さん。

「私は今から、お嬢様の所へ行くから、この人の事お願いね？」

と言い、図書館の奥へ向かっていく。

さて、武装したメイドが5人程居ます。あなたはどう思いますか？俺だったら怖いね。何されるかわからんし、今は疲労中だし・・・5人が此方を見て、何か要望はないか？とアイコンタクトで伝えてくる。

「ん、まあ、一応封印はしたけど・・・そんなに特別扱いしないでくれ」

中へ入り、ソファらしきものを見つけたので、そこをベットに変えて、寝転ぶ。

「俺は寝るとするよ、君達は、自分のすべき事をしてくれ。怪我人が居るなら、俺の横に飛んでいるシールに聞いて。応急処置なら出来ると思う。起きたら、館の修復してやるから、それまでは余計な事しないでくれよ?」

そういい、手を振る。

「わかりました。では、良い眠りを」

ソファで作ったベットは、意外と寝心地がいい。眠るのには充分だ。メイド達はシールを連れていき、それぞれの持ち場へと戻りはじめる。

薄暗い図書館の中で、俺は目を瞑り、眠りにつく。案外眠れたみたいで、俺はすっかり熟睡してしまった。

狼姫。

奇妙な夢だ。現在夢を見ている事を自覚しているから、これは明晰夢だろう。

真っ黒な空間の中に、装飾された塔が建っていて、俺が立っている塔の平らな断面には、刀を持って何かに立ち向かう俺と、3つの空白の円が描かれている。

ここは・・・どこだ？

「君の、精神世界をいじった場所かな」

すると、犬耳と尻尾を7本生やした女性が現れた。間違いない、狼姫だ。

「狼姫って奴か？始めまして、アンタに呪われた光介ってモンだ」
そう言くと、きょとんと顔をして、笑い始めた。

「アッハハハハ！まさか忘れちゃってるの？まあ、当然か。正確に契約したのは、君が5歳の頃だもん。12歳になったら、私を助けに行くって約束だったんだから」

そう、無邪気に言う狼姫。なんかねえ、こういう風に言われると、殺すのは駄目だろうな、と思っちまう。

「契約・・・俺は覚えてはいないが、契約したってんだったらどんな契約なんだ？」

そう言くと、若干拍子抜けした顔をする。

「ふーん、問答無用で、殺そうとするかと思ってたよ。君はやっばり、心が大きくて、とても澄んだ目をしている。昔と変わらないね」
懐かしむように、そう言う狼姫。

「じゃあ、教えてあげるよ。私は今、訳ありで力を失っているの。君には、私の妖力が備わっている。だからそれを返してもらおう為に、12歳になったらここまで来るようにって、契約したんだよ」

幼い自分よ、どうしてそんな事したんだろうか・・・おかげで今は面倒な事になっているんだぞ？

「でも、最近になって、君が来る必要性がなくなっちゃったの。妖力が増えたんだよ、その時に元通りの力を得られた」

「なら、この妖怪化を止めてくれ。お前にはもう、俺の必要性がないんだろ？」

「でも、問題が起こったの。私、殺されちゃったんだ。さっき戦ったでしょ？あの男の人と」

ああ、アイツか。

「あの人がいる組織は、私の力を狙っているの。その力で何かを復活させるみたいだけど、私はそんなのは嫌。だから、望みは君に託す事にしたの」

どういう事だ？

「君に、私の力全部あげる。その為に、私は来たの」

そう、胸に手を当て、真剣な眼差しで此方を見る。

「嫌？」

どうするかね・・・人間に戻ったら、この妖怪の力は使えなくなる。人間には戻れなくなっちまう。

でも・・・ここ数日間の事を思い返すと、楽しかったな。外の世界に居た時よりは。

人生、楽しむのが一番だと、親父が言ってたような覚えがある。なら、楽しもうじゃないか。シールとジャックと、3人で。

「いいぜ。俺は、シール達と別れたくない。それに、つまらん外の世界よりは、幻想郷の方がいい」

そう伝え、手をやれやれと掲げる。

「・・・優しいね、君は」

そう言い、狼姫は俺に近づく。

「後は、よろしくね」

そういい、いきなり抱きつく。普通は恥ずかしくて顔を真っ赤にするそこだろうが、何故か抱きつかれていると、安心感があつた。

此方を抱き返してみると、狼姫は無邪気な笑顔を見せて、光になり始めた。塔が光に包まれ、何かが湧き出す感覚と共に、狼姫は俺の

腕の中で大きな光の塊となり、下へ落ちていく。
次の瞬間、まばゆい光と共に、空白だった一つの円に、狼姫の絵が
刻まれる。

― 忘れないでね。私はいつも、ここに居る。君と一緒に―

そんな声が、聞こえた気がした。
そして、光は無くなり、扉が現れる。その扉を開いていくと、そこ
は光に満ち溢れ、俺の意識を覚醒させる。

狼姫。（後書き）

「んっ・・・」

何か感触がある、尻尾生やしちまったか。

尻尾のふわふわした感じが有り、寝ている間に妖怪の力が出たみたいだ。

「・・・あれ？」

起き上がってみると、重量感が増えたような感じがある。尻尾を動かしてみると、尻尾が2、4、6、8、10、12・・・12本生えていた。

「夢の出来事は、本当か」

妖力がかなり増えたのがわかる。館内の妖力が手に取るように分かり、ソイツがどんな顔しているかも分かる。

「身長はそのままかよ・・・」

視点は同じだった。低身長がなければ、完璧なのになあ。

「えっとお、写宮さんですよね？」

困惑したかのような表情をして、此方を見る十六夜さん。

「ん、ああ、そうだ」

すると、ほっとする十六夜さん。

「びつくりしましたよ、とてつもない妖力を感じましたから」

確かに、凄い力を感じるが・・・これ何とかしないと。戻ればいいんだけど。

戻れと考えた瞬間、尻尾が全て消え、みなぎる力もなくなってしまった。

「えっ・・・今のは？」

十六夜さんも驚き、質問してくる。

「分かりません、ただ戻れって考えただけなんですけど・・・」

1本生えろと念じると、1本だけ生え、妖怪の力が出ているのがわかる。5本生えろと念じると、前の最大限の力が出ているのを感じ

る。どうやら、オンオフ切り替え可能のようだ。

尻尾を消して、動きやすい格好になる。

「驚きました。妖力つて、完全に隠す事も出来るんですね」

「ん、まあ、実力とだけ言っておこう」

妖力が消えている・・って事は、尻尾を完全に消せば、人間に戻れるのか。どういう原理だ？

「失礼ですが・・何年生きているんですか？」

十六夜さんは、そう興味深そうに聞いてくる。

「今年で17歳ですよ」

そう伝えておく。

「え・・年下じゃないですか!？」

確か、妖怪は長生きすればするほど、力が増えると聞いた。なら年上と思っても普通だよな。

「いや、半分人間なんですよ」

そういうと、十六夜さんは半分呆れるような表情になり、

「もう驚くのに慣れました・・お嬢様が呼びです。多分、館の出入りについての話じゃないでしょうか？」

と言う。

「分かりました、すぐ向かいます。あと、敬語はいいですよ、年上です」

年上に敬語使われるのな。まあ、俺は基本的敬語使われるのはあまり好きじゃないがな。

「いえ、この館の救世主ですので、それに私は、これが普段の口調ですから」

と、言い、案内を始める。

普段の口調ならしょうがないな。

道案内を受けて、俺はこの館の主人、レミリアの元へ向かう事にした。大方、お礼とかそこら辺りかも。

担当は護衛と雑用。（前書き）

案内され、奥にある部屋へ入ると、どう見ても子供にしか見えない奴がいた。こんなのが主人かよ、大丈夫かコレ。

「あなたが写宮 光介ね？」

「そうだが・・・アンタが主人？」

どう見ても胡散臭そうにしか見えない。

「そう。私はこの館の主人、レミリア・スカーレット。フランドールの姉よ」

紅茶を飲み、此方をじつと見てくるが・・・どうもお腹辺りを見られているようだ、何か付いてんのかね？

「確か、尻尾が生えてるって聞いたけど、生えてないわね。戦っている時に切られたの？」

ああ、尻尾探していたのか。

「隠しているんだ。見たいのか？」

「ええ、見てみたいわ」

言われた通りに、力を解放して尻尾を生やす。全部出すと、レミリアは興味深そうに此方を見て、尻尾を掴み始める。

「へえ・・・やはり凄いのね、君は。これほどの力を持った人材、そうホイホイ見つかる訳ない」

尻尾を離して、此方を見るレミリア。

人材とか言ったが、何するんだろつか？仕事なら大歓迎だ。俺の能力で物買ったりすると、能力使えなくなるし。門番とかかねえ。

何かを考え初め、じーっと此方を見始める。何言われるんだろつか・・・

担当は護衛と雑用。

数分考え込み、ようやく口を開くレミリア。

「君、この館で雇ってもいいわ」

何故に上から目線。

「ちょうど、護衛を増やそうと思っていたのよ。特別に面接無しで、即雇ってあげるわ、喜びなさい」

うげえ、確実に自分の上は居ないとか考えてるタイプだ、コイツ。やたらニコニコしているのを見て、少し引く俺。

「お嬢様、本気ですか？彼は強いのは確かですけど、家事とかできそうに見えません」

ええ、雇う方針ですか・・・

十六夜さんは、レミリアにそういい、少し抗議する。

「ええ、基本は使い走りに使うわ。何よりフ란の恩人らしいじゃない。絶対フ란は懐くわよ」

下っ端のような仕事内容・・・まあ新人ならそうだろうな。

つか、あの妹さんの遊び相手とかにしようとしてんなあ。

「当然、OKよね、写宮君？」

ん、給料がまず気になる・・・生活するのにも金は必要だし。

「給料幾らだ？それでだいたい決まるが」

「ん・・・面倒だし、咲夜と同じぐらいでいいわ」

「咲夜さんの給料は？」

「80万くらいです」

「高っ！」

年収960万かあ・・・随分稼げる仕事だな。護衛や遊び相手で80万、最適だな。いい仕事だ。

「よしっ、雇われよう」

結局、金で動く俺なのである。まあ、世の中金なきゃ生きれないし。「いいんですか？」

そう、最後の忠告みたいな事を言う。

「OK OK、護衛なんか簡単だろ、ちょいちょいつてぶっ倒せばいいだけだし」

呆れるように此方を見る十六夜さん。

「決定ね。咲夜、最初の仕事の説明をしなさい」

そう言い、レミリアは紅茶の飲み始める。

コイツら、仕事してるようにも見えないが、どこに収入源があるのやら。

十六夜さんは、俺に着いてくるように言い、俺は十六夜さんへ着いて行って、その場を後にした。

こうして、仕事を確保した俺は、現在外に居る。仕事内容は簡単で、紅魔館の修理だ。

手を触れて、この間見た館を思い浮かべる。

すると、瓦礫などが移動すれば始め、元あった場所へくっ付き、修復し始める。そして、10秒程で、館は記憶通りに元に戻った。

「さて、終了・・・館の奴に挨拶して回るか」

襲撃があり、仕事上どころではなかったらしいが、現在は溜まった仕事を終わらせる為に、館ではせっせと働く奴で溢れている。俺はそれぞれの持ち場の偉い奴に、俺は挨拶していくって所だ。

十六夜さん曰わく、「挨拶は重要ですよ」らしい。

まずは、門番から挨拶を始める。紅 美鈴と言っらしい。普通に外で退屈そうに突っ立っていた。

「あー、こんにち。館の救世主ですよ」

そう言っと、中国人風のスタイルのいいお姉さんは胡散臭そうな目

で此方を見る。

「えゝ、本当ですか？子供にしか見えな「一発試しておくか？」いいです」

尻尾を全部解放させて、笑顔で拳を振り上げると、怯えてすぐそう言った。

「まあ、護衛と買い出しとかを担当する事になった。よろしく」

「はあ、よろしく願います」

ちよつと納得いかない顔をしていたが、普通に挨拶してくれた。

「ここの仕事はどんなやつ？」

「門番ですよ。まあ、殆どが来客の対応と妖精をおつ払うだけですけどね」

つまらなそうに、肩をすくめて言う美鈴。

「暇そうだな、その仕事」

「まあ、中の仕事の方が大変らしいから、ここの仕事が一番楽よ。暇だけだねえ」

「そうかい、お仕事お疲れさん」

手をぶらぶら振り、俺は次の場所へ向かう事にする。

次は、地下図書館だ。何故地下に建てたかは全く分らんが。

図書館は薄暗く、光があまりない。

こんな所で生活してたら、確実に不健康になるな。実際、不健康な奴が本読んでるし。

名前は、パチュリー・ノーレッジというらしく、レミアアの友人とのこと。魔法使いで、相当魔法を覚えてはいるが、喘息で唱えきれないらしく、本末転倒になっていると聞いた。

「ウィーッス、陰気臭く何やってんですか？」

「アンタ、誰？この館に男は居ないわよ、新人かしら？」

魔法書をズラリと並べ、ひたすら読み続けているのを見て、本当に魔法使いなんだなと思う。

「写宮 光介。館と妹さんの恩人つてとこだ。今日からここで働く事になった。担当は基本的に買い出しとか護衛とか。まあ、何でもやる。よろしくな」

「そう、じゃあ、これ本題に戻しておいて。下の段から順番にね」
・・辞典みたいなのが13冊積み上がってるんですけど。

「この本は汚したりしないでよ。大切な物だし、私が書いた物もあるから」

仕方なく、3回に分けて運ぶ事にする。

はあーあ、本当に雑用だな、この仕事。

担当は護衛と雑用。（後書き）

全て戻し終えたので、なんとなく本の中身を読んでもみると、魔力の圧縮法とか、そんな事が書かれていた。後で読んでみるかな。

目に入った「属性魔法の使い方」など、色々と触っておく。これですべてでも複製可能になるので、シールに読ませようと思う。かなり強くなる可能性があるからな。

「終わったぞ？」

本を読むパチユリーさんに、そう伝える。

「そう。じゃあこっち来て？」

呼ばれたので、パチユリーさんのところへ行く。

「何ですか？」

「写宮君が、フランの恩人って聞いたから、私考えたんだけどさ。個人的なお願ひなんだけど、フランと友達になってあげて欲しいのよ」

と、本を読みながら、何かを考えるかのような表情をする。

「いいですけど。あの子、何か問題でもあるんですか？」

「・・・妹様はね、何でも壊す事ができる能力を持っているの」

おお、恐ろしい娘っ子だ。

「でね、能力を制御するのがあまりできないみたいで、400年くらい幽閉されていたの。最近になって、ようやく庭まで出るのを許可されたけど、孤立気味で、いつも一人で居るわ」

ああ、何となくわかった。あの子は、自分の能力のせいで、友達ができないって所か。

「ああ、何となく事情は分かった。俺で良ければ、やってやるよ」
フランは、昔の自分に似てるように思う。人とは違うものや、特別な何かを持っていると、自然とその人から遠ざかるものだ。

俺もそれで友達が作れず、近所の野良猫に餌やったりして戯れて過ごしていたからな。

「そう、ありがとね」

少し微笑み、此方を見る。

「もう行っていいわよ。後、これ戻しておいて」と、分厚い本4冊を指差す。

少し複雑な心境のまま、本を戻していく。

この仕事、楽なのかねえ。地味に大変そうだ。

球技をしよう。その1（前書き）

「あー、畜生。石だらけだな」

現在、夜の涼しい風を浴びながら、庭で瓦礫拾い中。

石とか瓦礫が庭に落ちていて危ないので、咲夜さんから頼まれて庭掃除をしている。

用心棒として雇用されたが、普段護衛する事もないため、初日は防衛戦で崩れた場所の修復と掃除を俺はやっている。

「シール、はかどってるか？」

否定。重そうにジャックと協力しながら瓦礫を運んでいる。

堀の修復も終わったのはいいが、瓦礫が余るという事態になってしまったので、集める羽目になっている。

「ねえー、まだー？」

と、暇そうに言うフラン。廊下でぼーっとしているのを掴まえて手伝わせたのはいいが、途中で飽きて休んでいる。

「まだだ！何かと面倒なんだよ、瓦礫撤去は」

能力で埋めると雨降った時に出てくるので、素直に集めないとダメだ。

「あ、粉々にすれば・・・やめろ、余計危ない」ちえっ

危ない事言いやがった・・・

コイツ、さつき手伝わせたら、瓦礫粉々にしやがった。しかも飛び散る勢いで。集めるのに飛び散らせたら意味ないでしょーが。

「もう暇ー、早く終わりにしてよ！」

「じゃあ手伝ってくれよ」

「それもやだー！」

「ハア・・・」

一応、手伝ってくれるメイドさん達も居るが、その人達は、生暖かい目でこっちを見てくる。

ええい、そんな目で見るんじゃない！

「写宮さん、もう休憩していいですよ？」

と、最初に助けた小悪魔さんが言う。

「あ、いいんですか？それじゃお言葉に甘えて。おい、休憩時間だぞ！」

シール達に伝えると、運んでいた瓦礫を置き、シールはポケットに入り、ジャックは肩に座る。

「とまあ、休憩時間が入ったぞ、フラン」

そう伝えると、つまらなそうな顔が一変して、一気に笑顔になる。

「じゃあ、遊ぼ！」

フランは俺の手を引き、走り始める。

「ぬおつ、休憩時間だったの。おいおい・・・」

そういい、俺はおとなしく連行されることにする。

着いたのは、瓦礫が無くなっている平らな地面である。

「何すんだ、ここで」

「んー・・・決まってるない」

決まってるないんかい・・・

よく見ると、ある程度の広さがある。これって、サッカーとか野球するのに最適だよな。よしっ

「キックベースすつか」

能力で地面からサッカーボールを作り出し、そう言う。

「キックベース？」

「んー、まあやれば分かる。ある程度の人数が必要だな・・・だいたい12人ぐらい。あと10人だな」

「じゃあ、私5人探してくる！」

と、早速人を集めに行くフラン。

俺も探しに行こうかねえ。ぶらぶらーっと、館の中へ入り、俺は人を集める事にする。

球技をしよう。その1

数分経過し、キックベースの人数が揃ったので、ルールを説明する事にする。まあ、野球をサッカーボールにしたようなもので、基本的蹴って遊ぶものだ。

メンバーは、暇そうにしていた咲夜さんとレミリア、図書館で読書に勤しんでいたのを捕まえたパチュリーとその近くに居た小悪魔さん。

門番を他の人にさせて連れてきた美鈴さんと、その他5人のメイド達である。ちなみに男は俺しかいないという悲しい状態。

さっそく、グーパーでメンバー分けすると、俺のチームは咲夜さん、小悪魔さん、獣人の3姉妹、ラルさん、リルさん、ルルさん。

フランのチームは、レミリア、パチュリー、美鈴さん、吸血鬼のスカルさんとタルトさんである。

「よしっ、じゃんけんで先に攻撃する奴を決めようじゃないか」

「OK！」

フランと俺がじゃんけんを始める。

「じゃんけんポン！」

俺がグーで、フランがチョキ。俺のチームが先攻だ。

わらわらと、フランチームは守備位置へ移動し、俺達は蹴る順番に、能力で作ったベンチへ座る。

一回戦は、まず咲夜さんが最初に出る。それを向かえ撃つのはレミリアで、何と上司と部下対決である。

「お嬢様、遠慮なくいきますよ」

「いいわ、咲夜。全力で戦いなさい！」

試合開始の笛をシールが鳴らし、試合が始まる。

レミリアは大きく振りかぶって、ボールを握る。

普通、サッカーボールはあそこまで握れないだろうに。

そして、吸血鬼の一撃が放たれる。ボールの速度はだいたい、90

キ口かねえ。そこそこ出ている。

「ふっ！」

咲夜さんは、鋭いハイキックでそれを捉え、蹴り飛ばす。すると、レーザービームのように一直線に進むボール。

「ウォオオオオ！」

美鈴さんが、雄叫びを上げながらボールへ拳を振り上げる。てか能力使ってんじゃん、気纏ってるし。

ガスツとボールに当たり、そのボールはサードに居るパチュリーへ飛んでゆく。

パチュリーは呪文を唱え初めると、水が出現し、その水は飛んできたボールへ突撃する。ボールに命中すると、ボールは大きく凹み、セカンドへ走る咲夜さんの所へ飛ぶ。

「行っけええええ!!」

「間に合えええええ!!」

2つのチームが、それぞれの声援を送る。そして結果は・・・

ふう

砂まみれになつた咲夜さんの勝ちだった！

「シャアアアア！」

叫ぶ俺、喜ぶ3姉妹、拳を天に掲げる小悪魔さん。

「負けたわ・・咲夜、成長したね」

「はいっ。お嬢様のために、日々精進したおかげです！」

少しだけ、主従関係の深さを垣間見た戦いだっただ。

先制攻撃は、セカンドヒットで終わる。

次の打者は俺。即席で作ったバッターボックスに立ち、向かえ撃つはパチュリー。ボールを浮かせ、不敵な笑みを浮かべる。

何するかわからん！

「喘息は大丈夫かい、お姉さんよ」

と、悪者面して挑発する。

「フン。魔法の力、見せてやるわ。せいぜい後悔する事ね」

と、水を出現させ、そう言うパチュリィ。

超高压力で飛ぶ水は、コンクリートをあっさり貫通する力を持つ。

水に研磨剤などを混ぜて使えば、ダイヤモンドをも切り裂く力を發揮する。

（マズいな、解放しておくか）

尻尾を12本解放させ、待機する。

「水よ・・・」

水にボールが包まれ、水中にあるボールは大きく凹む。

集中し、ボールだけを見る。

ボシユンと、気の抜けた音と共に、凄まじい勢いでボールが飛んでくる。

速い。Jリーガーの人より速いんじゃないか？とにかく、サッカーボールで出せる速度じゃない。

だが、尻尾を全て解放していた俺は、妖怪の枠を超えた力を發揮していた。

（ゆっくり見えるぜ、パチュリーさんよ）

ボールがゆっくり見える、自分の動きもゆっくりだけど。

そして、ゆっくり足を動かし、ボールを蹴ると、時間は元の速さに戻った。

グングン飛距離を伸ばすボール、そしてそれを見て駆け抜ける俺。

また美鈴さんが叫び、ボールを蹴り飛ばしてセカンド辺りへボールは進む。

（フン、間に合うかもしれないが、角度が駄目だったな）

弾き飛ばしたボールが、正確に飛ぶはずない。余裕で走っていると、何かが尻尾に当たる。

「へっ？」

ボールだ、何故当たってるんだ？間に合うが大きくズレたはずだ。

一瞬で色々な思考が巡り会い、一つの答えが導かれる。

「尻尾長いんだった！！」

人生で、最も尻尾を恨んだ瞬間だった。

畜生、何でこんなに長いんだよ。しかも前より伸びてるし。不自然だろ、小さい体に、かなり長い尻尾。

キックベースは、野球とは違ってボールを当ててアウトにする事が出来る。尻尾が長い俺にとって、かなり不利になる遊びなのだ。

「ううう・・尻尾研究しとけばよかった」

すぐすごとベンチに戻り、尻尾

をくねくねさせる。

球技をしよう。その1（後書き）

ちなみに、咲夜さんがホームベースに戻ってきたので、一点追加されてある。

この試合はなるべく早く終わらせるために、ツアアウト交代で5回戦までやる事にしてある。

次の打者は小悪魔さん。向かえ撃つのはパチュリィ。さて、どう来るか？

球技をしよう。その2（前書き）

小悪魔さんとパチュリーの対決。

パチュリーの豪速球にはかなわなかったのか、三振してしまい、一点取って一回戦は終了。

交代と共に、守備に付く俺のチームと、ベンチへ移動するフランチーム。

守備は、俺がピッチャー、3姉妹が生まれた順に、ラルがファースト、リルがセカンド、ルルがサード。咲夜さんと小悪魔さんは外野となっている。

最初にバッターボックスに入ったのは、フランである。

「本気で来なさい、光介！」

「言われなくても。少し試してえことがあるから、実験台になって貰うぞ」

試してみたい事は、パチュリーがやった魔法での射出だ。水の力を使っていたらしいが、俺は回復魔法しか使えない。

なので、本に書いてあった魔力を圧縮する方法をやってみる事にする。

雰囲気が出るように、尻尾を5本解放して、前方にかざした手と一緒に、前方へ構える。

（うる覚えだが、確か魔力を一点に集めて書いてあったな。）

やってみると、何かを圧縮する音と共に、真っ黒い何かが出てくる。

サッカーボールを取り、魔力の塊の前に浮かばせる。

おお、何起こるか分からねえぞ。

「行くぜ」

そして、圧縮した魔力を前方へ飛ぶように解放してみる。

爆発音と共に、サッカーボールがバナナのように変形する。

あ、ヤバイ。

球技をしよう。その2

結果、ボールが破裂しながら飛んでいきました。

飛び散るボールを、何が起こったかよく分からない顔をして見るフラン。

爆風が凄く、ものすごい風がフランへ吹き抜ける。

その時に、いい物が見れたのは秘密だ。うん、しまパンか・いい。つか変態発言だな、こりゃ。

「ボール壊してどうすんの？」

爆風が止み、そう聞くフラン。どうやら中身が見えた事に気づいていないようだ。

気づいていたら殺されるな、うん。バッチリ見たし。

「幾らでも作れるから安心しろ。今のは無しって事でいいか？」

「いいよ、早くして！」

ワクワクした顔で、今か今かとソワソワするフラン。

ボールを複製し、普通に握って投げる。

結構な速度と共に、フランの元へ飛ぶ。

「それっ」

可愛い掛声とは裏腹に、鋭いピッチャーライナーが放たれる。

「せいやア！！」

それを、ファーストのラルの方へ飛ぶように蹴る。

高スピードで飛ぶボールと、それを上回る速度で走るフラン。どっちが上手か予想はつく。

ファーストベースを踏み、セカンドへ走ろうとする。鷹の獣人のラルがフランを捉え、ボールを投げる。

ボールがフランに迫り、当たるかと思ったら、フランは大きく空へ跳んでいた。

駆けたり跳んだり・スカート履いてよくそこまで動けるな。

外れたボールを追い、リルが飛んで追いかける。が、近くにいた小

悪魔さんがボールを拾い、俺へ送球する。

「待てえええい！」

キャッチャーが居ない為、追いかけて当てるしかない。全力で走る俺と、ホームベース近くまで来たフラン。

ブンツとボールを投げる。そのボールはフランへ飛んでいき、フランを仕留めまいと迫る。

そして結果は・・・

フランはホームベースを踏んで、ランニングホームランを決められた。

「やったあ！」

飛び上がり、喜びを表現するフランは、凄くいい表情をしている。

さて、次は点取られないように抑えるか。

次の打者は、レミリアである。

何と言うか、めちゃくちゃ集中してる。フランみたいにランニングホームランでも決めたいのかね。

「さて、遠慮なく行かせてもらうぜ、お嬢様」

立場上、レミリアの事をお嬢様と言う事になっているので、口調はそのままと言う所で妥協している。

「来なさい、叩きのめしてあげるわ！」

気迫がスゲー。

流石吸血鬼を束ねる奴だ、結構様になっている。

「そんじゃ、今回で完成させてもらうぜ、俺の魔球をな」

今度は尻尾を2本にして、魔力を圧縮してみる。さつきより、質が弱くなっているのがはつきり分かる。これなら安全そうだ。

サッカーボールを浮かばせ、圧縮玉を解放させると、またバナナのようにボールが変形する。

が、破裂する事なく、バッターボックスに向かって行く。

「ハアッ！」

ボールを蹴ろうとするが、勢いが強さになわなかったのか、足は当たったが弾かれるという、予想もしない結果になった。

「いつつ・・・流石だわ、写宮。それでこそこの館の用心棒よ」

思っただが、さっきから負けてばっかだなこの人。いつかカリスマブレイクするんじゃないか？

今度は普通に投げて取ることにしよう。

ボールを握り、振りかぶって投げる。

ボールはゆっくり飛び、それを遠慮なく蹴り飛ばすレミリア。

ボールはホームランのように高く飛ぶ。

「ッシ！」

喜びながら走り始めるが、気づいていないんだろっかね。

「貰ったア！」

高く高くジャンプし、ガシッとボールを捕まえる俺。

そのまま、背中から地面へ落ちる。

衝撃が内臓に響き、吐き気が襲う。

「うえ・・・でも取ってやったぜ」

落胆するレミリア、親指を立てる咲夜さん。

ワンアウト取ったので、咲夜さんと交代し、外野へつく。さて、試

合終了までどれくらいかかる事やら。

俺は多少ワクワクしながら、試合を楽しむ事にした。

球技をしよう。その2（後書き）

その後、俺達はどんどん得点を取ったが、フランチームも得点を取り、とうとう5対5と同点のまま、5回裏へ到達する。

そして、俺とフランが対決して、同点のまま終わってしまった。

フランは満足げにニコニコ笑っていて、また今度やろうと言った。このチーム戦が、孤立気味らしいフランの出発点になればいいんだがな。

「今日は疲れたぜ・・・もう日付変わってるし」

そう、館で割り当てられた部屋で、俺は呟く。

シールはと言うと、試合の興奮が抜け切れてないのか、くるくる飛び回って蹴る動きをしてみたりしている。

「シール、もう寝るぞ？」

すると、シールは考え初めて、何か思いついたのか、ベッドへ座る。
「・・・？」

ポンポンとベッドを叩き、何かを訴え始める。

「一緒に寝たいのか？」

肯定。早く来いと言わんばかりに、ベッドを叩く。

「潰されても知らんぞ？」

潰さないよう、慎重にベッドへ入り、寝転ぶ。

やっぱり、大人が寝るサイズのベッドは広い。小さなベッドでも広々と使える。

もぞもぞと手へ近寄り、右手の小指に抱きつき、頬ずりをし始めるシール。

「・・・ん」

何となく頭を撫でたくなり、人差し指でゆっくり撫でてやる。

すると、目を瞑って、気持ちよさそうに眠り始めるシール。

（コイツ、本当に何考えてんだか）

サラサラした銀髪を撫でて寝かしつけ、俺も寝る事にした。この仕

事は、意外と大変そうだ。
目を瞑り、意識を落とす。この日はいつもより早く眠れて、簡単に夢の中へ入れた。

東方キャラとの関係。（前書き）

ここでは、会った事のある東方キャラ達から見た光介の事や、その関係性を書いていきます。

物語が進むと、更新する事がありますので、確認してみるのもいいかと思います。

東方キャラとの関係。

「アリス・マーガトロイド」

迷った光介を泊めてくれた人。光介はいつか、恩返ししてやろうと考えている。

アリスは光介を迷った子供と思っているが、帯刀していたのを見て、妖怪か何かだと思っている。

「八雲 藍」

光介が獣道を行こうとして、道を尋ねたのが初対面。その時に露骨に子供扱いされたので、光介はあまり快く思っていない。

藍は光介の事を、獣道へ行こうとする無謀な子供だと見ていた。

「博麗 霊夢」

光介が狼姫の搜索を依頼した人。妖怪退治のエキスパートにしては、やけに幼いなと光介は思っている。

霊夢は光介の事を、かなり金を持っている富豪ではないかと見ていると同時に、鬼切の力と光介から感じた妖気を感じて、敵に回したら危険と考えており、態度を紳士的にしている。

「ルーミア」

建てたばかりの自宅に突撃し、いきなり攻撃を仕掛けた人。光介は人食い妖怪と見て、力をちよつとだけ奪って気絶させた。

ルーミアは光介の事を、多少優しい人物と見ていたが、今では変態扱いしている。

「チルノ」

光介が湖に落ちた時に、湖の一部を凍らせて昼寝をしていた。光介は修行してバカな所が治れば、相当強くなると見ている。

チルノから見て光介は、遊んでくれた上に、チヨコまでくれたいい奴だと思っていて、また出会ったら何かして遊ぼうかと思っている。

「小悪魔」

光介が紅魔館へ入って異変に気づいた時に、最初に会った人。光介は怪我をしていたのを見て治療をした。

それ以降、仲が良くなったみたいで、キックベースをする際には快く参加してくれた。

小悪魔は光介を命の恩人と考えていて、かなり高評価している。

「フランドール・スカーレット」

光介が館を搜索中に見つけ、光介は助けようとして血を与え、回復させた。それ以降、かなりなついたようで、館ではよく一緒に行動している。

フランは光介に心を開いており、夜になると光介と遊ぼうとする。キックベースの際には、孤立気味な自分が、こうして沢山のひとと遊べた事にかなり喜びを感じた様子。

「十六夜 咲夜」

光介が館内部へ侵入した時に、攻撃を仕掛けてきた人。現在は上司となっている。光介が館の異変の元凶と対峙した際、共に戦った。咲夜は光介を、フランの情緒不安定の改善になる人物だと考えてお

り、共闘したのをきっかけに、そこそ仲が良くなっているみたいだ。
キックベースをやる時には、多少渋ってはいたが、結局参加する事に。

「レミリア・スカーレット」

光介の雇い主。光介はあまり上司として見ていないようだ。紅茶ばかり飲んでいる生活をしているので、どこから収入が入るかは全く分からないが、光介は気にしないようにしている。

レミリアは光介を実力者と見て雇い、ちょっと自慢の種としている。キックベースの時には、誘った時にすぐ、やると言ったが、試合中あまり活躍していない。

「紅 美鈴」

光介が仕事を貰い、最初に挨拶に行った人。あまり強そうに見えないなど、光介は思っている。

美鈴は光介の事を実力者と見てはいるが、あまり自分には関係ない人だと思っただけらしい。キックベースの際に、一番楽しんでいた人でもある。

「パチュリー・ノーレッジ」

光介が図書館へ行って挨拶をした際、色々と雑用を押し付けた人。暗い図書館で不健康な生活を送っているのを見て、いずれは外出でもさせようかと光介は考えている。

パチュリーは光介の事をよく働く少年だと、好ましく思っている。キックベースに誘った際、魔法使っていいと言われ、渋々やる事にしたが、最終的にかなり楽しんだ模様。

さて、お仕事お仕事。その1（前書き）

目を覚ますと、ある問題が起きていた。なんと言つか、色々と柔らかい感触があつたので、まあ寝ぼけていた俺は、それを抱きしめていたんだよ。

普通そこで気づけと思うんだが、気づけなかったんだよなー、これが。だって寝ぼけてたもん。

隙間風が凄くてな、俺は閉めようと起きるんだよ。そしたらな

「すう・・・すう・・・」

デカイ人形が居た。60cmくらいかねえ？デカイ人形が寝てる。

「ええつと・・・」

顔を見る限り、シールなんだよ。でもコイツこんなに大きくなかつたぞ？コップサイズだったし、どういう事だろうか・・・

「・・・？」

目を覚ましたようで、こちらを見てハテナマークを浮かべるシール。

「あー、シールだよな？」

肯定。目をこすり、うつらうつらさせるシール。

「つて、危ねえ！」

かっくんと頭を下げた瞬間、前方へ倒れ込んだシールが、ベッドから落ちそうだったので咄嗟に服を掴む。

ぶらーんとぶら下がっているのにも関わらず、非常に眠たそうな顔をするシール。

「つか、意外にスタイルいいな、お前」

コップサイズの時には気づかなかったが、シールの見た目は、スレンダーな女の子を人形サイズにしたって感じだ。

「」

寝ぼけてはいるが、言葉は伝わっているみたいで、Vサインを出すシール。

「何時までも寝ぼけてないで、さっさと着替えるぞ？」

昨日渡された執事服に手を伸ばし、寝癖を直し始める。ちなみに俺の髪型は、どこにでも居るような子供の髪型。

サラサラっとしていて、触り心地いいんだぜ？子供のままで止まっている俺の、少ない利点である。

「・・・っ！」

いつの間にか飛び始めるシールだが、思い切り壁にぶつかり、悶絶し始める。

「いい目覚ましになったか？危なっかしいから気いつけるよ」
頭を抱えながら、コクンと頷くシール。

一通りの準備を済ませ、俺は立ち上げる。

「さて、今日は仕事の初日。気合い入れていくか！」

パンツと手の平に拳を叩きつけ、気合いを入れる。

服装は執事服に手袋、革靴である。

なんと言うか、護衛には向かない格好だな。

雰囲気を出す為に、ジャックには執事服を、シールにはメイド服を着せている。勿論、俺の能力製である。

「さて、行くか」

ドアを開け、廊下へ出て歩き始める。

さて、お仕事お仕事。

さて、お仕事お仕事。その1

「あら、シールちゃん、大きくなった？」

すれ違いに会った小悪魔さんが、そう訪ねてくる。

「ああ、大きくなった。今じゃポケットに入れないから、頭に乗ったたりしてるよ」

「あら、そうなんですかー。可愛らしいですね」

おおう、対して気にしてねえ。

「」

俺の頭へ乗っかり、手を掲げるシール。

「それじゃあ小悪魔さん、俺はこれで」

「はい、また今度」

小悪魔さんと別れ、移動し始める。

数分ほど歩くと、見覚えのある人が居た。

「おっ、ルルじゃんどうした？」

この間3姉妹で集まっていた、三女のルルを見つけ、声を掛ける。

「お、写宮じゃん！ちようどよかった、これ咲夜さんをお願い」

渡されたのは、今回の出来事に関する報告書のようだ。渡された資料を全て受け取る。

ちなみに、3姉妹は猫の獣人である。

「あいよー、仕事頑張れよ？」

「それはお互い様。まあ、アンタも頑張んなよー」

手をぶらぶら振り返し、ルルと別れる。

基本的、雑用を頼まれたら、それを受け答えて仕事とするのが、俺の仕事だ。

この仕事を上手にするには、多分あちこち移動しなければならない。

歩き続けるのは、案外疲れるんだぜ？

廊下を歩いていき、咲夜さんを探していく。

すると、ルルとすれ違ったので、聞いて見る事にした。

「おーい、リル。咲夜さんどこ？」

「ああ、咲夜さんなら、ホールに行ったわ」

ちなみに3姉妹は次女が同じ年で、他は3歳年が離れている。

「あんがとさん」

ホールへ向かい、歩き始める。

報告書は結構分厚いから、持つのが面倒。

ささっとホールへ行くと、ラルさんがホウキで掃除をしていた。

「ラルさーん、咲夜さん見なかった？」

「え、見てないけど・・・多分庭じゃないかしら？」

と、ラルさんは答える。

「OK、とりあえず行ってみるよ」

走って外へ出て、庭へ出る。

沢山のメイドさんが掃除をしていて、一応声を掛けておき、咲夜さんの居場所を探していく。

話によれば、咲夜さんと一緒に戦った場所に居るらしい。

そこへ小走りで向かい、ようやく咲夜さんを見つける。

「ようやく見つけた・・・咲夜さーん！」

この館、何故これほどまで広いのかねえ？

そう考えながら、咲夜さんに声を掛ける。

「あら、光介。何の用かしら」

どうやら、掃除をしていたらしい。ホウキを置いて、此方を見る。

「報告書です、これどうすれば・・・」

「そこに置いておいて、後ほど拝見するから」

ベンチを指差すと、そこにはバックが置いてある。

バックを重しにして、報告書を置く。

「そうだ。パチュリーが呼んでいたわ、何か仕事あるんじゃない？」

そう言われ、地下図書館へ向かう。

しかし、本当に広い！誰か空間でもいじってんのかね、これ。明らかに見た目より倍以上の広さがある。

十数分掛けて、ようやく図書館へ着く。

「パチューリー、どこに居るんだ？」

当然、図書館も広い。うん、デカイホームセンターを全て図書館に改造した感じか？ここまで広いと、ギネスブックにのるんじゃないかねえ。

「ああ、ちょうどいい時に来た。これ戻しておいて」

案外近くに居たようだ。声がした方向へ行ってみると・・・冗談にしてはタチが悪い数の本が積んであった。

「なあ、本読むの楽しい？」

引きつった笑顔を浮かべ、パチューリーに質問する。

「暇つぶしにはなるわ。それに私は、これが仕事みたいなものだし」と、パチューリーは言う。

「本読むのはいいが、たまには息抜きしないと駄目だぞ？風船だつて、空気入れ続けたら割れるし」

本を7冊ほど持ちながらパチューリーに忠告する。

「大丈夫よ、私の風船は人より大きいんだから」

（やっぱ無理やり連れてかないかぎり、外に出ないな。多少紫外線浴びておかないと、体に悪いらしいし。適当な理由付けて出かけさせようかね）

少し呆れながらも、今後どう外へ出してやるかを考えておく俺。かなり空いてる本棚を見つけ、本を戻そうとするが、問題発生。

「んしょ、んんーっ・・・ああ、届かない！」

背が低いのを恨む瞬間、ベスト10に入る問題である。

畜生、届かばねえ。

尻尾で戻せねえか？あ、尻尾で物は掴めないか・・・いや、これなら出来る。

「おお、上手くいった」

何をしているかというと、尻尾を4本生やして地面に尻尾の先を立て、視点を上げているのだ。

まあ、シエンガオレンを想像してみれば話は早い。

本棚に本をしまい、尻尾を消そうとしたが、

「待て、もしや・・・」

ある事を思いつき、やってみる事にする。

（そーっと、そーっと・・・）

一歩尻尾を前に出し、もう一歩尻尾を前に出す。それをそーっと繰り返していたが、だんだん慣れ始め、どんどん歩行を始める。

さて、お仕事お仕事。その1（後書き）

「秘技、尻尾歩行」

よし、そう命名しよう。

高い視点で移動できるのは、低い視点だった俺には斬新な風景で、新鮮さがある。

すっかりはしゃいでしまった俺は、尻尾走行を始める。

「やべえ、超楽しい」

パチュリーのところまで、それで帰る事にする。

パチュリーが座っている机まで来ると、パチュリーが此方を見て呆れるような顔をし、こう言い放つ。

「犬毛落ちるからやんないで」

畜生、上司命令には逆らえねえ。

尻尾を解除し、ストンと着地。

むすっとした顔をし、本の束を持ち初め、すぐに立ち去る。

（どーせ犬ですよ、俺は！）

何でこう、もつと可愛いのになかったのかねえ。耳とか元あった場所じゃなくて、頭に生えた上、犬だ。本当は狼だけどさ。

猫とかの方が良かった。俺猫好きだし、俺の外の世界の友達猫だし。若干、イライラしながらも、俺は仕事をこなしていく。だが、まだお昼にもなっていない。仕事はまだ続く。

さて、お仕事お仕事。その2（前書き）

図書館の仕事が終わり、またぶらぶらし始める俺。ふと、地下階段の続く先が気になったので、少し降りてみる。

地下3階まで降りていくと、鉄の扉が見えた。何やら凹みや傷が付いている扉で、何か居るのは確かだ。

封印の呪式が途切れ途切れに描かれている鍵を見つけ、何かが封印を無理やり破いたのがわかる。普通に封印を解除したらこうはならない。

「・・・好奇心が俺をくすぐるであります」

少しふざけながら、重苦しいドアを開ける。

そこには、食器棚やテーブルが置かれていて、生活感がある場所だった。何故、こんな場所が？

ベッドが置かれているので、近寄ってみると、誰かが寝ている。

「・・・邪魔しました」

んだよ、ここで生活してんのか。てつきり、魔獣がいるのかと思っただ。しかし、この住人は相当酷い扱い受けてんのか？どうみても住むのにはあまり適してない環境だ。

こっそり出ていこうとすると、寝ている人物が起き始める。

「んーっ・・・だあれ・・・？」

寝ぼけ顔で、目をこすっていたのは、パジャマ姿にナイトキャップをかぶったフランだった。

「あ、いや、これはだな・・・」

やべえ、言い訳思いつかねえ！

「光介、遊びに来たの？」

目をこすりながら、ふらふらと此方へ歩き始めるフラン。

「スマン、まさかお前の部屋だとは思わなかったんだ。変な扉があるから、つい」

言い訳しようとして、変な事言つと後で大変だ。素直に理由を説明

する。

「んー、じゃあ、お話して？眠気取れちゃったし」
と、フランはベッドを叩き、座れと合図する。

ポスンと隣に座り、天井を見つめる俺。

ナイトキャップを外し、此方を見るフラン。

「話つつてもな・・何話すればいいかわからん」
と、天井を見たまま答える。

「じゃあ、光介の事でいい」

ニコニコしながら、そう言うフラン。

「まあ、ちとわかりずらくなるかもしれないが、それでいいなら」
「いいよ」

フランは足をぶらぶらさせ、早く話せと急かし始める。
さて、外の世界の話でもするか。

さて、お仕事お仕事。その2

「じゃあ、外の世界の勉強をするか」

すると、明らかにフランは嫌そうな顔をする。

「勉強？勉強嫌いだから嫌だ」

プイツと横を向き、幼児のような仕草をするフラン。

精神年齢は子供だな、コイツは。

「まあ勉強つつつても、難しいものじゃない。世間話のようなものだ」

そう言う少し興味を持ったのか、此方を見る。

「まあ、俺は外から来た人間でな。外の世界は、一瞬で相手と話ができたり、世界中の人間達とコミュニケーションを築くことができる技術がある場所だ」

フランは、興味津々でそれを聞く。

「他にも、油を使って妖怪並みのスピードで走る事ができる乗り物があったり、小さな鉄を霊弾のように出すものもある」

と、俺は知っている事を簡潔に話して、フランに聞かせていく。

「そんでだ、外の世界じゃ、妖怪が認知されつつある。熱狂的な信者のせいだな。最近じゃ、妖怪退治する仕事も外にもあるんだぜ」

「え、でも外の世界には妖怪が居ないって聞いたよ？」

フランが質問する。

「いい質問だ、何故妖怪が外の世界にいるか。答えは簡単だ、妖怪と恋をする小説とかを読んだ小説のファンがこう願うのさ、妖怪が居ればいいのにな」

妖怪は居るとか、妖怪に怖れや憧れを持つ奴が増えると、妖怪は現れる。幻想が実体を持つのだ。

恐れ、憧れ、願望。それらがある事で、妖怪達は生きる事ができて、増える事もできる。

「んで、一人、また一人と妖怪を見つける人達が増えて、今じゃ山

奥にでも行けば会えるぜ」

最近じゃ、神様まで実体化しつつある。猫の神様が良い例だ。アイツが実体化してたおかげで、俺はこの場所を知れた。

「じゃあ、外の世界の妖怪は強いのか？」

フランはキラキラした目で見てくる。

「いや、現れ始めたのは3年前だが、認知されたのはここ最近だ。まだ妖怪達は全然力つけてないんだよ」

「なーんだ、つまんない」

足をバタバタさせ、ブーブー言い始める。

「俺は昨日完全な妖怪になったが、それまでは半分妖怪だったんだよ。人間ってのは、自分に危険を及ぼすと考え始めたら、凄まじいからな。人間に狙われ続けて、ここに逃げてきたんだよ」
そう、フランに伝える。

本来は妖怪の力を、自分の体から抜くのが目的だったが、濃厚な3日間を過ごして、気が変わった。

相棒のシールも居るし、この人はみんな楽しい人達だ。それに、狼姫も死んでしまった。なら妖怪として、一生を過ごしてやろうじゃない。

人生常に枝分かれの道である。

「ふーん。やっぱり、人間ってズルい生き物なんだ。光介優しいのに、殺そうとするなんて」

（子供って、うるさいがいいもんだな）

誉め言葉を貰ったので、頭を半分グシャグシャにするかのように撫でて、俺は立ち上げる。

「さて、お話は終わりだ。そろそろ俺は帰るぜ」

「えー、もっとお話したい！」

駄々を言い、袖を掴むフラン。

「夜になったら起きるだろ、その時に元気じゃねえと遊ばねえぞ？元気だったら、いっぱい遊んでやるからよ」

そう言くと、少し考え初めて、

「わかった・・おやすみなさい」

と、フランをナイトキャップをかぶり、布団を掛けて横になった。
「おやすみ、フラン」

そう言い、薄暗い部屋から出る。もちろん、ドアを閉めて。

（さて、またホール辺りを巡回しようかね）

階段を上がり、フワフワ飛ぶシールを頭へ乗せて一階を目指す。
今日の夜も、結構疲れる事になりそうだ。

さて、お仕事お仕事。その2（後書き）

ホールに着いた俺は、何やら紙を持った咲夜さんを見つける。

「咲夜さん、何か仕事ない？」

友人のように声を掛ける。

「ああ、いいところに。はい、これ」

紙を見ると、紅茶の葉っぱとクッキーなど、明らかにお茶会とかで使うような物が書かれている。

「お嬢様、色々と試してみたいとか言ってたから、色々な種類のをたくさん買って来てもらいたい。お金は10万渡すから、この範囲で」

説明を受け、金を受け取る。

あれ、日本円使えるの？初めて買い物した時に、見た事ないとか言われてたよ俺。

疑問を抱きながら、俺は短い足を動かして外へ行く。外ではお昼になっているのか、弁当などを食べるメイド達がいる。

「お、光介じゃん。これ食べる？」

ルルに声を掛けられ振り返ると、大きめのおにぎりを差し出されていた。

「お、昼まだだったんだ。サンキュー」

「どういたしまして、姉貴が作り過ぎるから参ってたんだよ。まだ2個あるんだぜ？」

確かに、女の子が食べる量にしては大過ぎるな、これは。

俺は小食だからあまり食えやしないが。

「そんじゃ俺ア、人間の里行ってくる」

「おー、気をつけていけよ」

軽く手をあげてルルに返し、おにぎりをかじりながら門へ飛ぶ。門を飛行で出ると、美鈴さんが暇そうに座っているのが見えた。ありゃサボってんな、いい年こいて花占いしてやがる。

「もうお昼ですよ、美鈴さん」

声をかけて、俺は後ろへ着地する。

美鈴さんはビクツとしてこちらへ振り向く。

「あー、びっくりした。咲夜さんだったら、怒られるところでしたよ。この事は、内緒ね？」

安心したかのようにため息をつき、人差し指を口に当てて言う美鈴さん。

「んー、サボる気持ちはわかるからな、一応内緒にしておくよ。ただ、見つかったら自業自得」

そう忠告して、高速飛行で館を後にする。

一応言うが、この高速飛行は滅茶苦茶速い。どのくらい速いかと言うと、ジェットコースターの怖さが真っ直ぐ飛んで味わえるくらい怖い。

「風すげえ、髪が・・・」

台風並みの風を真正面から受けるため、髪がグシャグシャになっていく。それに着いてくるシールは、相当スペック高いのだろうな。

風と一体化するかのように大空を飛び、俺は人間の里入り口までの空の旅を味わっていた。

誘拐されました。（前書き）

里に着くと、また猫の門番が居た。
此方を見るなり、槍を構えてくる。

「おーっす、元気にしてるかい？」

「む、お前か。また来たのか？武器渡して行くんだな」

また武器を要求されたので、鬼切を渡しておく。すると、あっさり構えを解いてくれた。

「お前、この間と格好が違っみたいだが、今日は何の用だ？」

「ん、お使いだ。俺ア、紅魔館で働いているんだ」

興味を持たれたので、素直に説明する。

「紅魔館だと？じゃあ、スカーレットデビルの仲間か」

「スカーレットデビル？なんじゃそら」

奇妙なあだ名が出てきた。

「知らないのか？何百年か前か紅魔館の主人である、レミリア・スカーレットが幻想郷を攻めてきたんだよ。当時、敵の血で白い服が赤く染まる程暴れた事から、スカーレットデビルと呼ばれるようになったらしいぜ」

初めて聞く話なので、俺はかなり驚いた。

妖力はかなりのものだが、強そうには見えないので特に危険な人物とは思っていなかったが、そんな異名が与えられるほど強いとは思わなかった。

「はあー、あの娘がそこまでやるとはな」

「ん、お前、ソイツに会った事あるのか？」

と、滅茶苦茶知りたそうに聞いてくる猫の門番さん。どこの猫も変わらず、好奇心旺盛だ

「いやあ、紅魔館がこの間変ちくりんな奴に占領されてたから、助けてやったんだよ。それで顔見せろーって事になって、初めて顔見たんだが、胸も全然ない少女だったぜ？」

苦笑いを浮かべ、当時の事を語る俺。

「え、じゃあ、図体デカいとかは・・・」

「ないない、俺より二回り大きいくらいだぜ」

手を振り、ありえないとアピールする俺。

「噂は嘘だったのか・・・まあ、疑問が解けたからいいや」

レミリア、どんな噂されてたんだろうね。少なくとも良い噂じゃないだろうな。

「さて、俺はお使いへ行くとするよ」

「おお、そう言えばそうだったな。まあ、頑張ってくれ」

ちよっとした敬礼をし、見送りをする猫の門番さん。

手を上げて別れの挨拶をし、俺は小規模ながら賑やかになっている商店街に歩を進めた。

誘拐されました。

この商店街のような場所は、教科書の内容をそのまま再現したかのような場所で、自分がタイムスリップしたかのような気持ちになる。「さて、紅茶とか売ってる店はどこかねえ・・・」

里をうつろついでみるが、定食屋や酒屋らしき場所しか見つからない。ここは外食店とかが立ち並ぶ場所かねえ？

場所がわからないので、金髪で日傘を差した女性に話しかける。

「お姉さん、紅茶とか売っている場所わかる？」

こういう時は、子供のふりをするとか結構役立つ。大抵の人間は案内してくれるからな。

「紅茶？坊や、お母さんお使いかしら、なら案内してあげる」

ちよろいぜ、こういう時ほど子供体型で良かったと思える。

女性の後をついていってみるが、どうも何か感じる。何かに見られているかのような、そんな感覚だ。

尻尾をバレないように生やして周りを見てみると、俺を囲むかのようになにかの目が見え始める。不気味だ、滅茶苦茶怖い。

「・・・何者だ、アンタ」

そう、威嚇の意味を込めて俺はソイツを睨みつける。

「あら、流石紅魔館の救世主・・・一筋縄では行かないわね」

突然空間のようなものが現れ、俺は即座に後ろへ下がる。

「なっ！？」

何かがパツクリ割れた黒い何かが見えたと同時に、景色がどこかの庭へと変わる。

「あなたは鬼切を持っていない・・・絶好のチャンス。悪いけど、気絶してもらおうわ」

「どこで鬼切の事を知った？あれは封印されているって情報が普通だろ」

鬼切の事まで知っている女に、俺は強い警戒感を抱く。尻尾は既に

5本解放されているので、いつでも逃走できる。

「私は、スキマ妖怪の八雲 紫。あなたの事は、全て覗いてたわ」
覗いていた・・なら、風呂の時とか寝言まで聞いてんのか？ 気持ち悪っ！ ストーカーかよ。

「あなたは危険かもしれないから、少し眠って貰う」

手をかざし始めたので、すぐさま逃走を始め、ジグザグに森を走り抜ける。

「無駄よ、私は境界を操れるから」

くぱぁと黒い何かの切れ目が目の前に現れ、紫と名乗る女が現れた。反射的に圧縮玉を作り、それを投げつけてやる。すると圧縮玉は紫の前方で爆発し、大きな魔力の衝撃波が発生する。

「やべえ！」

衝撃波は此方まで来て、俺は即座に尻尾を前方へかざして盾にしてそれを受け流す。

尻尾がビリビリ痛むから、多分相当毛が抜けた。

「改良しねえとな・・爆弾だとこっちまで危険だ」

尻尾を一本残して全て消し、俺はそう呟く。

「へえ、まるで勝ったかのような台詞ね。所詮は若造か」

いきなり、体の力が抜け始めた。

（なんだこりゃ、何された、俺は。畜生、鬼切さえあれば・・・）
急に視界が真っ暗になり、俺は意識を失う。最後に見たのは、嬉しそうにニコニコ笑う紫の姿だった。

――八雲 紫視点――

ようやく手に入れた。彼の事を、結界を破って入って来てからずっと監視していたけど、半妖でここまで強いのは見た事ない。

レミリアでも太刀打ち出来なかった男を倒す実力に、鬼をも滅する退魔刀の鬼切を扱える器。私としては、喉から手が出るほど欲しい人材。

既にレミリア側になっているみたいだけど、そんなのは関係ない。

どうしても此方へ付いてくれないなら、無理やり式神にするまでよ。
「しかし、改めて見ると小さいわね・・・」

彼は、私より背が低い小学生のような体つきで、抱き上げてみても腕に余裕がある。橙より小さいわ。

（こんな子供が、私と同等の力を持っているのかしら？）

そう、少し疑問を持ってしまふ。彼は外から来たから、おそらく後天型の妖怪だと思う。でも外には妖怪は居ないはず、どういう事だろうか。

「調べてみる価値はあるわね」

境界を家に繋ぎながら、私はそう呟いた。

誘拐されました。（後書き）

「玄関から入ってくださいよ、びっくりしちゃうじゃないですか」
そう、九尾狐の女が紫へ言う。表情は呆れたかのように冷たい目をしている。

「いいじゃない、藍。あ、ちょっと誘拐してきたからこの人お願い」
紫は藍と呼ばれた九尾狐に光介を見せる。

「ん？この子この間の・・・まさか寝ないで探してたのって、この子ですか？」

藍は、紫へそう質問する。

「そうよ、十二尾の狼少年。知り合い？」

「十二尾！？相当強いじゃないですか・・・彼は獣道はどこだって、この間里で聞かれただけです」

驚いた表情を見せるが、それは一瞬だけですぐさま表情が元に戻る。

「そう。あと、これを里で購入してきて」

そう言い、光介のメモと封筒を渡す。

「これって・・・茶会でも開くのですか？」

そう、紫に聞く。

「いえ、彼の買い物の品みたいだわ。彼と話をしたいから、彼の代理って事よ」

そう言い、自室へ戻り始める紫。

「あ、ちよつと待ってくださいよ！もう・・・仕方ない、橙。この人の世話お願い」

と、今で寝転がっている猫又に声を掛ける。

「はい」

橙は返事をし、立ち上がって光介を運ぶ。

「んー、悪い奴には見えそうにないね。この人誰ですか？」

と、橙は聞くが、もうすでに藍は出かけてしまった。それを知った橙は、不満そうに尻尾を左右にバタバタさせる。

「んー、コイツなんだろう・・・藍様も行ったし、どうすれば・・・？」

ウロウロ歩く橙。一向に光介は目覚めないのので、少しおどおどしているようだ。

そんな中、光介は精神世界に旅立っていた。

俺の特技。（前書き）

ぼやーっとした風景が、少しずつ鮮明になっていく。見覚えのある暗闇の世界、間違いない、精神世界とかいうやつだ。

「フフツ、また会えたね、光介」

どこから持ってきたかわからないテーブルと椅子のセットを用意した狼姫は、椅子に座って妖艶な笑みを浮かべる。嫌な予感しかない。

「ん、気にしないで。今のは演技だから」

と、前に見た無邪気な笑顔を浮かべる狼姫。

「何の用だ？」

椅子に座って、俺はため息混じりの声を出す。

「光介。私の力持つてるのに、あつさりやられちゃったね」

そう言う狼姫は少し呆れた顔をしている。

「あんな・俺は身体能力一つで勝ってきたが、実戦経験は7回しかないんだ。いきなり強いのに会ったら、ひとたまりもないぜ？」

これは本当だ。昨日のような激しい戦闘は全く経験していない。

激しい戦闘以外のものを入れるとかなりあるが、大抵は切って終了って戦いだけだ。

「なーに、私もここに来た時はそうだったさ！戦って慣れるのだよ、少年」

慣れねえ・あんなのばかりだと、鬼切がない限り勝算は無い。

「鬼切がなくても戦えるようにしないとねえ・私としては、多少の妖怪なら退治できるくらいに成長してほしいんだ」

そう、師匠とかが言いそうな台詞を言い、考え始める狼姫。

「思うんだが、狼姫は死んでんだろう。なんで俺の夢の中に居るんだ？」

かなり不思議に思う。確か狼姫は殺されたとかで、俺に力をあげた後消えたんだっただよな？

「言っただじゃん、私は君と一緒に居るって。あれからは、君が私で私が君になっただだよ？一応精神は生きてるよ」

奇妙な事言いやがる・・・まあいいか。妖怪におかしい事なんて一つもない、常識的なのがおかしいのが妖怪だ。

「まあ、今回は少し話があるんだよね」。光介、妖気とか使えないでしょ？全然使われてないんだもん、呆れちゃうよ」

頭に手を当てて、俺の仕草を真似する狼姫。

「身体能力上げる事しかできないんだから仕方ないだろ、俺アちよつとした魔法と封印呪式をいじくれるだけだ」

「あ、そろそろ時間だ」

言い訳みたいな事を言つと、狼姫は突然走り始めて塔の下を覗き込む。

「今度ここに来た時に教えてあげるから。もう目覚めの時間みたいだし」

塔の発光で照らされている暗闇の世界は、徐々に明るくなり始める。まるで朝日のようだ。

「ま、その時までには私が助けてあげるよ。そんじゃ、頑張つてねえ」

すると、いきなり塔が消滅して落下する俺。

「ぬおおおおお！！！！」

滅茶苦茶悪い目覚ましを受けて、跳ね起きるかのように俺は覺醒した。

俺の特技。

「・・・ここは？」

見渡してみると、どこかの家なのは分かる。

どこだ、ここは？シールは居ないみたいだから、後で探さねえと。

「フーツ・・・」

後ろに猫がいるのか、警戒する時の鳴き声をあげている。

「・・・にゃあ（俺は敵じゃない）」

「・・・にゃ？（本当？）」

「にゃっ（何もしねえから来いよ）」

俺が声を掛けると、後ろの猫は少し警戒を解いてくれた。俺の特技の一つで、小さい頃からこうして猫の友達を作っていた。

何故できるようになったかは分からないが、いつの間にかできるようになっていたから不思議なんだよな。

「にゃ？（どうした？）」

「・・・お前、猫の言葉がわかるのか？」

人の言葉で喋り始めたので後ろを振り向いてみると、尻尾が2つ生えている妖怪が居た。ああ、コイツは猫又か。

「お、猫又ねえ・・・可愛いな、猫は」

「え、あ・・・誉めたって何も出ないよ？」

恥ずかしそうにそう言う猫又。

あー、猫又は人間に少し近い奴なんだよな。恥ずかしがってもおかしくはない。

「あー、何も出なくてもいいが、ここはどこだか教えてくれ」
まったくの知らない家なので、何すればいいか分からない。

「えっと・・・紫様の家。私と藍様で紫様をサポートしているの」

ゆっくり尻尾を振りながらそう答える猫又。どうやらさっきの発言に対して、嬉しく思っているようだ。

（猫又にも猫の習性が働くのかねえ？）

「で、何が目的なんだ？誘拐されたにしちゃあ、やけに自由だしよ」
縛られてる訳でもなく普通に立てるし、体は普通。だから余計訳が
分らない。

「私にも分かんないよ、突然連れてこられた犬が猫語理解できるし、
驚いてるのはこっち」

「犬って言うな、狼だっ！」

「犬と狼って、違いあるんですか？」

「あるよ！脳みその大きさとか、体格とか」

「礼儀正しいかと思ったらそうでもねえなコイツ。」

「で、俺帰っていいのか？夜まで帰らないとマズい」

「フランと遊ぶって約束したしなあ・・・情緒不安定らしいから、何し
でかすか分らん。」

「えっと・・・多分送ってもらえると思う。紫様は瞬間移動できるし
瞬間移動、境界の操る力・・・どこかで聞いたような。思い出せないな。」

「俺は何すればいいんだ？暇で仕方ない」
ボールを作りだして、ポーンと投げる。

「んー・・・寝てればいいと思うよ？基本的させる事もないし」
ふと、窓を見ていると猫が通っていくのが見えた。

「にゃあ（よーっす）」

「すかさず猫語で挨拶をする。」

「にゃ？（狼？）」

「にゃー（そうだが、お前らの言葉は話せるぜ）」

「にゃう？（何の用？）」

「にゃっ（遊ぼう）」

ある程度会話すると、その猫は開いた窓から入ってくる。

「本当に会話できるんだ・・・」

信じてなかったなこの野郎。俺の昔のあだ名は”猫大将”だ、会話
できなきゃ集められねえっての。

「にゃ？（どこの猫だ？）」

「にゃ（近くの森の猫）」

「にゃあ、にゃー（そうか、俺は遠くから来た）」

「にゃあー（そうなの、ご苦労様）」

「にゃあ？（触っていいか？）」

「ゴロゴロ（私は安くないけど、いいわよ）」

一通り自己紹介を済ませ、スキンシップを始める。

やたらプライドが高そうな雌猫だ。

「ねえ、何で会話できてんの？」

猫又がそう聞いてくる。

「ちっちゃい頃から友達を作ろうと必死になって身についた。どうやって理解したかは分らん」

「ふあゝっ・・・不思議な事もあるんだね」

あくびをしながらそう言うから、聞いてきたのにあまり興味が無いみたいだ。

じゃあ聞くんじゃねえ。

「にゃ・・・なかなかいい腕じゃない・・・」

「にゃあ（ダチの大半が猫だからな）」

どうやら猫はお気に召したようだ、ゴロゴロと喉を鳴らし、気持ちよさそうに目を細めている。

しばらくの間は、こうして時間をつぶそうか。何が目的だかを知りたいので、紫を待つしかない。

待つのも面倒なので、猫と昼寝をする事にした。そうして時間をつぶしている間に空は夕焼け雲に包まれ、寝ている俺へあの紫が近づいてくる。

俺の特技。（後書き）

―八雲 紫視点―

仮眠を取ってから数時間くらい経過したと思う。私は居間に居るであろつ、狼少年の元へ向かった。

「すう・・・すう・・・」

心地良さそうに眠っている彼と、どこかの野良猫がお腹に乗って眠っていた。

（こうして見ると、普通の男の子なのにね）

「橙、彼を起こして」

そう、藍の式神である橙に指示する。

「了解です。おい、起きろー」

頬をペチペチ叩き、彼を起こそうとする。彼は嫌そうな顔をし、知らない人間の名前を口にしてまた眠り始める。

橙はそれにイラツときたのか、瞼を無理やり開かせ、大声で彼を起こそうとする。まるで息子を起こす母親みたいね。

「んだよ・・・お前はアレか、俺の母ちゃんか？変な起こし方しやがって・・・」

やたら不機嫌そうに起き上がり、此方に気づいたのか、寝ぼけた顔を向ける。

「あ、誘拐犯の紫ババアだ」

彼は口が悪いようで、私はこの発言にムカついた。

（確かに、私だってかなり生きてるけど、ババアじゃないわよ）

「失礼な、私は永遠の18歳ですよ・・・」

殺気を込めて、威圧感を与えるように低い声で彼に言う。

「そーなのか。じゃあ一つ年上って事にしといてやる」

本当にム力つく奴だわ・・・なんか式神にするの嫌になってきた。

逃亡とちよつとしたお説教。（前書き）

はあ、面倒くせえ。

「目的は何だ。力ならやらねえし、就職先も決まっつてっから雇う事もできねえぞ?」

捕まえるって事は、何かしらの目的があるはずだ。多分十二尾の狼の妖力を手に入れるか、それを従えようとしてるのだろうかねえ。

「まあ、そんな所だけだ。先客がいるとはね・・・どうしようかしら」

尻尾をこっそり増やして紫を見ると、何やらお札のような形をした魔力が見える。おそらく何かの条件を満たさない限り外れない呪式か、式神として妖怪を使えるように改造する札だろう。

「簡単に式神にはされんぞ、夜まで帰っておかないと面倒だし」

そろそろ来るはずだ、上手くタイミング合うだろうか・・・

「へえ、それはどうかしらね」

紫が札を構えた。

（間に合え・・・!）

「っ!?!」

紫がバックステップをし、飛んできた弾幕を避ける。弾幕と共に駆けつけてきたのは、重そうに刀を持ったジャックとドヤ顔をしたシルバーだった。

逃亡とちょっとしたお説教。

どういう事だか説明しよう。どうやら俺は探知とかに優れた妖怪らしく、尻尾一本につき1kmくらいに居る味方を探知できるみたいだ。

ただし、知り合いとかじゃないと完全に判別できないみたいだ。里に居た時は妖怪だらけでよく妖気を感じとれなかったが、シールの魔力は離れていても分かったからな。

シールに伝わるよう、上空の雲を矢印するに妖力で操作してシールを案内したつてところだ

シールが賢い妖精で良かった。逃走に必要な物を持ってきたから、あとでご褒美でもやらないとな。

「それじゃ、逃げさせて貰うぜ」

刀を引き抜こうとしたその時、猫又と紫が射撃を始める。

「橙、刀を抜かせないくらいに撃ち込んで。刀抜かせたら次のチャンスは無いわ！」

おうおう、結局力目的か。ま、俺はもう雇い主居るし、そう簡単に仕事を変えるとまた路頭に迷う羽目になる。

そうなんつても食い物には不自由しないけどな。

激しい攻撃を俺は走って避け、ジャックとシールは小さな体で弾幕を避けていき、迎撃射撃をする。

「残念、抜かせて貰うぜ」

立ち止まり、刀を握りしめる。その間にも攻撃は止まずに、俺の体に数発命中する。

（思った通りだ）

完全な妖怪となった影響か、弾喰らっても小さな切り傷みたいなのが出来るだけで何ともない。刀を引き抜くと同時に、口が現れて弾を食べ始める。

「そんじゃ、帰らせて貰うぜー」

ジャックとシールを抱えて尻尾を全て解放し、刀を盾のように変化させて背中に背負い、割れた窓から逃走した。

当然の如く、追いかけてくる紫。

「絶対逃がさない・・気絶させてでも連れ帰る！」

そこらにある木々をお構いなしになぎ倒し、かなり範囲の大きい弾幕を撃ち出してくる。

「自然環境に悪い奴だなコノヤロー、もつと自然をいたわれよ」

盾を背負っているので、そこから現れている口によって、弾幕は俺に届く前に消滅していく。

鬼切は便利な物で、2〜3mくらいに弾や能力の効果が近づくと、口がどこにあっても自動的にそれを遮断したり食べたりするので、便利だが敵に渡ったらかなりの脅威になる武器でもある。

「仕方ないな・・シール、ジャック、捕まってる」

魔力を集中させ、全力で上へ飛ぶ。紫もそれに気づいたのか、追いかけてきて弾幕を放ち続ける。

「ドッグファイトか・・なら、ミサイルが必要になるな」

俺はジャックを握り、能力で形を変化させる。変化したジャックは、黒い筒のような武器になって、俺の腕に装置していた。

「ジャック、奴に出来る限り撃つんだ。いいな？」

構えてみるとエネルギー球が射出され、紫へ誘導していく。紫はそれに気づいたのか右へ急旋回し、それを日傘を叩きつけて消滅させる、

「日傘厄介だな・・目潰し喰らわせられりゃあ、多少時間稼げそうだな」

左手に拳銃を握り、目を狙って魔力を薄めに放つ。ジャックのエネルギー球の数倍の速度のエネルギー弾を紫は日傘で防御し、こちらへ加速して飛行する。

「つと、近寄ると危ねえぜ」

すかさず拳銃をフルオートにさせて、弾丸の嵐を紫へ浴びせる。紫も迎撃射撃でそれを相殺し、日傘を振りかざして突撃してくる。

「ハアアアアッ！」

即座に振りかざしていた日傘に背中の中の盾を叩きつけ、金属音と共に日傘は宙を舞ってどこかへ落ちていく。

何が起きたか分からない顔をする紫。ああ、こりゃもう戦う気失せただろうな。

「もう追っかけてくんなよ、俺は暇じゃないんだ」

武器がなくなり、戦意喪失している紫にそう伝え、俺はジャックを元に戻して館を目指す。

追いかけて来ない事から、諦めたのだろう。

できればまた追いかけて回されたくはない。そう思いながら、俺はその場を出来る限り速く移動した

逃亡とちょっとしたお説教。（後書き）

「で、どうしてこんなに遅れたのかしら？」

夕日が殆ど見えなくなつて暗くなつたホールに、俺とシールは正座して咲夜さんの質問を聞く。帰つてきたらすぐこれだもん、面倒くさいったらありやしない。

「スキマ妖怪に誘拐されかけてた。シールが居なかつたら、式神にされるとこだったよ」

そう言つと、シールは羽を軽く動かす。

「スキマ妖怪・・・八雲 紫の事ね」

「おお、ソイツソイツ！滅茶苦茶強いけど、何とか逃走出来たぜ」
咲夜さんはやれやれと頭をカクンと下げる。

「こうなるとは思つていたけど、よく逃げれたわね。今回は目を瞑りますが、次回からはお仕置きするから、覚えておくように」
お仕置きねえ・・・何されるか分からんから、ちゃんと守らないとな。

「あと、妹様が珍しく早起きして光介の事呼んでたわ。昨日みたいに遊びたいんじゃないかしら？」

ああ、今日約束したんだよな。うげえ、殆ど寝ないで活動するのかよ。若いからいいものの、年寄りとかには厳しいスケジュールだぞ。
「昨日みたいな遊びいいですけど、今日は違った遊びをしたら？似た遊びも飽きると思いますし」

違う遊びねえ・・・人形遊びしてもぶつ壊すイメージあるし、壊してもいい遊びとかってねえかな？

「あれ、3姉妹達何してんだ？」

ふとルルが視界に入つたのでそちらを見ると、リルと木刀で模擬戦みたいな事をしている。メイド服でよくそこまで動けるな、オイ。

「ああ、夜仕事が殆ど終わると、彼女達は特訓みたいな事をしてるんですよ。昨日の事もあつて、今日は激しいみたいですわ」

確かに激しい戦いを繰り広げているので、よほど昨日の襲撃が悔しかったのだらう。メイド服が所々破れていやがる。

修理や修復担当でもあるから、後で直しておかないとな。

「さて、じゃ適当に遊んでおくよ」

そう言い、少し浮かぶ俺。

「いいですけど、運動の後にはお風呂入れてあげてくださいね？」と、咲夜さんは注意するかのように言う。

「OK、それじゃ行ってくる」

シールもミンミン蟬のように綺麗な羽を動かし、ふわふわと浮き始める。俺はそれを確認して、ゆっくり飛行していく事にした。

―咲夜視点―

彼は妹様の部屋へ向かい、飛んで移動していった。昨日雇われたばかりの新人だけど、早くも妹様と仲良くなったみたい。

「・・・お嬢様の我が儘っぷりはいつもの事だけど、本当に大丈夫かしら？」

彼は案外、何でもできる人間だったからいいけど、何か裏を感じる。いきなり尻尾の数も増えているし、彼になついている妖精も強い力を感じる所から、普通じゃないみたい。

どうも怪しい。敵側のスパイかもしれない。

「・・・敵だったとしたら、逃げた方がいいわね」

彼は危険過ぎる。お嬢様でも倒せなかった男を、彼は簡単に倒した。だからこそ、もしもの事を考えて監視しておこう。

お嬢様と妹様の為にも。

散歩？その1（前書き）

地下部屋に着き、俺はフランの食事を持ちながらシールを肩車して中へ入ると、少し眠そうな顔をしているフランがいた。

「おー、寝ぼけてやがるな。おい、目エ覚ませ」

ぼーっとした表情でこっちを見て、こちらに気づいたのか、危なっかしい動きで立ち上がるフラン。

「光介・・・？」

「ほら、立って体操でもしろ。それが冷たい水でも飲むか？目覚めにはいいんだぜ」

テーブルに食事が乗ったおぼんを置き、そうフランに言うておく。フランは多少ふらつきながらも椅子に座り、あくびを一つする。

「血ちようだい」

そう言われたので、食事用の血をコップに注ぎ、フランの近くへ置く。

最近は吸血鬼でも臭いとか気にするのかねえ、この血からは鉄臭さがない。

フランはそれを少し飲み、こちらを向く。

「光介も飲む？」

普通なら断るが・・・こう、純粋な笑顔で進められるとな。俺は、少しだけそれを飲む事にする。

「・・・うん、血だな」

表情を変えないまま、コップをフランに渡す。鉄臭くないけど、味は鉄っぽいな。鉄分なら取れそうだ。

フランは吸血鬼だから、それが美味しく感じるのかねえ、美味しそうに飲んでやがる。

持ってきた血を全て飲み干して、フランは満足げに立ち上がり、鉄の扉を開けて外へ出る。

「さて、今日は何するんだ？」

コップなどをおぼんに乗せて、フランに質問する。

「んー、じゃあ散歩でもする？」

フランはそう言い、此方を振り向く。

「あれ、お前外出られんのか？」

扉を出て、扉をゆつくりと閉める。

「ううん、庭までなら大丈夫って事になってる」

そんじゃあ夕涼みでぶらぶらすのと同じじゃねえか。たまには外に出ればいいのに。

「あ、外行けるかも」

「？」

俺の発言に、首を傾げる。

「いや、少しいい手を考えてついたんだよ。ちつとばかり、制限付くけど」

そう言い、リュックから鉄の塊になっている鬼切を取り出す。そこから、小さくシンプルなデザインの指輪を作る。

「これって？」

指輪を見て、興味深そうに質問するフラン。

「何、付けてみりゃ分かる」

フランに指輪を手渡す。

「・・・特に変わらないよ？」

不思議そうに指輪を見つめる。

「そうだな・・・コップ能力で壊してみろ」

フランはコップに目を向け、拳を握りしめる。が、コップに変化はない。

「壊れないよ・・・何これ!？」

マジックを見た子供のようにはしゃぐフラン。

「それで能力を封印しているだけ。これで外に出られるかもよ？」

そう言い、階段を登り始める。

「ホント？アイツいつも能力がちゃんと使えるようになったらって

言うし、うんざりしてたんだ。やっと外に出られるよ」

嬉しそうに、後ろに着いてくるフラン。

「まだ決まってねえぜ？この後交渉しに行くんだから」

無断で出て行くのは大騒ぎになりそうだな。

フランはもう決まったかのような気分になっていて、頭から音符マークを出してやがる。

しかし、肩に乗っているシールは不機嫌そうにむすつとしている。

「どうした？シール」

応答無し。変わりにプイツとそっぽを向く。

何か悪い事した覚えはないんだけどねえ。嫉妬でもしてんのか、コイツ。いや、そりゃねえか。

「さて、上手くいくかねえ」

階段を登りながら、俺はぼそつと呟く。もうすぐ図書館前だ。

散歩？その1

さて、現在位置はと言うと、レミリアが居る部屋の前である。レミリアはいつも、ここで紅茶を飲みながら過ごしているらしい。どこから収入が入るんだろうか、いずれ聞いてみようかね。軽くノックをすると、咲夜さんが出てきた。

「何の用？」

扉を閉めて、咲夜さんが質問する。

「いや、ちつと交渉したい事があるんでね。フランの事だ」

咲夜さんは少し考え始める。後ろに居るフランは、どこか落ち着きがない。

「・・・わかったわ、入って」

咲夜さんの許可を得て、部屋に入る。

「あら、光介じゃない。何の用？」

昨日能力で作った紅茶を飲みながら、レミリアは俺を見る。

「んー、ちよつとお願いがあるのだ」

そう聞くと、紅茶を飲む手が止まり、テーブルにティーカップを置く。

「要件によるわ」

「フランを外に出したい」

部屋がちよつとした静寂に包まれる。難しそうな表情をするフランと、平然とした顔で見守る咲夜さん。

「・・・光介が護衛として、外に居る間四六時中フランを守るならいいわ」

レミリアが口を開き、そう答える。

「お嬢様・・・本当によろしいのですか？」

咲夜さんは低い声でレミリアに確認をとる。

「そろそろ外の世界について触れ合っておかないと、フランの視野は狭いままだわ。それだと私の妹としても、釣り合わないじゃない。

フランが暴れ始めたら、光介が止めればいいだけよ」

少し見下している部分はあるが、案外妹さんの事思っているんだな。少しだけ、レミリアの事を見直す俺。

「安心しとけ、俺があげた指輪でフランの能力封じてる。外さない限りは大丈夫だ」

俺は指輪について説明する。

「そう・・フランをよろしくね」

レミリアは紅茶を飲み始めて、アイコンタクトを送ってくる。

「ありがとさん」

フランは嬉しそうな顔をして、部屋から出ていく。後を置いて、俺は部屋を出た。

咲夜は、レミリアに質問する。

「いいんですか？ 認めたくはないですけど、彼はお嬢様より強い男ですよ。このまま従い続けるように見えません」

レミリアは咲夜を見る。

「大丈夫よ、彼は悪い人ではないわ。人間は、吸血鬼に血を吸われると自分も吸血鬼になるって説を信じているでしょ？ でも彼は迷わず、フランに血を与えた。お人好しなのは確か」

そういうレミリアは、どこか自慢げだ。

「それに、彼は報酬に答える仕事をする傭兵タイプの人物みたいだから、利益があれば従うわ」

レミリアはそう語る。

「そうですか」

咲夜は納得しきれていないようだが、とりあえずその場は納得する事にした。

「あれ、妹様じゃないですか!？」

許可を貰ったので、門を出たのだが、美鈴さんに出くわした。あたふたしてると思ったら、全力で走ってくる。

「だ、駄目ですよ! 外出るの禁止されているじゃないですか!？」

おお、大の大人が滅茶苦茶焦っていやがる。

「いや、許可貰ったから大丈夫だ」

俺は刀に戻した鬼切を数回叩く

「護衛役として、俺がお供するのが条件だ。普通に通しても怒らねえよ」

そう言つと、少し考え始める美鈴。

「大丈夫だよ、ちゃんとお姉様の許可貰ったもん」

フランもそう美鈴さんに言い、まだかまだかとそわそわする。

「了解です。早めに帰ってきてくださいね?」

美鈴がそう言つた途端に、フランは走り始める。

「おい、俺置いてくな!」

飛行し、フランを追いかける。

(まあ、初めての外だからな。はしゃぐのも普通だろうな)

フランを追いかけっていくと、早速フランは誰かと出会ったようだ。

「あ、光介。コイツ誰?」

どうやらチルノのようだ。少し辺りが寒くなってるし。

「フランドール・スカーレット。レミリアの妹さんだ」

そう言つと少し興味があつたのか、フランに近寄るチルノ。

「あたいはこの妖精達のボス、チルノ。あんたは?」

「フランドールだよ。フランって呼んで?」

何だか知らんが、嫌な予感がする。

「弾幕ごっこする?」

「いいよ!」

当たった。巻き込まれない為にも、俺は審判員になるとするか。

「フラン。一応言っておくが、力は70%くらいまで抑えられてい

るからな」

能力を使えなくなるレベルまで封じると、30%ほど力が抑え込まれるのが鬼切の特徴だ。

「OK、じゃあ審判やって！」

そう元気よく答える。

「いいぞ。怪我とかも考えて、一発当たったら終了な」

一応、護衛として仕事してるので、怪我させないようなルールを設定する。

「コイツに勝てたら、あたいの武勇伝に花を添えられる。そしたらあたい最強って呼ばれるかも！」

チルノの頭はお花畑のようだ。妖精らしく、コイツは子供っぽい奴だな。

散歩？その1（後書き）

「それじゃあ、まず互いに向き合って」

チルノとフランを並ばせて、そう伝える。

お互いに向き合い、俺は次の指示を出す。

「互いに振り返って10歩下がる」

二人は背を向けて、歩数を数えながら歩き始める。チルノは興奮しているようで、顔が赤くなっている。

フランはと言うと、落ち着いた普段通りの顔をしている。

「それじゃ、ドンって言ったら始めていいぞ」

3秒ほど待って、俺は口を開く。

「・・・ドンッ！」

試合開始のゴングと共に動き始めたのは、チルノだった。叫びながらフランへと突進していく。さて、この勝負は誰が勝つのだろうか
ねえ。

散歩？その2（前書き）

結果はというと、結局フランの圧勝だったな。チルノのアイシクルフォールという技を見たが、あれは流石にバカすぎるだろうな。

「前方スカス力だし」

「ん、何の事？」

湖の涼しい風を気持ちよさそうに受けながら、フランは質問してくる。

「いや、何でもねえ」

手を少し振り、移動を始める俺。

シールはいつの間にか採ってきたブルーベリーののような物をかじりながら、フワフワと飛び回る。

「ねえー、外って広いけど何も面白くないよ。何で妖精しか居ないの？」

先ほどから、10体くらいの妖精が近寄ってきていて平行移動しているのを疑問に思ったのだろう。フランは不思議そうに聞いてくる。「妖精がいっぱい居るのは、俺が妖精に好かれやすいのと、ここが妖精達が暮らす森だからだ。森には全然人は居ないらしいが、例外が2人居るらしい」

1人はわかるとして、もう1人は誰なのだろうか。物好きか、魔法使いなのは確かだろうな。

「ふーん・・・どこに行けば人に会える？」

フランはワクワクしながらそう聞いてくる。

「里に行けばたくさん居るが、今行っちゃって、あまりいい事ないよ。フランが起きている時には、寝ている人間が多いからな」

そう伝えるとつまらなそうな顔をし、クルツと一回回る。

「あー、つまんなーい！」

外へ出たのはいいが、何も楽しくないようだ。フランはしゃがみ始める。

「外出たかったんじゃないのか？」

「歩いてばっかだし、何も楽しくない！もう歩きたくないからおぶつてよー」

フランは子供のように、駄々をこねた。

年は半端なく離れているのに、精神年齢は俺より下のようだ。

「しゃーねえな・・・おぶつてやつから、ちつと湖行くぞ」

そう言うのと、ささっと背中へ移動し、背中へしがみつくフラン。

「しょつと」

現在地は、森へ少し入ったところか。フランとチルノが移動しながら戦ったもんだから、ちよつと森へ入ってしまった。

背負ってみると、フランの体は俺より背が少し低いだけで、非常に軽い女の子だ。

（こんな華奢な体で、よくあんな力出せるな）

「おおお、マスタースパーク発射！」

「出るかつ！」

勝手にロボット乗ったかのような気持ちになってやがる。

「マスタースパークってなんだよ、何かのビームか？」

「マスタースパークっていうのはね、魔理沙が使う技で、すっごいビームがバーンって出るんだよ！」

興奮しながら、そう言うフラン。多分、幻想郷の魔女っ娘マンガとかの主人公だろうか。マンガあるのか、ここには。

魔理沙と言う魔女の話を聞きながら、目的地である湖へ俺達は向かっていった。

散歩？その2

フランの話によると、魔理沙という人物は実在していて、この森に住んでいる魔法使いらしい。

マスタースパークという技を使う強者のようで、以前フランと弾幕ごっこをして勝ったらしい。

弾幕ごっこがどういう物かは知らんが、現在のように力を抑制していないフランに勝ったって事は、俺と違って強力な武器があるから強いってわけじゃない、かなりの実力者なのだろう。

さて、情報整理はここまでにしておいて、目の前にある薄い光に向かうとするか。

「さて、あと少しで着くぜ」

フランにそう呼びかける。

「ねえ、あっち光ってるよ！」

フランは興味津々のようだ、背中でもぞもぞと動いている。

「さつき、妖精達が湖に向かってたからな。結構集まっていると思う」

チルノと戦っている最中に数匹の妖精が湖へ向かっていたのを見ていたので、多分集会でもやるんじゃないかと思っていたが、予想は的中していたようだ。

森を抜けると、月光のように光る妖精達が集まって、フワフワと飛び回っていた。妖精達の優しい光は、湖周辺を幻想的に演出していた。

「わぁー・・・」「すげえ・・・」

どう言葉にすればいいか分からないが、この光はどこか懐かしさを感じる。幼稚園の頃、初めて夜空を眺めた時感じた気持ちに良く似ている。

「人間だー」「いや、ちょっと違うんじゃない?」「妖怪だー」

近くに居た妖精がそう言う。気づいた時には、たくさんの妖精が近寄ってきていた。

「君達、だーれ?」

一匹の妖精が訪ねてくる。

「その館で働いている光介だ」「館の主人の妹、フランドールだよ」

それぞれ自己紹介をする。

「館で働いてるんだー」「どんな場所?」「あそこ昨日騒がしかったよね?」

はつきり言う。数十体の妖精に囲まれているので、どうすればいいか分からない。糞真面目に答えたら朝日が登っちまうよ。

「あー、まあ妖精メイドとかがいっぱい居て、昨日は狼に襲われた。以上!」

簡潔に話を終わらせて、妖精達の包囲網を抜ける。

「待ってよー」「お話聞かせてー」「何か頂戴」

面倒臭っ!幼稚園児かよ、質問多過ぎるだろ。若干物ねだる奴いるし。

「だー、チョコでも喰らつてろ!」

即座に草を抜き取ってをチョコに変えて、そこら辺にあった石で皿を作り上げる。

ちなみに能力で作った食べ物は何食べても問題はない。

石だろうがなんだろうが食べるように成分を変換させ、菓子にしたりできるが、自分は元が食べ物ではない物を食べる事に激しい抵抗があるので、まだ食べた事はない。

「この間チルノ食べてた奴だー」「ちょっと、横取りしないでよ!」

「うー、これは僕のなのー!」

一気に皿に乗ったチョコへ群がる妖精達。「ホントにいっぱい来るね。こんなに集まってるの、始めて見た」

フランドールは少し嬉しそうな口調でそう言う。

「俺もだ。つい最近までは妖精が居ると思っていなかったしなあ、外の世界にや少数の妖怪と人間が居る程度だし」

「ねえ、光介はなんで幻想郷に来たの？」

フランは、ちよつと思議そうに聞いてきた。

「・・・俺は、知らず知らずに約束を果たしに来たらしい。俺自身は、約束を交わした奴を殺そうとしてたんだがな」

フランは少し黙ってそれを聞く。

「今じゃ、殺そうとした相手を許してソイツを助けている状態だ・・・どうしてそうしたかも自分じゃよく分からねえ」

そう言い、空を眺める。空は星屑が散りばめられていて綺麗だが、空は何も教えてはくれない。

「多分、光介が優しい人だからだと思う」

フランは俺の手を取る。フランが握っている手には、昨日噛まれた後が残っている。

「光介は、私が死にそうになってた時に、わざわざ血を飲ませてくれた。それだけじゃない、館の為に戦って、悪い人を退治してくれた」

フランスの目は、どこか真剣な眼差しとなっている。

「普通だったら、怖がって何もできないもん。でも光介は、助けてくれた。だから光介は優しい人だと思うよ」

・・・気恥ずかしいな、畜生。

「・・・臭い台詞をべらべらと」

俺は顔をそらし、妖精達の方を見る。

「まあ、ありがとよ」

フランは笑顔を浮かべ、近くにあった倒れた木に座る。

妖精達は綺麗な光を出しながら、追いかけてチョコを取り合っているのを遠くで見つめ、静かな夜を過ごしていた。

散歩？その2（後書き）

その後、支給された懐中時計を確認したらいつの間にか午前3時になっていたので、フランを部屋に戻して俺は自室へ戻った。

睡眠時間が短い仕事のように見えるが、紅魔館の寮は咲夜さんの能力で時間が遅く進行するようになっていて、かなり寝ても遅刻する事がないらしい。

「っと、今日の日記終了・・・」

ペンを置き、絵日記の内容を確認する。

今日誘拐されかけた時に会った猫又と、たくさんの妖精達の絵が書いてあり、それぞれの出来事が記録されてある。

相変わらず絵の方はデフォルメされた可愛い絵に見えるんだが、これが自分の画風だから仕方ないだろう。

「で、シールは何か書きたい事あるか？」

シールは首を横に振る。何も書く気はないようだ。

「ま、今日は色々あったし、早めに寝るとするか」

ジャックは既に魔力が抜いてある状態なので、何もの反応がない。

シールはメイド服からパジャマ姿になっていて、眠そうに目をこすっている。

「ハア、マジで疲れたぜ」

誘拐されるわ、説教喰らうわ、ロクな事がない1日だった。まあ、例外が一つあったが。

ベッドに入ると、シールももぞも動き、顔を掛け布団から出してこっちを見る。

「おやすみ、シール」

目を瞑って、俺は夢。世界へ旅立とうとするが、見えたのは夢の景色ではなく、また自分の精神世界だった。

PV1万突破記念「家を出る光介」（前書き）

最初の目標としていたPVが1万突破出来たので、記念作として家を出る頃の光介のエピソードを書く事にしました。
それでは、お楽しみ下さい。

PV1万突破記念「家を出る光介」

「・・・い」

何かが聞こえる。

「・・・エ覚ませ」

ああ、親父か。

「起きろってつってんだろ」

ゴンツとぶん殴られ、頭にたんこぶができそうぐらいの痛みが走る。

「痛ってえ・・・何しやがる！」

「こっちの台詞だ、バカヤロー。まあ勝手に外出やがって、いい加減妖怪の力抑えらんねえのかよ？」

札を数枚持った親父は、面倒くさそうにそう言う。

「仕方ねえだろうがよ、魔力とか霊力とかと違うやつだしよお、癖がありすぎるの！」

外は月光に満ちた山道で、俺は親父の車に乗せられている。また急に起き初めて、脱走した後のようだ。

「・・・なあ、親父」

「何だア？」

「俺家出るわ。呪った相手倒してくる」

この間から思っていた事を言う。何時までも迷惑かけたかねえから、倒しに行こうと考えているのだ。

「・・・そうか。別に戻ってこなくてもいい。どっかで永住すんのもいいだろ」

親父は、少し真剣そうにそう言う。

「止めないのか？」

「止めねえよ。お前が決めた事だ、自分の事ぐらい、自分でやれ。お前にはその力があるだろう？」

多分、物の形を変えたり、全く違う物へ変化させたりする、家に伝

わる秘術の事を言っているのだろう。

「まあな・・だが、母さんや姉ちゃんはいいいとして、三生は大丈夫かねえ」

「ああ、確かお前にべつたりだったもんなあ。作文で私のお兄ちゃんとか発表していたかな」

少し笑みを浮かべながら、親父はボコボコのポンコツ車のハンドルを操作する。

「止めろ、黒歴史を掘り出すな・・あの日は俺が授業参観行っただぞ」

中2の頃だったか、当時五年生だった三生が家族の事を作文で発表する事になっていたが、親父が依頼だらけで困っていて、俺が代理として休日を潰して学校に行っただったな。

マジでビビった、あの作文は。俺の細かい仕草まで書いていやがって、それを発表しやがったから背筋が凍りついた。

「まあ、三生は任せろ。安心して出ていけ。だが、その前に話す事がある。家に着いたら修行場で待ってる」

親父はそう言い、アクセルを思い切り踏んだ。ポンコツ車が悲鳴をあげながら、スピードは徐々に上がっていく。普通に交通違反のスピードだが、ここは誰も通らない場所なので、普通に大丈夫だ。

自宅のデカいお寺がドーンと出向かえて、お寺の中へ入っていく。お寺を増築したりするのは簡単なので、親父の心霊関係の仕事でしこたま稼いで生活してるって所だ。

お寺には沢山の修行僧が居て、大抵は親父のような仕事をする為に修行している人達だ。今は全員寝ているが。

「んじゃ、修行場に行くてくる」

車を降りて、霊能力の修行をする為の広い部屋へ入る。普通に体育館ぐらいの広さがある部屋には、大量の針やら鉛筆やら置いてある。とりあえず隅っこにある座布団の山から一個座布団を取り、座って待機する事にした。

「おい、居るか？」

十数分待って、親父が来た。その手には杖のような物がある。

「居るぜ、ここだ！」

呼ぶと、親父が此方に向かって歩き始めたので俺も立ち上がり、真ん中辺りで合流する。

「渡す物がある。コイツだ」

と、杖のような物を渡す。

「んだ、コイツ」

何やら引き抜けそうな切り目が入っていたので、引き抜いてみると蒼いオーラと共に刀身が姿を表す。直刀のようで、真っ直ぐ伸びた刃に綺麗な波模様がある。素人だからわからないが、多分名刀だろう。

「先祖代々伝わる刀だ。世界の鍵となる大いなる刀で、銘は「鬼切

」」

「世界の、鍵？」

確かに、親父以上の強力な力を感じた。だがスケールが大き過ぎる。世界の鍵ってなんだよ。

「ああ。お前が旅立つと聞いてから考えて、これをお前に託そうと思っただけ」

託すって事は、何か頼む事があるんじゃないかねえ。

「次期当主の継承儀式として、この鍵となる刀を渡す事を先祖代々続いている。お前は今日から、写宮家の当主として名乗るんだ」

そう言う親父の目は、息子として俺を見ていなくて、一人の男として対等に見ているように感じた。

「・・・了解だ、親父」

杖のような刀は、形が本来のと違うようなので戻るように力を注ぐすると、俺が使うのには大き過ぎる立派な日本刀になった。

「ソイツには、全ての境界を打ち消す強力な魔人の力が込められている。結界をも切り裂く強力な武器だが、鬼切は封印された事にな

っている。無闇に使ったりするなよ」

親父は、真剣そうにそう言った。

「それじゃ、普段は塊にでもしとくよ」

すぐに能力で取っ手のついた鉄球にして、それを握る。

「じゃあ、俺が上手い事言っとくから、早めに寝ておけ。荷物は俺がやっとくからよ」

そう言つて、親父は修行場から出て行つた。

さて、明日からは行き当たりばつたりの旅路になりそうだ。

PV1万突破記念「家を出る光介」（後書き）

午前4時。誰も起きていないが、日は少しだけ見える。そんな時間帯だ。

「荷物OK、財布OK、後はゲーム機でも持っていくか」
と、PSPを持ってカバンに入れる。

自室からそつと出て、こっそり玄関を開け、外へ出る。出迎えてくれたのは、真つ白な猫であった。

「・・・いいの？」

「ああ、自分で決めた道だ。後悔もねえよ」

コイツの依頼もあるし、俺自身呪いは解きたい。呪いが解けなかったら、その地で永住準備でもするさ。

「それじゃ、行こ」

猫は原付の籠に乗る。

俺は後ろを振り返って、玄関を見つめる。が、特に未練もないので、すぐに原付を押して歩いていく。

門の外には、たくさんの猫達が居た。今まで俺と遊んできた猫達だ。「・・・にゃあ（ありがとな）、にゃー（いつかまた、広場で）」

そう伝えると、猫達は出迎えるのを止めて、山道を歩き始める。どんな意味でそれを言ったかを、ちゃんと理解してくれたらしい。

俺は原付のエンジンを掛けると、軽快な音を立ててエンジンが掛かる。

「行こう。幻想郷へ」

アクセルを全開にして、山道を駆け抜けていった。空はこれでもかと快晴で、清々しい旅立ちとなっていた。

俺の長い長い超大作、写宮光介の異界伝の始まり始まり・・・

贅沢な特訓。（前書き）

「吸血鬼と仲良くなったんだね」

精神世界が少し変わっていた。塔の装飾に赤色が加わって、鈍い光を放つ。

「どういう事だ？この間までは、こんな色なんか無かったぞ」

「絆だよ。君とあの少女との」

多分、フランの事だろう。

「まあ、妖怪だが俺の友達一号のような感じだしな」

「フフ。君は猫以外に友達が居ないから、いい事じゃない」

「テメエ、何で知ってやがる」

コイツに話した覚えは全く無い、どうやって情報入手したんだろうか。

「それは、今は君が私で私が君だから。君の記憶ぐらい、知ってて当然だよ」

コイツには隠し事もできそうにないな。何でこんなの受け入れちまっただか・・・

「私、あれからちよつと考えただけど、手っ取り早い方法が見つかったからそれをやろうと思うの」

と言うと、狼姫はどこから持ち出したかは知らんが、木刀を取り出した。

「こんなのでどんな修行だよ。これでチャンバラか？それじゃ剣道の修行だぜ」

そう言うのと、指を横に振る。

「ノンノン、やる事は・・・」

指を唇に当ててにこやかに笑い、

「贅沢な修行！」
と言った。

贅沢な特訓。

やる事はこうだ。

その1、まず狼姫が妖力を送って妖刀を作成するので、それを真似して木刀に妖力を送る。

その2、木刀を壊さないように妖力を送りつけ続けて、自分専用の妖刀が作れたら終了。

これだけという簡単そうな修行である。

夢の中だから木刀はいくらでも作成可能で、疲れずに妖力を出しまくれる。狼姫の言う通り、贅沢な修行だ。

しかし、世の中は

「うううう」

甘くない。刀身がへし曲がり、木刀が折れる。

「あー、これで何回目だよ!!」

これで計20回目の木刀破壊だ。全てが妖力の制御不能によるもので、粉々になったヤツもあれば、突然電流が発生して焦げたヤツもある。

「ファイトー、次行くよ」

のんびりとそう言い、木刀を投げ渡す狼姫を一度ぶん殴ってやりた

い。
力加え過ぎると木刀が何かしらの形で壊れ、逆にゆったりと力を加えるのには集中力が必要で、集中力が切れるとすぐに力が強く加わる。非常に加減が難しい修行なのである。

「ぼーっと見てないで、何かコツ教えるよ!」

「いいよ、ヒントはねえ・・・己の感性を信じる!」

コイツふざけてやがる、んな事でできるんなら誰だつてとつくにやれてるっての。

「じゃあ適当にやってやんよ、これできなかつたらしばらくかな」
青くなれー、青くなれーと念じながら、これだろうと考えた力の分

量を注ぐ。

すると、少し経過してから青く光り始める。

「おおおお？」

失敗したらまた一年からやり直した。そんな事にはなりたくない。成功してくれ・・・！

「おー、合格合格」

突然黒い何かに木刀が包まれたと同時に、狼姫が合格を伝える。

出来た妖刀は鬼切には及ばないが、強い力を放っているのが何となくわかる。

「ふーん、丈夫になったただけの木刀か・・・案外丈夫ってだけでも使えそうだね。普通妖怪は武器とか使えないし」

武器を使わないってのはどういう事だ？幻想郷で初戦闘した時にはデカイ武器使ってる奴がいっぱい居たのに。

「俺が戦った妖怪は金棒とか使ってたけど、あれは？」

「素早く動かせるけど細かったりする物は普通使わないのよ。壊れちゃうし、大してダメージ与えられないから」

そついう理由か、なら使わないだろうな。妖怪にとって壊れにくい物となると、必然的に狼牙棒や金棒のような重くて頑丈な物になるだろうからな。

「で、修行は終了なのか？」

「うーん・・・もうちょっと続けたいんだけど、どうやら時間みたい」
狼姫は腕を組んでそう言うと、塔の光で照らされていた暗闇の世界がうつすらと明るくなり始める。

「まあ、また夢見れる状態だったらここに引きずり込むから、その時にまたやろつか」

引きずり込むって、言い方悪いなあ。

「了解、適当にこなしてやらあ」

「うん、如何にも君らしい回答だ。じゃ、現実世界でも試してみてね。色々な物にやれるから」

だんだんと光が強くなり、意識が少し薄まり始める。

「おう、ありがとな、狼姫」

そう言うと、以外そうな顔をして、狼姫は向日葵のような笑顔に向けて、

「私の本当の名前は雪しゆへ、これからはそう呼んでね。じゃ、また今度」
嬉しそうにそう言った。寝起き前のぼやけた意識になって、消えていく世界を見る。そして瞼に映る景色は、太陽に光が当たって赤く映る自分の瞼の内側となった。

贅沢な特訓。（後書き）

「んーっ・・・ふう、頭がぼーっとする」

多分、延々と精神世界に居た影響か、体は好調だが頭が上手く働かない。シールは此方を見つめ、心配そうに見つめている。

「いつも通りだから安心しろ、飯食うぞ」

マジックアイテムの一種らしい、冷蔵庫のような物を開け、食材を出す。

シールは安心したのか、棚から包丁を取り出して渡す。

「ん、ありがと」

今日の朝メシは、スクランブルエッグとサラダにコンソメスープとパンだ。お礼替わりとして貰った物だが、ここは洋食が主に食べられているようだ。基本的和食派なのだが、これを機に洋食も作れるようにしとくか。と考えている。

朝食を食べ終えて、俺とジャックは執事服へ、シールはメイド服を着て外へ出る。今日は曇り空のようで、レミリアやフランが外へ出ても問題なさそうな曇り空だ。

「おーっす、光介！」

ルルが元気そうに肩を叩く。

「朝っぱらから元気だな、いつもこの時間か？」

現在、朝の5時で勤務時間まで2時間も空きがある。

「うん。姉妹の中じゃ、一番早起きだし」

この年でこの時間に起きるのは関心できる事だ。まあ、絶対に遅刻しないように時間が遅くされているんだけどな。

「それじゃ、集会に遅れんなよ？」

手をぶらぶら振って、ルルはどこかへ行ってしまった。集会ってなんだろうか？

「まあ、後で聞けばいいだろう」
予想以上に早く起きたので、適当に散歩へとぶらつき始める俺であった。

奇怪な夜。「図書館での仕事」(前書き)

「えー、昨日はバタバタしていて集会をせずに作業をしていましたが、皆さんの協力で昨日で全て終わらせる事ができました」

現在、ホールで咲夜さんが話をしている。時刻は7時前で、集会では仕事前の予定などを話すらしい。

「では、知らない人は居ないでしょう。この館の恩人である、写宮光介君が昨日から働いているのですが、今日改めて紹介しましょう」
合図の言葉を言ったので、素早く歩いてシャキツとした態度で咲夜さんの隣に立つ。

「担当は主に護衛なのですが、普段は皆さんのサポートをしますの
で、気軽に声掛けてください」

普通に担当する仕事を伝え、軽くお辞儀をする。

ここに居るのは雑用係の妖精メイド達に、少数の人間、獣人、妖怪のメイド達である。吸血鬼のメイドは基本的戦闘部隊のような人材なので、昼間は地下のトレーニングルームで訓練をしているらしい。

「彼に質問するのはいいですけど、あまり困るような質問はダメです
すよ？それでは、解散」

解散の合図と共に、半分くらいのメイド達が此方へ向かってきた。

どうやら、質問に答えるのに時間が掛かりそうだ。転校生の気持ち
が少し分かるような気がする。

奇怪な夜。「図書館での仕事」

「ふう、疲れた」

地下図書館の机に突っ伏して、居眠りをしようとする。あの後、質問に答えるのに30分ほど掛かったのと元々眠かったのも重なって、昼寝には丁度いい眠気がある。

「ダメですよ、居眠りは」

小悪魔さんがそう言い、肩をポンと叩く。

「うう、少しは寝てもいいじゃないですか・・・」

立ち上がって、大きなあくびをする俺。

「あとちよつとで休憩ですから、せめてそれまでは起きててくださ
いね？」

本をしまう小悪魔さん。

「光介ー、ちよつと来て」

遠くからパチュリーが俺を呼ぶ。

「OK、ちつと待ってる！」

広い図書館を、低空飛行で本を倒さないようにしながらパチュリーを探す。

「何の用だ？」

パチュリーを見つけ、声を掛ける。

「ああ、本を取ってきて欲しいの」

たくさん本を並べているのに、まだ本が必要のようだ。

「必要な本はここに書いてあるから、これで探してね」

そう言い、紙とマジックハンドのような物を渡してくる。

「・・・何故に玩具？」

「それはマジックアイテム。サーチハンドと言って、所持品を探す
時に使う物よ」

マジックアイテムか・・・戦闘用のは見た事あるが、日常品のマジックアイテムは初めてだな。

「どう使う？」

「物のタイプと名前を頭で唱えて動かせば、連れて行ってくれるわ」
紙に書かれた本は、圧縮魔法の書に上級障壁魔法の書、パラレルワールドの秘密という本である。

「了解」

サーチハンドの穴に手を入れ、握る。

「気をつけてね、それ暴れ馬だから」

「うえ？」

握った瞬間、いきなりパチュリーが遠ざかる。ロケットブースターでも付いているかのような勢いで飛び、肩が悲鳴をあげる。

「んあああああ！！？」

直角に曲がったりと、体に優しくない動きをするので、ジェットコースターより怖い。とつくにシールは振り落とされてしまい、どこかにぶつかっていった。

だったら手を離せばいいだろうと思うのだが、狭い図書館でこれほどの速度で振り落とされたりしたら、強く頭を打つ可能性がある。気絶したくない。

引つ張られながら、何とか解決策を出そうと考えてみるが、手を離す事以外にいい解決法が浮かばない。

「え、ちょ・・・」

一直線に本棚へ向かっていくのを見て、背筋が凍りつく。

「ぬおっ！」

咄嗟に尻尾を3本解放して身を守るように尻尾の盾を展開しようとするが、間に合わずに俺は本棚へ激突した。

衝撃により本棚から数冊、本が落ちて一つが頭に当たる。

「ーっ！？」

頭を抱え、悶絶する俺。足に引っ付いていたジャックは頭に当たった本を拾い、渡してくる。よくカボチャ頭外れなかったな。

「あ・・・」

本にはパラレルワールドの秘密と書いてあり、目的の本なのは確か

だ。パラレルワールドねえ・・・昨日の奴は異世界がどうか言っていたが、それについて調べるつもりなのか？

「俺にや関係ないか」

本を回収して次の場所へ向かう前に、サーチハンドを能力で見ている。元はただの玩具のようだが、術式は素人がやっているようだ。消費魔力をここまで少なくしているのは凄いが、機動力に関する箇所が過剰に働くようになっていて。勉強不足の奴が作った物か。

「武器に使えねえかな・・・？」

今の所何も思いつかないので、とりあえず1cmにして10作っておき、ポケットへ入れる。

「お、シール無事か？」

一冊の本を重たそうに持ちながら、シールは俺の元へ戻ってきた。打ち所は悪くなかったようで、やたらお尻を気にしているだけだ。

「おお、いい仕事をしたな」

シールが持ってきたのは上級障壁魔法の書だった。これで残すは圧縮魔法の書だけである。

「あっちにあつたよな・・・」

記憶を頼りに、昨日その本を見つけた場所を探す。

「これ、か？」

本を引つ張り出し、中身を確認する。中身は魔力を圧縮する様々な方法やイラストなどが書いてある。

「シール、ジャック、本を届けに行ってくれ。俺は調べ物が出来た」ジャックに本を一冊持たせ、シールは網を作ってその中に本を入れてやる。シール達は本を大事そうに持っていていき、ゆっくり飛行していった。

それを見届け、圧縮魔法の書を複製し、中身を見る。

「何が駄目だったろうか・・・」

俺がやった、圧縮魔法による広範囲攻撃についてである。

あの魔法は強力な風を生み出して吹き飛ばしたりできるのだが、どうもそれだけだとあまり使い道がなさそうだ。砂混ぜれば目潰しに

なりそうだが、それは俺のスタイルに合わない。

「・・・で、その方はどこに？」

本を読もうとした矢先に、初めて聞く声が聞こえた。知らない人のようで、尻尾を5本にしても俺の魔力レーダーに引っかからない。誰だろうか・・・

奇怪な夜。「図書館での仕事」（後書き）

客なのは確かなので、気にせず本を読もうとするが、異常な事態が発生する。

「・・・？」

風が吹いたのだ、それも強い風が。

地下図書館はダクトが付いているので、基本的風は吹かない。つまり何者かがそれを発生させたという事だ。

此方に向かつて走ってくる音が聞こえるので、急いで靴を脱いで靴下だけになり、

素早く静かに場所を移動する。

隣の本棚へ移動して身を隠して様子を伺っていると、足音が隣の本棚まで来たので耳をすます。

「あれ、居ないですね。確かこの辺に・・・」

また風が発生する。どうやらこれをレーダーにして探しているようだ。風魔法を扱う探知系の奴か？

（厄介事は避けたいところだ）

靴下だけしていると場所によって走りにくい欠点があるが、足音はなくなり消せる。しかも俺と小柄で体重が軽いので、走っても殆ど足音が出ない。

その利点を利用してささつと別の場所に移動する。

「あやや、また居ないですねえ・・・そう簡単に姿は見せてくれないますか」

今度は一時的に吹いている風が、常時吹くようになったので、尻尾8本でジグザグに走っていく。

「待ってくださいよー、私は怪しい者じゃありませんって！」

それを普通に追いかけてくるから凄い。魔力使ってくれているおかげで、方角だけ知る事ができるようになり、全力で逃げる。

奴はとてつもない飛行能力を持っているようだ。のほほんとしなが

ら俺を追っかけてきやがる、こんなの初めてだよ。

（なら、足止めてやる）

靴下を脱いで勢いよくUターンし、隣の本棚へ向かってスライディングしながら床に手を触れる。

能力を発動させ、床を材料に昔作った事がある、仕掛け付きの網を巨大化させたヤツを作り出す。

トラップに気がつかないのは当たり前で、飛行する何かが網へぶつかっていき、仕掛けが動いて網が締まる。

「うわっ、罠!？」

見た感じ、鴉の羽を持つ妖怪のようで、真っ黒な羽が背中にある。

鴉天狗とか言うんだっけか？ああいうの

「ソイツは鋼より丈夫な素材で出来ている、脱出は難しいぜ」

「ええっと・・・どうやって仕掛けました？」

「早く、早く、良質に仕掛けたぜ」

そう伝えると、鴉天狗は網を掴む。

「とりあえず、これほどいてくれませんか？」

「何か怪しいからヤダ」

即答すると困った表情になり、何やらメモ帳を取り出した。

「私は新聞記者なんです、あなたを取材しに参りました！」

新聞記者？俺にかよ。何かしたか、俺。

「俺ア、外来妖怪なだけの雑用係だ、もうちつと取材する相手選びな」

そう伝えて網に穴を開けて解放してやると、少し興奮したかのように鴉天狗は出てきて詰め寄る。

「そんな事ないですよ。あなたは一度異変を解決していますし、何より八雲紫に誘拐されて逃走したらいいじゃないですか！」

何で知ってやがる、誘拐されたのは咲夜さんとパチュリーしか知らないはずだ。気味悪いなコイツ。

奇怪な夜。「幕開けの夕日」(前書き)

取材してきた鴉天狗の女の人は、射命丸 文と言う人で、自分で取材してそれを記事にする新聞記者らしい。

情報を与え、適当にあしらったはずなんだが・

「・・・」

さつきからストーカーされている。シールも少し怯えているのか、ずっと袖を掴んでいて、ジャックは警戒しているのか目の部分が光っている。

「あ、忘れ物！」

くるつと振り返るとすぐさま飛んで移動し、視界から消える。

(視界に見えなくても、さつき知り合ったから普通に探知できるんだけどなあ)

「あ、フランがそろそろ起きる時間だ」

図書館の本の整理や掃除、雑用などの仕事をずっとやっていたので気づいていなかったが、いつの間にか夕方になっていた。

「まあ、あと2時間くらいだし」

ぶらぶらとホールへ向かっていくと、曲がり角や障害物がある時に移動していき、記者の文さんは付いていく。

「・・・誰だッ！」

ワザと大袈裟に振り返ってやる。

「っ!？」

ささつと置物の像へ隠れる文さん。

若干像が揺れていますよー。

「なわけないか」

振り返るのを止めて歩き始めると、また付いてくる。何をしたいのだろうか。

そのまま歩いていくと、リルがホールで暇そうにしていた。

「ウィーッス、元気かい？」

「そこそこね、ルル見なかった？」

短剣を手にしながら、リルは呆れたかのような口調で聞いてくる。

「見てねえ」

「やっぱり。アイツサボってどっか行く癖あるんだよな」

そう言い、頭を抱える。

「そうだ、条件を満たしてくれたらどこに居るか教えてやる」

そう伝えると、乗り気のように肩に手を置いてきた。

「いいわ、何が条件？」

「そこに、大男で筋力モリモリマッチョマンの像があるだろう？」

どういう趣味だかはわからんが、無駄にマッチョな男の像がホール近くに置いてあるのだが、そこに文さんが隠れている。

「あれがどうしたの？」

「アレの後ろの空間を遠くに転移して欲しいんだ、マッチョメンの一緒にやってもいい。OK？」

奇怪な夜。「幕開けの夕日」

ここで説明をしよう。獣人3姉妹の次女、リルの能力は、何かを転移させる程度の能力である。

対象物を現在地に転移させたり、行ったことのある場所に移すことができる。

本人によると、知っている場所で、そこに何かがあるとわかっていないと能力は使えないらしい。

「OK、カウントダウン始めるよ!」

合図をすると、英語の螺旋がリルを中心に巡り始める。

「3、2、1、go!」

すると、マッチョの像が跡形もなく消えた。

像が置いてあった場所に、誰も立っていない。どうやら成功したらしい。

「で、どこに居るの?」

約束通りに、尻尾を全て解放して館内の搜索をする。

探知に引っかったのは、ここから300m先の二階だろうか。人型の魔力がうつすら見える。

「ベランダじゃねえの?二階の。ここの階段上がった方からみると右側だ」

ホールの階段を指差して、そう説明する。

「了解、ありがとねー」

すぐに走って行き、リルはその場を後にした。

「何すつかねえ・・・」

すぐにやる事もなくなり、ひとまず門へ移動する。

湖を眺めて時間をつぶそう。そう考えて門まで向かうと、今度はやたら騒がしい声が聞こえてきた。

「だから、許可がないと通せないんですってば」

美鈴さんの声だ。セールスマンでも来ているのか?

「別に減るもんじゃあるまいし、私はただの猫じゃない。通しなさいよ!!」

ん、声に聞き覚えが・・・

「でも、ここは犬一匹通すわけにはいかないですよ」

「じゃあ、光介呼びなさいよ! 私はソイツに用があるの」

間違いない、白猫だ。

「遅っ、遅い、遅過ぎる!」

ズカズカと近寄り、白猫に怒鳴りつける。

ポカンとする美鈴さんと、何やら興味深そうに此方を見るシール、完全に警戒してナイフを構えるジャック。

そして笑みを浮かべる、寺が崇めている神様、白波 猫美と名乗る神様が居た。

「あら、仕方ないじゃない。あんな時に別の仕事来るとは思ってたなかったもの」

彼女は、ネット小説とかでよく見る異世界トリップという物があるだろう? あれを執行したりする職業をしているらしい。それも全て一人で。

「あのなあ、確かにお前の言う通りにしたが、こんな事になるとは思っていなかったぜ?」

本来は呪いを解く為に、殺すかそれ以外の方法で何とかするはずだったが、予定が崩れてしまった。死なれて現在は同化するかのような形を取ってるし。

「そうね、これは私でも想定外の事だわ」

近くの椅子に座り、白猫はそう言う。

「お前でもか?」

「そう、私でも。それより・・・」

目を細めて、俺を保護者のような目で見つめてくる。

「彼女ができたのね、私を差し抜いて」

俺は見事に固まってしまい、シールは恥ずかしそうに後ろに隠れる。

「あらあら、テレビにいるわよ、彼女さん」

「いや、違う違う違う!」

手をブンブン振って、全力で否定する。

「ふーん、残念。じゃ、本題に入りましょうか」

白猫は真剣そうな雰囲気ですう言ったので、かがんで目を合わせる。

「今日から、私も幻想郷で生活するから」

「んあ?」

拍子抜けした。ありきたりな小説だったりすると、ここは敵の勢力について説明したりする場面なのに。普通に引越しの話かよ。

「別に構わんが、お前への信仰がねえと殆ど力が使えないんだろ?」
外の世界だとコイツは喋れるだけの普通の猫だったから、最初は殆ど信用しなかったんだよな。

「大丈夫よ。ここでは一部の人間達に、私は童話の神様として根強く知られているから」

妖怪として生まれる条件は満たしているって感じか。

「私の場合、そこの神様とはちよつと違うの。神を束ねる神様から直々に力を得ているから、そんなに信仰が無くても大丈夫なの」

「あー、止める。難しい話は嫌いだ」

俺の気はあまり長くないので、無理やり話を止める。

「・・・まあいいわ。今夜、私が来たって知らせる為にパーティーをするから、よろしくね」

パーティー・・・飯とか食えるのか?

「あ、入場料はお酒ね。とびつきり美味しくて強いヤツ」

そこんとは、レミリアに相談すればいいか?

「じゃ、今夜必ずね」

そう言い、椅子から降りて着地した途端、大量の煙が白猫から放出され、すかさず目を腕で隠す。

「あ、おいっ!」

白い煙はすぐ薄まったが、そこには白猫は立っておらず、美鈴さんの椅子が置いてあるだけだった。

「嵐のような人でしたね」

美鈴さんが、若干呆れた口調でそう言った。

戻ろうとした瞬間、何もない場所から手紙が現れ、美鈴さんの椅子へ落ちる。

そこにはレミリア・スカーレットへと丁寧に書かれており、拾って裏返してみると、招待状と書かれていた。

・・・マジっばいな。

奇怪な夜。「幕開けの夕日」(後書き)

「光介の知り合いねえ・・・」

一応レミリアに手紙を渡してみたなら案外乗り気のようで、興味深そうに手紙を読み始めた。

「私は白波 猫美と言う、しがない神をしている者です。今夜主催するパーティーにあなたを招待します。あなたの部下を連れて来てもいいので、是非とも来てください。お酒を持ってきたらと一層パーティーが賑やかになるので、持ってきたら是非持つてきてください。今夜私の家まで案内する魔法を各地に飛ばすので、よろしく願います」

「ねえ、咲夜。あなたも行くよね？」

レミリアは手紙を咲夜さんに渡す。

「お嬢様が行くならば、私も付いていきますよ」

どうやら咲夜さんも行く気のようなのだ。

「？」

ふと手紙を見ると、言霊のような物が込められている事に気づいた。霊夢さんなら気づくだろうが、他は分からないな。

「じゃあ光介、パチエとか適当に集めておいて。一応言っけど、メイド達はダメよ。仕事放棄させるわけにいかないから」

んー、本人が行くって考えてんだから、まあ大丈夫だろ。言霊まで使って呼ぼうとする白猫の目的は全然分からないが。

「OK、適当に集めておけばいいんだろ？」

手をひらひらと振り、俺は部屋を出た。

さて、誰から声掛けようか。

奇怪な夜。「出発」(前書き)

地下図書館。ここに来るのは4回目だが、単調なマップで構成されているのと、パチュリーの魔力を探知できる事もあって、探すのは簡単である。

「ウィーッス。もやしっ子よ、外出しないかい」

そう言うと、本を読んでいたパチュリーはすぐさま反応する。

「もやしっ子舐めたら、大変な事になるかもよ？」

おお、怒ってる。凶星だからか？

「外出しないと髪とかに艶出ねえぜ、お前も健康に気イ使え。レミアと飯食い行くんだ。お前も呼ばれているから行くぞ」

簡単に説明すると、パチュリーはすぐに嫌そうな顔をする。

「嫌よ。別にある程度生きられるなら健康じゃなくてもいいし、私は仕事があるの！」

本読むスピードが一気に上がった。どうやら忙しいのを演出して帰らせたいらしい。

「ふーん。お前ルックスはいいのにそんなんじゃ勿体無いよ」

これは一応本心である。

真っ白な肌は大抵好かれるだろうし、顔も上の中くらい。目立つようになつたら、ちよつとした人気者になれそうなレベルだ。

「・・・何それ。そんなの初めて言われたけど、誉めても私は行かないわよ」

あー、面倒くさい。呼べって言われてんだからおとなしく来て欲しい。

「そんじゃ、連行すんぞ」

携えていた鬼切を手錠にし、俺の手首とパチュリーの手首に手錠を掛ける。

「ちよ、何すんのよ！」

グングン引つ張ったりして抵抗するパチュリー。

「お前逃げるだろ確実に。魔力封じと逃亡阻止だよ」

腕をブンブン振られ、それによって俺も振り回されて本棚にぶつかる。

「あ、ちょっ、大丈夫？」

思いつきりぶつかった。力あるなコイツ、もやしっ子じゃないじゃん。

「あんまり振り回さないでくれ、こっちも封印効いてるんだから、俺は10歳くらいの力しかないんだよ」

滅茶苦茶痛い、たんこぶ出たんじゃないか？

「あ、ごめんなさい・・・」

「暴れんなよ、絶対暴れんなよ！」

体格で負けてんだし、現在の俺は10歳の子供だ。暴れられたら止められる自信がない。

「ねえ、これ何とかならないの？」

手錠を触れて、少し不満を言う。

「手錠と鎖で、お前だけ繋がるのしかない。それじゃ散歩プレイだろ」

「ああ、なる程・・・これより酷いわ」

繋がった状態のまま、今度は下へ降りてフランを起こしに行く。扉へ着くと、とつくにフランは起きているみたいで、扉の前に立っていた。

「待ちくたびれちゃったよ、光介！」

「悪い、コイツ連れてきたんだよ」

パチュリーと繋がっている手錠を指差して、フランに説明する。

「ふーん、何でパチュリー連行してるの？」

「光介が無理やりね。レミイとご飯食べに行くんだって」

パチュリーがため息を付きながらそう言う。

「私も行っていい？」

「いいぜ。その為に呼びに来たんだし」

「やった！」

喜び、すぐに階段を駆け上がるフラン。

「オイオイ、こっちは飛べやしないんだ。パチュリー、行くぞ」
手錠を引っ張り、パチュリーに合図をする。

「ハア、明日は睡眠時間が増えそうね」

文句を言いながらも、ちゃんと階段を登るパチュリー。

今回のお出かけ、俺が初めて護衛としての仕事をする事にもなる。
楽な仕事として終わればいいなあ。

奇怪な夜。「出発」

「あら、フランも連れてきたの？」

ホールに付くとワインが大量に入っている、大きな袋の隣に立っているレミリアが居た。

「ああ、集団で行動するには最適な機会だと思ってな」

知らない人と行くよりは、知ってる奴と行った方がいいたろっし。

フランはというと、袋をシールと一緒に覗いている。二人とも酒だと分かってないのか？

「ねえ、これ何？」

フランが不思議そうに聞いてくる。

「それは、ワインって酒。アルコールってのが入っていて、飲むと気分が良くなつて食欲が増すが、飲み過ぎると体の自由が効かなくなったりする」

簡単に説明し、瓶を一本出してラベルを見る。

よく分からないが、スーパールとかで買えるレベルには見えんな。

「値段幾らだ、これ」

「ざつと10万ポツキリです」

「高けえ！」

すげえ、10万飲むのかコイツら。相当金持っているのが分かったが、収入源はどこから来るんだろう。

「それでも、今日持つていく酒の中でも中ぐらの価値なんですよ」
おお、咲夜さん凄い発言しやがった。

「ねえ、もう諦めたから手錠外していいわよ」

本当に諦めたようなので、手錠を刀に戻して鞘にしまふ。ついでにシール達をリュックへ入るように指示しておく。

「さて、今から行くけど・・・光介、咲夜」

「はい」「ん？」

何やら真面目そうな声で呼ばれたので、レミリアの方を向く。

「何かあったら、私達を守るのはあなた達よ。気合い入れておきなさい」

「はいっ、お嬢様」「りょーかい」

返事を聞くと、レミリアは羽を羽ばたかせた。

「レッツゴー！」

そのままホールを飛び出していったので、咲夜さんとパチュリーは後を追いかけるように飛んでいく。

「じゃ、行こ？」

「OK」

袋を持って外へ行くと、星空に一本の光が出来ていた。ちょうど紅魔館で光は止まっていて、ここでの俺ん家の方へ向かっているように見える。白猫がやったのだろうか？

「凄い、光の道だ！」

フランは見た事もない空の異変にはしゃいで、光の方向へ突き進む。俺は護衛としての仕事をしなければいけないので、そのままフランへ付いて行くことにする。

「妖精達が騒いでるな・・・」

さつきから興奮した妖精達の声が聞こえる。これも異変に入るって事らしい。

「って、危ねえ！」

魔法銃の引き金を引き、フランに襲いかかっていた妖精を撃ち落とす。

「わ、びつくりした！」

フランは突然の事に驚き、此方を向く。それと同時に俺の真横を撃ち抜いてきた。横を向くと、妖精が落下していくのが見えた。

「危なかったね」

「ああ、気いつけるよ。アイツらいっぱい居やがる」

いつの間にか、それぞれのグループに分かれながら数十体の妖精が近づいてくる。

さて、大量に居る妖精達を蹴散らすにはどうすればいいと思う？ス

ペルカードルールでは、スペルカードを使用すればいいって所だ。
「フラン、手エ出すなよ」

そう伝えると、フランは若干不満そうな顔をしながら渋々後ろに下がる。

「さて、出来立てホヤホヤのスペルカード、やっちゃいますか！」
今日、文さんに聞いておいてよかった。おかげで一気に終わる。

ポケットからカードを取り出し、札を構えるように俺は持つ。

「スペルカード、力を解き放て」

カードに呼びかけるとカードが光り輝き、最適な出力の妖気を放ち始める。

「風符「疾風迅雷」！」

技名を唱え、スペルカードを握り潰す。すると棘のようなオーラが現れ、妖精達へ向かって飛んでいく。

スペルカードは、作るのが難しい弾幕を即座に作り上げる優れ物である。威力は格段に下がるらしいけど、妖精をおっぱらうのには使える。

前方に居た妖精達を蹴散らし、スピードを上げて通る。

咲夜さん達に近づいてきたが、ここでも妖精が暴れているみたいだ。さつきから黒焦げの何かとナイフが刺さった妖精がちらほらと見かける。

「フラン、ちつと急ぐぞ」

「いいけど、私もちよつとは遊ばせてよ」

フランはご機嫌斜めのような顔。

「じゃあ、背中には任せるから付いてこいよ？」

そう言うと、フランは嬉しそうにステッキを取り出して後ろを向きながら後に続く。

妖精達の攻撃は進むにつれて激しくなっていくので、後ろから来る可能性もあるから少し怖い。

魔法の森上空を飛んでいるが、未だに咲夜さん達が見つからない。方角と距離は分かるんだが、どこにも見当たらない。

「妖精達の仕業か・・・」

さつきから道を真っ直ぐ行っても咲夜さん達を見つけられない。これは妖精がする悪戯の一つだ、わざと道に迷わせている。

「面倒だな・・・」

こついう場合、悪戯をしてる奴と勝負して勝てば案内してくれるはずだ。

問題は、どこに居るかだ。探すのも面倒だし、あぶり出すとしよう。

奇怪な夜。「出発」(後書き)

「野郎共、出番だぞ」

リュックの中身を開くと、窮屈そうに入っているシールと腕がありえない報告に曲がって停止しているジャックが居る。

「シール、ジャックを動かしたら協力してここら一帯を撃ちまくるぞ」

シールは外へ飛び出し、ジャックを引っ張り出して魔力を注入し始める。

何をするかと言うと、ここら一帯に弾幕を叩き込んで誘い出そうと考えているのである。

「一斉射撃よーい」

動き始めたジャックは西を、若干ワクワクしているシールは東を、楽しそうに妖精を叩き潰していたフランは南を、スペルカードを取り出した俺は北に、それぞれの方角へ向く。

「てーいっ!」

合図と共に、それぞれの方角めがけて適当に撃ちまくる。

「わ、ちよつと、ストップストップ!」

西から何かが叫び声をあげて飛び出してきた。ワンピースを来た虫の羽が生えている少女だ。ここら一帯のリーダーってどこか?

「あ。おっきくなつたね、むーちゃん。何やってんの?」

むーちゃん? フランはありえないし、ジャックはつい最近まで売り物だったから、シールの事か。

「って、君達むーちゃんの知り合い?」

「俺名付け親だと思ってたのにな・・シールの本当の名前は何だい、お嬢さん」

妖精は此方を向いて少し考え、ポンと手を叩いて一人で納得する。何を納得したんだか。

「むーちゃんは、何の妖精だか分からない、無所属の妖精だからむ

「ーちゃんだよ」

なるほど、確かにシールは何の妖精だか全く分からない。

「で、さっきから道に迷わせてるのはお前？」

「うん。さっきからお空が変だから、君達を見てどういふ事を聞こうと思ったの」

好奇心か。妖精らしい答えだな。

「迷ってる暇ないから、迷わせるの止めて欲しいんだが」

「んー、私に勝ったらいいよ」

大人しい子に見えたが、案外やんちゃな性格のようだ。見かけにはよらないな。

「ー！」

何かを伝えようと、シールが動き回ったりして表現する。もしかして、コイツの相手をしたいのか？

「むーちゃんが相手したいの？いいよ、久しぶりに相手してあげる！」

シールはそう聞くと、すぐさまファイティングポーズを取り、かかってこいと言わんばかりにシャドーボクシングをして挑発する。

さて、思わぬ展開だ。初めてシール単体での戦いが見れる。シールは凄まじい魔力が秘められているが、使いこなせるかと聞かれると正直微妙だな。全く魔法使ってるのを見た事ないし。どうなるかが見ものだな。

奇怪な夜。 「妖精VS妖精」 （前書き）

さて、俺は現在周りに居る妖精達と共に、シールをむーちゃんと呼ぶ妖精との戦いを見守っている。

どちらも一歩も動かないので、まるで西部劇の決闘前の沈黙を彷彿させられる。

「ねえ、光介。どっちが勝つと思う？」

フランがプロレス見てる子供のように聞いてくる。

尻尾を何本か解放して魔力を視覚化させてみたが、明らかに質も量もシールの方が上手だ。

「んー・分かんねえ。魔力だけで考えるとシールだが、相手の強さにもよるな」

「どういう事？魔力はシールちゃんが上なんだから、シールちゃんが勝つと思うよ？」

分からないのは仕方ないか、フランはあまりそういうの気にせず戦うような雰囲気だし。

「単純に力が強いだけじゃ駄目なの。場合によっちゃ、経験で補える事もあるし」

フランが納得するかのようにコクコクと頷き、黙ってシール達を見る。

シールは左手に赤い大きなエネルギー球を作り出し、それを徐々に小さくさせている。俺の圧縮玉の真似だろうが、アレはあまり使える物じゃない。ビビらせて先手を取るのか？

「！」

沈黙が漂う月光に照らされた大空で俺達が見守る中、最初に動いたのはシールだった。

奇怪な夜。 「妖精VS妖精」

シールは作った物を放り投げ、すぐに射撃して撃ち抜く。凄まじい火力の爆発と共にシールはその炎の中へ突進し、エネルギー弾をがむしやらに撃っている。

「神風かよ・・・無謀な事しやる」

この作戦は悪くはない。相手がダメージを受けていたら、追い討ちができてそこから一気に勝てる可能性もあるし、ダメージを受けていなくても相手の意表を突く事ができる。

だがその代わりに、自分もある程度ダメージ受けるから人間とかがやるとリスクが高過ぎる作戦だ。妖精達は死傷を受けても数十分待てば回復するらしいし、そのところは大丈夫だろうが。

「痛っ、前より強くなつてない？むーちゃん」

服が一部焦げていることから、多少喰らったみたいだ。しかし決定打にはなっていないようで、シールの攻撃をスイスイ避けている。

「それっ！」

後方へ回った妖精は、広範囲に広がっていく弾幕を張り巡らせて攻撃を仕掛ける。シールはそれに気づいて、体から魔力を出してそのまま突っ込んでいった。

「ん、ヤケになったのかな？まあいいや」

妖精は攻撃の手を緩めるつもりはなく、どんどん弾を放出し、シールへと向かっていく。

「あー。やつちまったな、アイツ」

シールが纏っているのは、魔力の鎧といったところだろう。エネルギーを中和させて無力化させ、そのまま勢いに乗って体当たりするとかだろうな。

エネルギー弾はシールに触れる前に魔力の鎧によって消え、シールは魔力をナイフのように変化させて振り下ろす。

「ちよっ・・・」

どうやら接近戦は苦手のようで、どうにか避けてはいるが、偶然の産物のような。シールはすぐに振り向き、ナイフを左手に持ち変える。

「ねえ、これってさ「确实だな、賭け事にもなりやしないぜ」

どこで学んだかは分からない、突進と突きを掛け合わせた強力な突き技をしたが、それも避けられたみたいだ。

妖精達もざわつき始めている事から、どうやら殆どが戦っている妖精が勝つと思っていたらしい。

「ストップ、降参するよ！」

服が千切れていたのを見て恐怖心を煽ったのだろうか、目の焦点が合っていない。

「
満天の笑みを浮かべ、シールはナイフを天に掲げて勝利のポーズを取る。

「いやー、負けたのは初めてだよ・強くなったね、むーちゃん」
ため息をついて、まるで教師が感心するかのように言う妖精。

シールは魔力の使い方をつい最近まで知らなかったのだろうか。妖精の発言から考えると、今までシールが勝つ事がなかったのだと思う。

「さて、ウチの者が勝ったんだし、迷わせるの止めてくれないか？」
戦いが終わったので、妖精に近づいていく。

「・わかった。私の名前は大妖精、みんなから大ちゃんって呼ばれてるよ。むーちゃんのことよろしくね？」

チルノのようなガキ大将って感じではなく、お姉さんタイプのリーダーだな。妖精にもこういうタイプの奴がいるみたいだ。

「勝手に着いてきてる感じなんだが、まあ大事にするよ」
大妖精にそう言って、シールの元へ向かう。

シールは此方に気づくと、胸に体当たりしてきて、此方をじーっと見つめてきた。

「よくやったな、シール」

頭をぐしゃぐしゃに撫で、シールを誉めてやった。それだけで喜ぶシールは当初感じていなかった子供っぽさある。賢い部分もあるが、やはり性格は子供のように純粹なんだろう。

ふと時計を見ると、10分ほど時計の針が進んでいた。

奇怪な夜。「妖精VS妖精」（後書き）

「ひゃああああつ、はやあああい!!」

大妖精と別れてから数分後、俺達は遅れた時間を取り戻す為に最高速度で飛行中である。

移動中にフランと競争したが明らかに俺が速かったので、俺がフランを背負って移動する事にした。

シールはリュックの中に入れておいて、そのリュックはフランが背負っている状態だ。

フランは急いでいると分かっているみたいで、ご覧の通りにはしゃいでいる。

「そろそろ着くぜ、フラン!!」

風を切る音が大きいので、叫ぶように声？出して聞こえるように声を掛ける。

目の前には俺が作った家が建っていたが、少し状況が前と違っていた。電気が点けてあるし、光の道が丁度そこで止まって球体を作っていたのだ。

他に3つの球体があったから、俺達以外にも呼ばれた奴が居るみたいだ。

白猫がやる事はよく分からん、何が目的なのだろうか。どうせ何か手伝わせるとかそんなもんだろうけどさ。

「えー、総員着陸にそなえろ。衝撃が半端ないと思う」

そう伝え、すぐにスピードを落として大地へ足を着ける。

「うつ、やべえ・・・!」

地面がえぐれるほどの衝撃を喰らいながら急に止まったので、吐き気とちよつとした痛みが伴ったが、無事着地できた。

「おい、大丈夫・・・」

じゃなかった。フランが完全に気絶していて、首がでろーんとしている。

「ちよつ、起きろ起きろ、目エ覚ませ」

降ろしてからガクガク揺さぶってやると、フランはうつすらと目を開けた。ぼーっとした表情だったが、すぐにシャキツとした顔になり、背筋をピンとさせる。

「氣絶してないよ、ちよつと驚いていただけだから！」

・あからさまに嘘ついてんなあ。

「何でフランが出てきてんだ？今日は大変な事になりそうだぜ」

男口調だが、どう聞いても女の子の声だったので思わず振り向くと、ぱっと見俺と同じくらいの身長の方がいた。

魔法少女のような格好しているが、黒と白をベースにしたファッションだったので、一瞬シマウマが脳内で走った。

「で、フランのお守りが子供か・頼りなさそうだぜ、いったいレミリアは何考えてんだか」

失礼な野郎だなあ。

「一応言うが、俺ア少なくともお前より年上だ。あと運動神経いい」

「・・・オッサン臭い子供って事はわかったぜ」

くっ・・・的確にイラっとする発言しやがる、コイツはあまり好きになれんな。

「魔理沙も呼ばれたの？今夜のパーティー」

「ああ、変な招待状が夕方届いたんだ。今

夜になって外見たらびっくり、空に光の道が出来てるんだぜ？こりや面白そうだと思って来たんだ」

ああ、コイツがフランに勝った魔法使いか。

そんなに強そうには見えないが、魔力を見てみると、シールと同じくらいの魔力の質を持っていた。シールが天才型とすると、コイツは努力型だな。互角の力で戦ったらまずコイツが勝つだろう。

「じゃ、俺はレミリア探してくっから、適当にぶらぶらしていいぞ」

そう伝えて俺はレミリアを探しに、自宅へ入っていった。

「なあ、アイツ誰だ？」

光介が立ち去ったのを見て、フランドールに質問する。

「光介。紅魔館を助けてくれた人だよ、私がお外出られるようにしてくれた人でもあるの！」

そう語るフランドールは、ヒーローを語る時のようにキラキラとした目をしている。

「ってことは、私が昨日来た時には居なかった新人か・・・本当に館救ったのか？」

「うん。尻尾が13本生えたりしてね、私の力をこの指輪で封じてくれてたりしてるんだよ」

そう言い、指輪を自慢げに見せるフランドール。

「ふーん、本当だとしたら化け物だな」

魔理沙は心のどこかで、光介に引かかる部分があった。魔理沙が光介を見た時に感じたのは、何か別の者の目線。

まるで光介の目がもう2つあるかのように、魔理沙はそれを感じた。（気のせいだよな、アイツそんなに悪い奴にも見えないし・・・）

魔理沙はフランドールとの会話に花を咲かせ、自分が感じたその感情を心の奥底へ追いやった。

奇怪な夜。「新入りと大切な物」(前書き)

入るなり、頭から白い毛の塊が降ってきた。

「遅刻するなんていい度胸じゃない。もう演説終わったわよ？」

そう言い、靴を引っ掻いてくる。

「ああ、厄介事があつてな・・・で、このパーティーの目的は何だよ」
わざわざたくさん人を呼び寄せて、コイツは何がしたいのだろうか。
九十九髪なのに俺と同じくらいに見える変ちくりんも居るし、此方
には気づいていないようだ、ルーミアまで居る。

「簡単よ。私は神様で、ここに住むって事を説明して、後は新人の
紹介ね」

そう、白猫は料理が置かれたテーブルに飛び乗り、皿が置いてない
所に座る。

「アン、新人？お前の部下紹介したのかよ」

椅子へ座り、シール達をどこかへ行くように伝えてから白猫に質問
する。

「言ったよね、私は異世界転生とかする神だつて。この世界に異世
界人を連れてきたの」

どうやら、チートがどうこうとかで転生する小説の主人公を呼んだ
みたいだ。なら俺はモブになんのかねえ、少なくともこの会場に男
は居ないようだし。

「さつきから、やたらフランドールはどこだつて騒いでいるのよ。
転生者の世界でここは東方なんとかつて言う、ゲームの世界らしい
わ」

ゲームねえ・・・異世界を管理する白猫が言うから、多分本当の事だ
ろう。俺が出てるなら、強い脇役とかがいいな。主役は合わないだ
ろうし。

「あ、こっちに来るわ」

どこかを見てそう言うので、白猫の目線の先を辿っていくと、高校

生くらののやえない男が走ってくる。

奇怪な夜。 「新入りと大切な物」

「・・・じゃないか。つまんね、ただのモブかよ」

ソイツは、目を獣のようにさせてこっちに來たかと思つたら、すぐに興味が無さそうな目になった。

まさかの初対面でモブ扱い。これには流石にむっとしたが、特に気にしない事にする。

「で、コイツが転生者？」

白猫にそう質問する。どう見てもそこら辺りにいる普通の奴にしか見えない。

「ん？この人、猫美さんの知り合い？」

少年は俺を差しながら、白猫に質問する。

「そうよ、彼が鬼切の所持者。こう見えてとっても強いのよ？」

こう見えてとはなんだ、こう見えてとは。

「あ、ども」

うーむ、コイツ幻想郷に向いてない奴だな。力があるわけでもなさそうだし、こんなんで妖怪と戦えるのかよ。

「紅魔館で特訓してあげてね。能力を付けておいたけど、実戦経験は光介よりないわ」

「能力付けたって・・・？それに特訓ってどういう事だよ」

突然そんな事を言われたため、少し驚きながらも理由を聞く。

「簡単よ。光介はあまり強くないでしょ？この子と特訓して、一緒に強くなればいいじゃない」

まあ、それは納得できるんだが・・・なぜ俺の職場でやるんだろうか。

「・・・僕の名前は、寺島^{テラシマ} 燕^{ツバメ}といいます。あなたは？」

そう、少し不本意そうな顔をして自己紹介をする寺島。

「俺は光介。一応言うが、表情が顔に出てるぞ」

コイツは好きになれそうにないな。表情分かりやすい上に、明らかに俺をバカにしているように思える。絶対手加減してやんねえ。

「じゃ、俺ア用事あるからこれで。明日からよろしくな」

険悪になったらマズそうなので、とりあえず無難な挨拶をしてその場を離れる。本当は用事はないが、とりあえずフランと合流しよう。

「でな、ソイツがてんで魔法の才能が無くてな！」

フランを見つけたが、どうやら話に夢中のような。魔理沙の話を聞いているようで、ワクワクした子供の表情をしている。

（知り合いもろくに居ないパーティーに参加するもんじゃないな、つまらん）

とりあえず近くの壁に寄りかかり、置かれたリンゴジュースを飲む。甘酸っぱい味がするが、どこかリンゴとは違う気がする。多分幻想郷のリンゴは少し違うのか、白猫が持ってきた物だろう。

（護衛は護衛らしく、影から見守っているか）

フランとレミリアが見える位置まで移動し、適当な飲み物を取る。

「へえ、あなたも来たの」

声を掛けられたので、振り返ってみると忘れもしない顔があった。すぐさま身構え、後ろへ下がる。

「あらあら、そこまで驚かなくてもいいじゃない。お姉さん傷つくわ」

ふざけているのか、よよと泣き真似をする紫。

「っせ、一度誘拐されかけてるんだよこっちは」

「まあいいじゃない、少なくとも私はここでさうたりしないわ。霊夢が居るし」

そう言つて、紫は紅魔館から持ってきたワインを飲む。

「一応言うが、おかしな真似してみろよ。紅魔館の護衛としてコテンパンにしてやるかな」

一応それだけ言っておき、近くにあったコップの飲み物を飲む。

「さつきから飲んでばかりじゃない。何か食べたら？」

紫はスパゲティの皿を取って此方へ渡してきた。酒の影響か、少しだけ赤みのかかった顔をしている。

「普段そんなに食わないんだよ。体ちっさいから胃袋もそんなに入らねえんだ」

そうは言っても、今日はまだ夕ご飯を食べていないのでそれを食べる。

「ふーん。ねえ、ちょっとだけ聞いていいかしら？」

「ん、何？」

聞いてみると、こんな事を言った。

「どうしてあなたが雫の力を持っているの？そこが気になってね、教えてくれないかしら」

・・何故知ってるのだろうか、この事を詳しく知っているのはフラシと雫と俺だけだ。盗み聞きでもしたんだろうか。

「訳ありでな・・アイツと契約してる形にあった。今じゃ死んだらしいが、俺の心の中に居座っている」

嘘ついているようには思えないので、いまいち信用はできないが簡潔に事情を話した。紫は少し懐かしむような表情になり、グラスのワインをクルクルと混ぜる。

「雫は幻想郷を作る時に協力してくれた旧友なの。最近探しても見つからなかったけど、そういう理由だったのね・・」

ワインをクイツと飲み干し、紫はグラスを置く。表情はどこか、影がある雰囲気になっていた。

「ねえ、私について何か言ってたなかった？」

俺は椅子に座る。

「アンタについては聞いてねえ。アイツについては、俺はあまり知らないんだよな」

アイツについて知っている事は、大まかな生い立ちと妖怪としての情報、そして今は死んじまって俺に取り憑いてるような状態って事だけだ。

「そう・・・」

紫は近くの空間に切れ目を入れて、何かを取りだす。それは、少し汚れている勾玉だった。

奇怪な夜。「新入りと大切な物」（後書き）

「これは？」

微力だが魔力を放ち続けているので、マジックアイテムの類だろうか。

「私が大昔に貰ったお守りよ。妖怪なのにお守り渡すなんて不思議だったけど、大切に持っていたの。あなたにあげる」

そっくり、紫は勾玉をひょいと投げ、俺はそれを慌ててキャッチした。

「いいのか？」

大切に持っていたお守りを渡す事に。俺は疑問を抱く。

「あなたはダメよ。これは、雫自身に返す意味で渡したの。あなたは半分雫でしょう？」

そりゃそうだな。

「わーった。アイツに話つけておくよ」

お守りをポケットに入れる。触った時に分かったが、ほぼ有り得ない物である事がわかった。

詳細は不明だが、半永久的に魔力を放ち続ける物のようだ。

こんな貴重そうな物をアイツはあげたようだから、相当仲が良かったんだろう。

「じゃ、私はもう帰るから。忘れないでね、いつでも狙っているのを」

ハア、狙うねえ。

「なぜ狙うんだ？ただのモブ相手にしても意味ないだろうに」

一番気になってるのはそこだ。目的で多少人柄が分かるかもしれないしな。

「簡単よ、私は幻想郷を作った妖怪・秩序を乱されたくはないの。何か起こそうとしたら、コイツが黙っちゃいないっていう抑止力が必要なの」

なるほど。警察っていうより自警団って感じだな。

「じゃあね」

空間をぱっくりと広げて、その中へ入っていく紫。

「・・・神は無情である」

そう呟いた頃には、空間の切れ目が閉じていた。

（さて、フランに異常はないか？）

すっかり仕事を忘れていたのでフランの方を見ると、寺島がフランに質問の嵐をぶつけていた。

目が偶然アイドルを見かけた時の中学生みたいになってやがる。

（一応、止めさせてもらおうかね）

フランは困った顔をしている。明らかに迷惑掛けてやがるな、アイツ。

隣に居る魔理沙は、寺島に向かって罵声を浴びせているようだが、全く止まる気配がない。

「あー、何でもこう最近は色々と変な事ばかり起こるんだよ」
愚痴を少しこぼし、フラン達の元へ向かうとした。

奇怪な夜。「酔っ払い」（前書き）

「ちょっと、フランが困ってるじゃないか。いい加減にしるお前！」
どう見ても警戒されている。何したんだ、寺島。

「おい、白黒落ち着け。喧嘩は良くないぞ、ごめんなさいしろ」
そう言うと、今度はこっちに怒りを向けてくる。

「子供扱いすんな！お前フランの家来だろ、アイツと話つけてくれよ。フラン怖がってるんだ」

ああ、本当だ。少し離れた場所で小動物みたいにオドオドしている。
「ちょっと待て、俺は疑問に思ってるだけさ。何でフランドールが居るがここに居るのかって。ずっと閉じ込められてる設定なのに」

「だから気持ち悪いんだよ、そこが。レミリア達以外に、フランの事知ってるのは私と霊夢だけなんだぜ、お前何者だよ！」

ああ、なるほど。多分寺島の世界の東方なんかには、フランドールが出ているんだろう。

だが魔理沙はそれを知らない。知ったとしても、信じないだろう。
だからフランドールを知っている寺島に対して、強い警戒心を感じているようだ。

「あー、もう！ややこしい事起こすなよ寺島ア、ちつと来い」
「うおっ、引つ張るな！」

俺だって引つ張りたかねえよ。

「あのなあ、お前異世界人だってバラしてみろよ。すぐに白い目で見られるからな！」

普通そうだ。頭おかしいんじゃないかって思われる。

「いいじゃないか。俺にはそれを分からせる力があるんだよ、猫美さんから貰った、3つのボーナスがな！」

ボーナス・金とか道具でも貰ったんだろうか、寺島はやたら嬉しそうな顔でそう言う。

「何でもいいから、とりあえずめめ事を起こすな。フランの護衛役として忠告するが、今日の所はもう話しかけない方がいい。フラン怯えてるから、倒せとか命令されたら戦わなきゃいけない。わかったな？」

「へえ・・そんな事してるってのは、まさかアンタも転生者？」

何故か知らんが、やたら鋭い目つきになって質問してくる。

「ン？俺はこの人間だよ。あ、違う、妖怪か。まあ色々あったんだよ」

とりあえず無難な答えを出し、頭に乗っかり始めたシールを見る。顔が赤くなっている少しワイン独特の臭いがする。

「酒飲みやがって・・今日はもう動くな、体に障るぞ」

多分子供であるう、シールが酒を飲んだので、休むよう指示する。

「んー、アンタもこの妖精も、見た事がないな・・ZUNがまだ出してないキャラか？」

「ズン？」

なんだ？ズンって。昔のゲーセンとかに使うニックネームみたいな。な。

「あ、こつちの話。気にしないでいい」

気にすんなど言ってもねえ・・異世界に居る人物とかだと思っただけど、実際はどうなんだろうか。

現在、満天の星空と満月が見える素晴らしい夜の中、パーティーのようなものはまだ続く。これから起こる出来事は、シールに関する重大なお話。

奇怪な夜。「酔っ払い」

フランが帰りたいたいと言い出したので送ってやり、再び会場へ戻ってきた。

今は11時46分。子供ならとくに寝ている時間。

「で、今まで何体の妖怪を退治してきたんですか？」

「200匹倒してからには数えてない・・・それよりも酒持ってきなさいよ！」

戻ってきた時には、部屋がいつの間にか居酒屋のようになっていて、テーブルが全てどかされて全員が床に座っていた。

その中で完全に酔っ払って顔がリンゴのようになっている巫女さんと、巫女さんに質問する寺島の姿を見つける。

寺島は渋々酒をコップへついでいるが、それを一気に飲む14歳の少女。豪快だな！。

「ほら、アンタも飲みなさいよ。美味しいわよ、紫が持ってきた外の世界の酒」

「いや、俺未成年だし・・・」

「いいじゃない、私が飲んでるんだから飲みなさいよ！」

（おお、絡み酒だ。触らぬ神に祟りなし）

そそくさと見つからないようにレミリア達を探す。が・・・その必要はなかったようだ。

「へえー、随分可愛い子居るじゃない・・・ねえ、坊や。お姉さんと遊ぼうよ」

レミリアだった。キャラが全く違うので、思わず誰ッ！？て叫びそうになる。

「誰が坊やだ、光介だっつーの。可愛いって言うな、腕を絡ませるな！」

俺の背筋が凍りつき、第六感が叫び声を上げている。

（何されるか全く分からねえ！）

予感は的中する。急に俺を引き寄せたかと思うと、何かの瓶を口へ押し込んできた。歯に衝撃が走り、鋭い痛みが走る。

「ーッ！歯ア折れたらどうすんだコウモリ野郎！！！」

経験した事がある奴にしか分からないが、ガラスのコップとかで何かを飲んでいる時に友達に叩かれたりすると、叩いてきた友達が嫌いになるくらいの痛いのが来る。

俺は今それを経験した。

「あれー、入ってない・・・咲夜、酒持つてきなさいよ」

完全に酔っ払っているようで、苦笑いを浮かべているパチュリーに話しかけている。

「お、お嬢様？それ以上飲むのは止めたほうが・・・」「何よ、私の言う事が聞けないっての！そうねえ・・・じゃあモノマネやりなさいよ、それで許してあげる」

咲夜さんのモノマネか・・・真面目な人だし、興味はあるな。

「・・・では、犬のモノマネを」

犬・・・誰でもやれそうだな。どれほど上手いんだろうか。

咲夜さんは覚悟を決めたようで、四つん這いになってそれっぽいポーズをする。

「わ、わぁーん」

・・・違う。

恥じらいが残ってるようで、アイドルがモノマネをしろと言われた時の反応みたいだ。あまり面白くないな。

「・・・面白くないわ、猿の真似しなさいよ」

（（鬼だ、鬼がいる））

それを言うなよ、咲夜さんだってやりたくてやっているように見えないんだし。

（た、助けて！）

そうアイコンタクトで俺とパチュリーに助けを求める咲夜さん。止めるのは無理です、一応一番偉い人なので。咲夜さん、ごめんなさい。

パチュリーが立ち上がってどこかへ移動したので、後について俺も立ち上がる。その時に親の敵を見るような目で睨む咲夜さんが見えたが、気のせいだろう。

「喘息はどうだい、パチエリー」

外に出ているパチエリーに声を掛ける。

シールは最初会った時に披露した発光を利用してパチエリーに近づいていったので、それに気づいたパチエリーはシールを捕まえて抱きしめ始める。

「今日は調子がいいの。それより、何で私を呼んだの？小悪魔とが美鈴が居たじゃない」

パチエリー、口調はめんどくさそうにしているようだが、ちょっとにやけ顔になっているんだよね。

素直に楽しいとか言えはいいのに。

「んー、文学少女を外へ出す為にだ。喘息とかっていうのは、運動したり外へ出るようにしたら直るんだぜ？お前喘息さえなければ完璧なのに」

キックベースの時に気づいたのだが、たまに喘息のおかげで魔法が唱えられなかった事があった。多分それがパチエリーの弱点だと思うんだよね。

「そう・・言い方が気に喰わないけど、今夜は少し楽しい気分だから許してあげる」

こういうのって、ツンデレって言うのかねえ？あまりツンデレキャラを見た事がないから基準がわかんねえ。

「この妖精、おっきくなってるない？」

シールだと気づいたようで、少し興味深そうにつついたりしている。シールは嫌そうにムスツとしてるが。

「今更かよ・・起きた時には既に大きくなったんだよね、コイツ。原因は分らないんだ」

コップサイズがいきなり枕サイズになったから、最初はかなりびびったな。今じゃもう見飽きたが。

「確か、どこかの本でシールのような妖精について書いてあったよ
うな・・・？」

奇怪な夜。「酔っ払い」（後書き）

「どういう事が書いてあったんだよ？」

シールの事を今では相棒のように感じているが、シールと会話は出来ないので、全くシールについて知らない。

掴める手掛かりがあるなら、聞いておく方がいいだろう。

「確か、強大な魔力を秘めた伝説の妖精の話に、その妖精が成長する過程があるの。そこがシールと似ているのよ」

続けてパチエリーはその事について語る。

「彼女は当時、自分の強大な魔力を持っているのに自覚がなかった。だが彼女は、母親に教えてもらった下級の魔法を使用していくことに、真夜中に体が大きくなっていった、その魔力が解放されていた。

それを恐れた両親は、その子を置いて逃げていくのよ。自分に火の粉が降りかからないように」

絵空事のような話だが、実際悲しみ考えてみると当てはまる部分がある。

強力な魔力を持っているし、最初に魔法を教えたのは、紅魔館襲撃事件で負傷した人達を治療するのをシールに任せた時だ。

その次の日に大きくなったから、全ては否定できない。

「・・・じゃあコイツがその伝説の妖精か？」

「知らない。妖精達がそういう特性を持っているだけかもしれないし」

パチエリーがそう言い、シールを離す。解放されたシールは、なぜか顔色が悪くなっている。

「なあ、シール顔色悪いような気がするんだが・・・」

「本当だ、確か気分が悪い時に使える魔法があるわよ？」

パチエリーが魔法を詠唱しようと口を開いた時に、遠くから深夜12時を知らせる鐘が鳴り響く。

それを合図にシールの容態が悪化した。頭を抱えて苦しそうな表情を浮かべ、シールの体から大量の魔力が放たれる。

地面が少しえぐれ始めているので、誰が見ても危険な状態にしか見えない。

「え、まさか本当に!？」

パチエリーは動揺し、何かの魔法を唱える。するとシールの魔力の放出が止まり、周辺に漂っていた魔力が消えた。

「マジックアイテムの暴走を止める魔法よ、目的は同じだから大丈夫だと思う」

苦しい表情をしているのは変わらないが、危険な状態ではない。すぐに駆け寄って話しかける。

「オイ、無事か？」

否定。俺を弱々しい力で叩き、何かを訴え始める。口が動いているので、口で伝えようとしている事を読み解くと、こう言っているのが分かった。

逃げて。

「うわっ!」

間に合わなかったようで、先ほどより大量の魔力が此方を襲いかかってきた。

「ロックガード!」

パチユリーが魔法を唱えると、目の前に土の壁が現れ、魔力の軌道を逸らしてくれた。

「光介、長くはもたないから離れて!」

すぐにそこから走って逃げると、壁が一文字に切り裂かれて此方に何かが飛んできた。

「・・・鞭?」

シールを中心に、半透明の魔女のような姿をした魔力体が鞭を持っていた。透明な球体が浮いていて、そこから青い魔力を放ち、此方

を伺っているようにも見える。あれは何だ？

「あれって・・・魔眼じゃない！」

「んだよ、それ。邪気眼か、輪廻眼か？」

パチエリーはどこからか本を取り出し、離れた場所へ飛ぶ。

「魔法の詠唱無しで上級魔法を連発できるようになる契約の一つ。

これは禁術にされているし、習得する方法が消されるほど強力な物なのよ・・・気をつけて」

どうやら、大変な状況になっているらしい。現在会場に居るのは酔っ払い達である。とても戦力になりそうにない。

「パチユリー、一旦湖まで誘導するぞ！」

尻尾を8本解放して、湖まで誘導するように飛ぶ。

すると魔力体も此方を追いかけてくる。ここに被害が出るとレミリア達が危ない。ここからは逃亡戦ってとこだな・・・パチユリーの喘息が悪くならないよう祈るか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2464w/>

東方異界伝

2011年11月23日16時55分発行